昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 X

―― 内館調査の成果とまとめNo.1 ――

浪岡町教育委員会

昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 X

―― 内館調査の成果とまとめNo.1 ――

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年以来東館・北館・内館及び堀跡を主な対象地として実施してきましたが、今回浪岡城跡の主館と推定される内館平場を中心に報告書をまとめることができました。

浪岡城跡が国の史跡指定を受けたのが昭和15年のことですからまもなく半世紀になろうとしています。現在、全国でも有数の保存状況の基に、浪岡城を戦国城館として甦えらせる作業は、ひとえに浪岡町民の歴史に対する愛着に他ならないと考えています。しかし、本報告書でも指摘されているように浪岡城跡の全容解明には今後さらに長期間の研究が必要でしょうし、多方面の識者の意見をお聞きしなければならないでしょう。

当教育委員会としては、平成元年4月1日に「浪岡町歴史資料館」を開館して十年余りに及ぶ発掘調査の成果を公開し、より身近な浪岡城跡を周知していただき、発掘調査終了箇所については「史跡公園」として郷土学習の場となるよう順次整備してゆくつもりであります。

本報告書の発刊にあたって御協力いただいた関係各位には衷心より感謝して皆様の旧に倍する御指導・御便韃をお願い申し上げます。

平成元年3月31日

浪岡町教育委員会

教育長　蝦名俊吉

例　　言

1．本報告書は、昭和61年度・同62年度に実施した浪岡城跡内館平場部分の調査を中心に、昭和59年度・同60年度の調査も付加して構成した内館総集の第１期報告書である。

2．編集は工藤清泰が行ない、各項目の執筆者は以下の通りである。

Ⅰ	内館発掘調査の経緯	（宇野栄二・調査員）
Ⅱ	発掘調査の経過	（工藤清泰）
Ⅲ	浪岡城跡研究参考文献（Ⅰ）	（佐藤　仁・調査員）
Ⅳ	内館検出の主な遺構	（工藤清泰）
Ⅴ	内館における遺構配置	（高島成侑・調査顧問、工藤清泰）
Ⅵ	内館出土陶磁器の特色	（佐々木達夫・調査顧問、工藤清泰）
Ⅶ	浪岡城跡出土の瓦質土器とその考察	（工藤清泰）
Ⅷ	内館出土の石製品	（三浦貞栄治・調査員）
Ⅸ	まとめ	（村越潔・調査顧問、工藤清泰）

3．遺跡の略下は以下の通りである。

ＳＢ　礎石・掘立柱建物跡　　ＳＴ　竪穴建物跡　　ＳＥ　井戸跡　　ＳＤ　溝跡

ＳＦ　焼土遺構　　ＳＸ　性格不明遺構

4．遺物の略称は以下の通りである。

Ｐ　陶磁器・土器類　　Ｆ　鉄・銅製品　　Ｃ　銭貨　　Ｓ　石製品　　Ｂ　骨類

Ｍ　木製品・漆器被膜等　　ＮＲ　自然遺物

5．本書を作製するにあたり整理作業にあたった下記の方々に感謝する。

武田嘉彦・常田紀子・長谷川亘・斉藤とも子・平野正治・工藤馨・工藤真由美・三浦優美

6．本書を作製するにあたり下記の方々から貴重な指導・助言が得られた。記して感謝します。

（敬称略）

井上喜久男・工藤雅樹・浅野晴樹・宇野隆夫・垣内光次郎・坂井秀弥・新藤康夫

柴田龍司・田代隆・高橋与右衛門・土井義夫・中山雅弘・中井均・荻野繁春・

荻原三雄・橋口定志・長谷川成一・藤井直正・福田健司・本沢慎輔・松崎水穂

前川要・三木靖・山口義伸

目　　次

発刊にあたって
例言
Ⅰ．内館発掘調査の経緯……1
Ⅱ．発掘調査の経過……4
Ⅲ．浪岡城跡研究参考文献（Ⅰ）……6
Ⅳ．内館検出の主な遺構……10
Ⅴ．内館における遺構配置……20
Ⅵ．内館出土陶磁器の特色……30
Ⅶ．浪岡城跡出土の瓦質土器とその考察……56
Ⅷ．内館出土の石製品……77
Ⅸ．まとめ……82
写真図版（PL.）……85
付図

Ⅰ　内館発掘調査の経緯

浪岡城跡に最初の発掘の鍬が入ったのは、昭和52年７月であった。当時弘前大学教育学部教授（現国立歴史民俗博物館教授）虎尾俊哉氏を団長に「浪岡城跡整備基本調査団」を結成し、副団長として弘前大学教育学部助教授（現教授）村越潔氏が実質的発掘調査を切り盛りした。現浪岡町教育委員会主事の工藤清泰氏も、短パン姿の学生として移植ベラを動かしていたと記憶している。昭和52年の調査は、東館と北館間の堀跡を中心としたトレンチ調査であったため特筆すべき遺構・遺物は見られなかったものの、平場から出土した陶磁器類と堀跡から出土した木製品、それに堀跡が三重堀の形態を示す事は、その後の発掘調査に大きな期待をいだかせるものであった。

浪岡城が発掘調査成果によって今日のような評価を得る以前、浪岡城研究は北畠精神に傾注する地元の郷土史家を中心に、主として文献史学の方面から進んでいた。しかし、文献調査による城館構造の把握には限界があり、とりわけ浪岡北畠氏関係の文書類は地元に残るものが少なく当時の対外史料を吟味しなければ浪岡北畠氏は、「貴族的」「京都的」等という形容の中で実態を把握しづらい存在であった。

今日、浪岡城跡の発掘調査が十年を経過した事により、空想的浪岡城跡から生活実体の伴った「戦国城館」としての浪岡城が露見している。昭和53年から国庫補助事業として始った（昭和52年度は町単独事業）調査は、東館の西半と北館の一部からメスを入れ、当初主館的位置付けを推定していた北館の全面調査として継続してゆく。昭和54・55・56・57・58・59年にあっては北館平場を主体に北館南・西側の堀跡調査が進展した。昭和59年の途中から北館調査にほぼメドを付け、内館に調査の主体が移る。昭和59・60年度については既刊の報告書も出ているので参照願いたいが、昭和59年度に検出された礎石建物跡（ＳＢ38）はそれまで北館調査では検出されていなかった遺構だっただけに内館に対する評価を変更せざるを得ない結果をもたらした。さらに、調査が進展する中で、北館に対する遺物群の相違も明確になり、内館は城館全体の中で政庁的色彩の濃い館域を構成しているのではないかと推測するに至った。

昭和61・62年度の調査は、一部に堀跡や北館残存部も実施しているが、おおむね内館平場の全容を解明すべく平面発掘を実施した。しかし、石碑や植栽によって未調査部分となった箇所も多々あり、その究明は史跡公園として環境整備する時点で再調査すべきであろう。以下、発掘調査に関する要項を記し、経緯とする。

昭和61（62）年度浪岡城跡発掘調査要項

1．調査の目的

浪岡城跡は、浪岡北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。発掘調査は、将来「史跡公園」として環境整備を実施する上での基礎資料を得るために行なうものである。

2．調査期間

昭和61年4月1日～6月1日（事前作業）

昭和61年6月2日～11月14日（発掘作業）

昭和61年11月15日～昭和62年3月31日（整理作業）

昭和62年6月1日～10月26日（発掘作業）

昭和62年10月27日～昭和63年3月31日（整理作業）

昭和63年4月1日～昭和64年2月20日（報告書作製作業）

3．調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所

浪岡城跡内館平場面積　7,890㎡のうち5,966㎡（76%）

4．調査員等

調査顧問	村越　潔	弘前大学教育学部教授
〃	佐々木達夫	金沢大学文学部助教授
〃	高島　成侑	八戸工業大学助教授
調査員	宇野　栄二	浪岡町文化財審議委員
〃	葛西　善一	浪岡町文化財審議委員
〃	佐藤　仁	弘前高等学校教諭
〃	三浦貞栄治	浪岡高等学校教諭
〃	奈良岡洋一	藤崎園芸高等学校実習教諭

5．調査協力員等

調査協力員　須藤光治・羽柴直人・千葉努

調査補助員　工藤馨・成田和佳子・佐々木里見・武田嘉彦・斉藤とも子・常田紀子・長谷川亘・石岡佳子・工藤真由美・平野正治・三浦優美・成田友彦

調査作業員　工藤瑞枝・山内縫・津川ふさ・高木イツ・東根美津子・山内ヤエ・藤田幸子・佐々木長子・太田容子・久保田鈴子・大平せつ子・塙はる子・村岡せい子・鹿戸京子・鈴木勲・斉藤カチ子・太田芳子・前田昭子・猪股サツエ・秋元ミサ・石村栄子・佐々木かつよ・雪田悦子・鎌田トキ子

6．調査主体者

浪岡町　町長工藤善弘（昭和61年度）

町長阿部幡彦（昭和62年度）

7．調査担当者　（事務局）

浪岡町教育委員会　社会教育課

教　育　長　　蝦名　俊吉

社会教育課長　　鎌田静治（昭和61年度）土岐圭一（昭和62年度）加藤忠弘（昭和63年度）

社会教育係長　　石村正司

主　　事　　工藤清泰（発掘担当）

〃　　成田和子（昭和61年度）

〃　　櫛引顕芳（　〃　）

〃　　木村浩一（発掘担当）

社会教育主事　　佐藤　健（派遣）

主　　事　　一戸鉄広（昭和62年度）

主　　査　　木村秀子（昭和63年度）

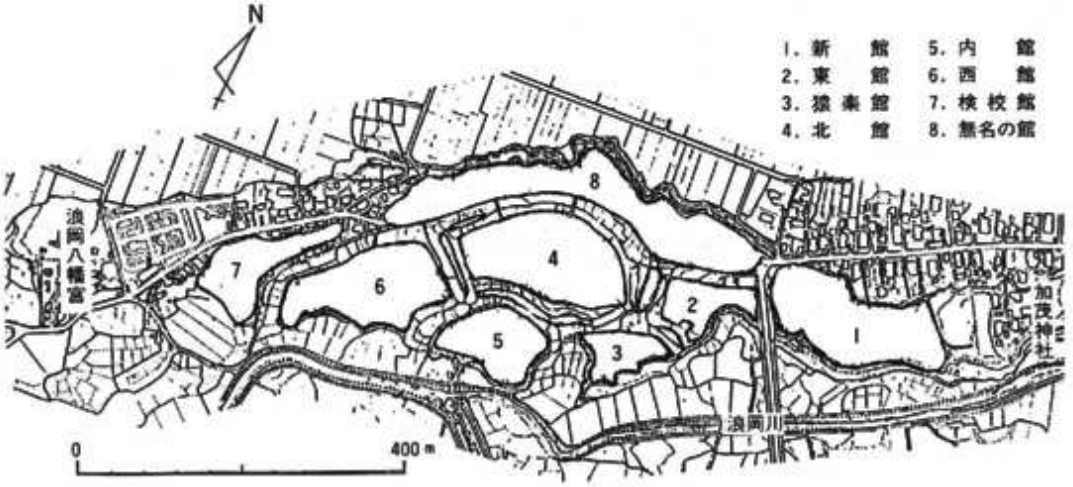
8．調査方法

平場についてはグリッド方式により遺構・遺物の把握に努める。

9．報告書の作製・刊行

浪岡町教育委員会が実施する。

Fig. 1　浪岡城跡全体図



II　調査の経過

内館の調査は昭和59年度から本格的に始まり、昭和62年度で一応のくぎりをつけた。その間内館の平場とともに堀跡の調査や北館残調査箇所の調査等があったため、内館平場の調査面積は5,966㎡という内館平場面積全体の76%に限られた。これは時間的制約の事由でなく、平場に設置している石碑類や植栽のために調査箇所が限定されたことも要因している。さらに、本調査が環境整備を目標としているため、堀跡への傾斜面は遺構崩壊の危険があるため極力手を加えず現状保存に終止した結果でもある。昭和59・60年度については既刊報告書を参照願い、昭和61年以降の経過を概述する。

昭和61年6月2日　平場の調査開始。

6月5日　S・T38・39区から前年未調査の遺構を掘り下げる。

6月9日　SB90検出。SF90検出。

6月10日　SX352から銅製分銅出土。

6月19日　S・T38・39区の実測作業開始。

6月26日　P・Q44区からST292検出。

6月30日　Q42区から木枠を有するSE137井戸跡を検出。

7月1日　R44区第Ⅲ層上面から鋼状鉄製品が36枚一括して出土する。

7月16日～10月3日　主として堀跡の作業を行なう。

10月20日　日本考古学協会八戸大会参加者の見学がある。(約50名)

10月27日　文化庁記念物課河原純之主任調査官指導のため来訪。

11月14日　実測作業を終了し、整理作業に入る。

11月15日～昭和62年3月31日　整理作業

昭和62年6月1日　内館平場の調査残部分の表土除去を始める。

6月16日　S・T40・41・42区の掘り下げおよびT40区南トレンチ（内館の登り口）部分を掘り下げる。T40区から近代以降のガラス瓶等が出土する。

6月18日　T41・42区第Ⅰ・Ⅱ層から手づくねのかわらけと白磁四耳壺・須恵器系甕が出土し、12世紀後半から13世紀前半頃の遺物と考えられたため、該時期の遺構にも注意する。

6月19日　R40区SF100から焼失家屋と思われる遺構が検出される。

6月22日　T41区SX402から鉦が出土する。

6月26日　調査区のうち終了した部分については埋め戻しも始める。

7月1日　SX402の南西隅床面から鋤先・鉄斧が重なりあって出土する。

7月6日　Q・R38区が桝形となるかどうかトレンチを入れて掘り下げる。

7月7日　Q・R38区は精査するにしたがい近代の遺物が出土し、後世の攪乱部分と考えられるようになった。

7月9日～9月7日　北館の調査。

9月10日　中央公民館移動学習「北畠長寿大学」の発掘体験学習を行なう。（PL. 1—(2)）

9月18日　内館平場の中で、樹木等による掘り残し部分があり把握しずらい点はあるが、ほぼ建物跡の配置はわかるようになった。

9月24日　調査区の実測作業を始める。

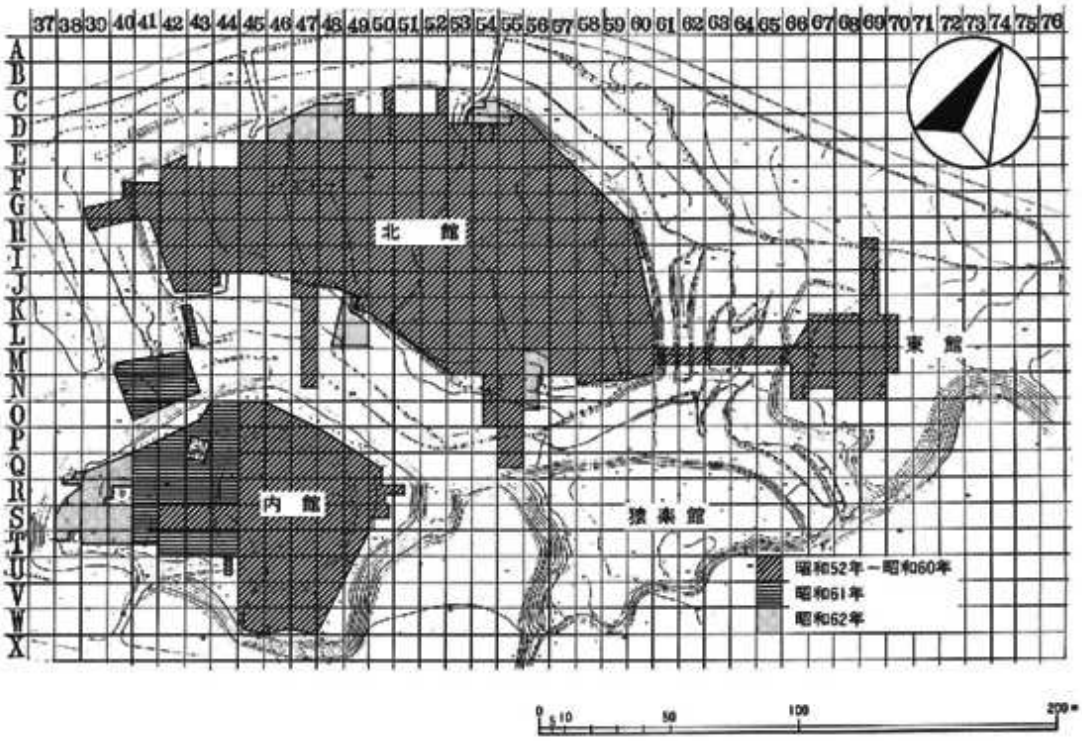
9月25日　調査員等打合せ会を開催し、検出遺構・出土遺物の検討をする。

10月26日　現場作業を終了して整理作業を実施する。

昭和63年4月1日　報告書作製作業を臨時職員2名とともに始める。

※　発掘調査で作製した図面類と出土遺物は浪岡町歴史資料館で保管している。

Fig. 2　発掘調査グリッド配置図



III　浪岡城跡研究参考文献（I）［昭和50年（1975）以降］

※本文献目録は、浪岡城跡の発掘調査が始まった昭和50年代からの文献を提示したもので、それ以前については後日に提示する予定である。

No.	著者名	発行年月日	書名・論文表題	所収書誌名	備考
1	浪岡町史編纂委員	昭50・3・25	浪岡町史資料編第2集		浪岡町
2	奈良岡洋一	昭51・6	史跡浪岡城跡と水木館出土の陶磁器	考古風土記創刊号	鈴木克彦
3	荒井清明	昭51・9・15	新稿 青森県史 I		北文新社
4	浪岡町史編纂委員	昭51・3・28	浪岡町史資料編第3集		浪岡町
5	沼館愛三	昭52・12	津軽諸城の研究（草稿）	みちのく叢書第34集	青森県文化財保護協会
6	弘前大学国史研究会	昭52・8・2	津軽史事典		名著出版
7	浪岡町史編纂委員	昭52・3・28	浪岡町史資料編第4集		浪岡町
8	〃	昭52・3・28	浪岡町史資料編第5集		〃
9	佐藤　仁	昭52・3・1	北畠氏と浪岡城	歴史手帖5巻3号	名著出版
10	村越潔・佐藤仁 他	昭53・3・31	昭和52年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡		浪岡町教委
11	佐藤　仁	昭53・3・31	浪岡城の歴史的経緯	浪岡城跡	〃
12	葛西善一	昭53・3	現浪岡城跡と源常平	青標文報39集 源常平遺跡発掘調査報告書	県教委
13	矢部良明 他	昭53・6	日本出土の中国陶磁		東京国立博物館
14	浪岡町史編纂委員	昭53・3・10	浪岡町史資料編第6集		浪岡町
15	〃	昭53・11・30	浪岡町史資料編第7集		〃
16	〃	昭53・12・15	浪岡町史資料編第8集		〃
17	佐々木達夫	昭54・12	津軽出土の陶磁器と交易	白水7号	
18	浪岡町史編纂委員	昭54・3・31	浪岡町史資料編第9集		浪岡町
19	葛西善一・木村鉄雄 山口政志・工藤清泰	昭54・3・31	昭和53年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡II		浪岡町教委
20	佐藤　仁	昭55・7・15	浪　岡　城	日本城郭大系2 青森・秋田・岩手	新人物往来社
21	〃	昭55・7・15	源　常　館	〃	〃
22	〃	昭55・7・15	大　釈　迦　館	〃	〃
23	〃	昭55・7・15	水　木　館	〃	〃
24	〃	昭55・7・15	兼　町　館	〃	〃
25	〃	昭55・7・15	飯　詰　城	〃	〃
26	〃	昭55・7・15	原　子　館	〃	〃

No	著者名	発行年月日	書名・論文名	所収書誌名	発行
27	工藤清泰 奈良岡洋一	昭56・3・30	昭和54年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅲ		浪岡町教委
28	工藤清泰	昭56・5・20	浪岡城跡よりみた中世末期の陶磁交易について	東奥文化第52号	青森県文化財保護協会
29	佐々木達夫	昭56・3	日本海の陶磁貿易	日本海文化第8号	金沢大学文学部日本海文化研究室
30	工藤清泰	昭56・3	昭和55年度浪岡城跡発掘調査概報	青森県考古学会々報第15号	青森県考古学会
31	工藤清泰・他	昭57・3・31	昭和55年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅳ		浪岡町教委
32	宇野栄二	昭57・3・31	浪岡城跡出土の刻製品とその製作について	浪岡城跡Ⅳ	〃
33	葛西善一	昭57・3・31	木製品雑考	〃	〃
34	奈良岡洋一	昭57・3・31	浪岡城跡出土の土師器と須恵器	〃	〃
35	佐藤　仁	昭57・3・31	浪岡城の落城をめぐる諸問題	〃	〃
36	西野　緑	昭57・3・31	浪岡城跡堀跡の火山灰について	〃	〃
37	工藤清泰	昭57・2・20	青森県の中世考古学について(発表レジュメ)	東奥文化第53号	青森県文化財保護協会
38	佐々木達夫	昭57・2	遺跡出土陶磁器の研究 北日本中世城館跡を中心にして	金沢大学文学部論集史学科篇第2号	金沢大学文学部
39	中村和彦	昭57・4	青森市油川城跡出土の中世遺物	考古風土記第7号	
40	工藤清泰 齋藤芳光	昭58・3・31	昭和56年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅴ		浪岡町教委
41	鈴木克彦 工藤清泰	昭58・5・30	青森から出土した宋元陶磁	月刊考古学ジャーナル No.217	ニューサイエンス社
42	工藤清泰	昭58・8・1	(青森県の考古学)第6章中世(鎌倉・室町時代)	青森県の考古学	青森大学出版局
43	工藤清泰 佐々木浩一	昭58・9・17	青森県の中世陶器(解説文)	東北の中世陶器	東北歴史資料館
44	佐藤　仁	昭58・3・31	中世の津軽	青森県の中世城館	県教委
45	工藤清泰	昭58・3・31	大釈迦館	〃	〃
46	〃	〃	川原館	〃	〃
47	〃	〃	史跡浪岡城	〃	〃
48	〃	〃	源常館	〃	〃
49	〃	〃	王余魚沢館	〃	〃
50	〃	〃	木郷館	〃	〃
51	〃	〃	飯館	〃	〃
52	〃	〃	北畠館	〃	〃
53	〃	〃	吉内館	〃	〃
54	佐藤　仁	〃	原子館	〃	〃
55	〃	〃	水木館	青森県の中世城館	県教委
56	工藤清泰・他	昭59・3・31	昭和57年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅵ		浪岡町教委
57	三辻利一	昭59・3・31	浪岡城遺跡出土珠洲系土器の胎土分析	浪岡城跡Ⅵ	〃
58	工藤清泰	昭59・9・10	浪岡城跡出土の陶磁器	貿易陶磁研究第4号	日本貿易陶磁研究会

No	著者名	発行年月日	書名・論文表題	所収書誌名	備考
59	村越潔・他5名	昭59・6・30	史跡浪岡城跡環境整備基本構想		浪岡町
60	木村浩 工藤清泰	昭59・4・25	浪岡城跡出土の古銭について	東奥文化第55号	青森県文化財保護協会
61	中村和彦	昭59	青森市油川城跡から出土した中世資料	考古風土記第9号	
62	佐々木達夫	昭60・3・30	青森県出土の陶磁器について	青森県埋蔵文化財調査センター所報第4号	県埋文センター
63	佐藤　仁	昭60・11・2	史料的にみた浪岡城と発掘調査	1985シンポジウム中世考古学の諸問題資料集	浪岡町教委
64	高島成侑	昭60・11・2	中世建築遺構の諸問題	〃	〃
65	工藤清泰	昭60・11・2	中世考古学における出土遺物の諸問題	〃	〃
66	〃	昭60・12・1	青森県　1901～1984	日本貿易陶磁文献目録Ⅰ－発掘調査報告書	日本貿易陶磁研究会
67	工藤清泰・他 村越　潔	昭60・3・31	昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅶ		浪岡町教委
68	森本岩太郎	昭60・3・31	浪岡城出土の人骨について	浪岡城跡Ⅶ	〃
69	佐々木達夫	昭60・3・31	浪岡城跡出土の陶磁器	〃	〃
70	高島成侑	昭60・3・31	浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について	〃	〃
71	三浦貞栄治	昭60・3・31	浪岡城跡北館出土の生活用具について	〃	〃
72	工藤清泰	昭60・3・31	浪岡城跡北館出土の鋳銅関係遺物について	〃	〃
73	葛西啓一	昭60・3・31	浪岡城跡出土の木製具について	〃	〃
74	奈良岡洋一	昭60・3・31	浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について	〃	〃
75	水野和雄	昭60・3	日本石硯考…出土品を中心に…	考古学雑誌第70巻4号	日本考古学会
76	長谷川成一	昭60・12・8	総説「津軽郡中名字の世界」	角川日本地名大辞典2青森県	角川書店
77	工藤清泰 木村浩一・他	昭61・3・31	昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅷ		浪岡町教委
78	三浦貞栄治	昭61・3・31	浪岡城跡内館出土の伏せ鉄鍋について	浪岡城跡Ⅷ	〃
79	工藤清泰	昭61・3・31	浪岡城跡内館出土の備蓄銭貨について	〃	〃
80	斎藤利男	昭61・2・20	浪岡城(解説文)	みちのく伝統文化Ⅳ歴史編	小学館
81	平山久夫	昭61・6	「津軽郡中名字」考	北奥文化第7号	
82	外山至生	昭61・6	附 浪岡北畠氏資料	〃	
83	木村浩一	昭61・11・25	青森・浪岡城跡	木簡研究第8号	木簡学会
84	鈴木克彦	昭61・6・30	日本の古代遺跡29青森		保育社
85	橋口定志	昭61・5・30	1985年の考古学界の動向中世・近世(東日本)	考古学ジャーナルNo.263	ニューサイエンス社
86	小井川和夫	昭61・4・1	館跡が語る武士の生活	図説発掘が語る日本史第1巻北海道・東北	新人物往来社
87	高島成侑	昭61・2	浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について	八戸工業大学紀要第5巻	
88	工藤清泰	昭62・2・28	「浪岡城跡からみた中世遺物」レジュメ	第4回よねしろ考古学研究発表会資料	
89	浪岡町史編纂委員	昭62・3・31	浪岡町史資料編第17集		浪岡町
90	工藤清泰	昭62・8・5	青森県浪岡城跡発掘調査十年の歩み	東洋陶磁学会会報第9号	東洋陶磁学会

No	著書名	発行年月日	著名・論文表題	所収書誌名	備考
91	木村浩一 工藤清泰	昭63・1・31	昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書浪岡城跡Ⅱ		浪岡町教委
92	工藤清泰	昭63・4・23	北日本・浪岡城戦国城館の中世遺物	東国土器研究 第1号	東国土器研究会
93	長谷川成一	昭63・7・1	天正十九年の奥羽仕置管見	月刊歴史手帖 第16巻7号	名著出版
94	〃	昭63・2	天正十八年の奥羽仕置と北奥・蝦夷島	北奥地域史の研究 ―北からの視点―	〃
95	浪岡町史編纂委員	昭63・3・31	浪岡町史資料編第18集		浪岡町
96	遠藤　巌	昭63・6・25	北奥羽の戦乱	戦乱の日本史 第8巻	第1法規
97	〃	昭63・5・20	応永初期の蝦夷反乱 ―中世国家の蝦夷問題によせて―	北からの日本史	三省堂
98	朝尾直弘	昭63・11・20	大系日本の歴史8天下一統		小学館
99	百瀬正恒 橋本久和	昭63・12・30	中世平安京の土器様相と各地への展開	考古学ジャーナル No.299	ニューサイエンス社
100	工藤清泰	昭63・10・31	浪岡城跡発掘調査成果から見た北日本における中世城館研究の課題	よねしろ考古 第4号	よねしろ考古学研究会
101	橋口定志	平元・2・1	戦国期城館研究の問題点	季刊考古学 第26号	雄山閣
102	工藤清泰	平元・2・1	戦国城館の発掘―浪岡城(北奥)	〃	〃
103	足利古墳	平元・2・1	出土銭からみた撰銭令	〃	〃
104	亀井明徳	平元・2・1	貿易陶磁器	〃	〃

IV　内館検出の主な遺構

内館から検出された主な遺構として、礎石建物跡・掘立柱建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・不明竪穴遺構・溝跡・焼土遺構等がある。礎石建物跡については、礎石を据えつけるための掘り込みがあり完成時には礎石が露出しないことから、一般的な礎石建物跡ではないため掘立柱建物の範囲に含めて報告する。

1．掘立柱建物跡（付図参照）

現在まで27棟の建物跡が確認でき、短軸0間の塀状の建物跡（ＳＢ60）を除けば、１×６間１棟、２×２間１棟、２×３間１棟、２×４間２棟、２×５間１棟、３×３間２棟、３×４間５棟、３×５間２棟、３×６間１棟、３×７間２棟、４×５間４棟、４×６間１棟、４×７間１棟、５×７間２棟、６×７間１棟が存在する。長軸方向のあり方をみると、南北長軸の類はN－６°～25°－W、東西軸の類はW－９°～26°－Sの中にほぼおさまり、ＳＢ66とＳＢ73は占地の影響か上記の範囲からはみ出ている。いずれにしても、建物を造る上では軸方向をそろえた状況で建築し、占地や周辺の地形状況による軸方向のくみ替えはあまり存在しなかったと考えられる。柱穴の出土遺物から構築時期を推定するのは困難な状況で竪穴建物跡・井戸跡等の重複関係から考えざるをえない状況にある。

Ch. 1　掘立柱建物跡集計表

No.	遺構名	検出区	規模(間数)	柱穴（数）	棟方向	柱穴からの主な出土遺物	重複関係	備考
1	ＳＢ37	O・P　45・46	6×3		W－12°－S	青磁	ＳＥ98(新)	
2	ＳＢ38(母家) ＳＢ38(下屋)	S・T　46・47・48 S・T　48	7×4 6×3	南側1×1 北側1×1	W　16°　S W－14°－S	青磁(蓮弁)・瓦(丸)・瓦(丸)	ＳＴ252(新)・ＳＸ331(新) ＳＸ236(新)	
3	ＳＢ39	P・Q　46・47	5×3	東側1×4・北側1×2・南側1×2	N－12°－W		ＳＥ85(新)・ＳＥ95(新)	
4	ＳＢ40	O・P　44・45	6×4		N　25°　W		ＳＴ253(新)・ＳＸ371(新)	
5	ＳＢ41	R・S　46・47	7×3	北側1×3	W－20°－S	瓦器(高)・白(瓦)・青(磁)	ＳＴ250(不)・ＳＥ85(不)・ＳＸ202(不) ＳＸ208(不)・ＳＸ224(不)	
6	ＳＢ42	P・Q　45・46	4×3	西側1×3	N－18°　W		ＳＥ89(不)・ＳＥ98(不)・ＳＸ222(不)	
7	ＳＢ43	Q　44・45	4×3	西側1×3	N－25°－W		ＳＥ159(不)・ＳＸ226(不)	
8	ＳＢ44	U・V　45	3×2	南側1×3	N－6°－W	瓦器(高)・青(高)・銭貨	ＳＴ258(新)	
9	ＳＢ46	O・P　45・46	4×2		W　13°　S		ＳＥ92(不)	
10	ＳＢ47	O・P　45・46	5×2		W－20°－S		ＳＥ93(不)	
11	ＳＢ63	V・W　46・47	6×6		W－13°－S	瓦器(丸)・砥石・銭貨・鉄釘	ＳＴ279(新)	
12	ＳＢ83	Q・R　48・49・50	7×3		N－9°－W	銭貨・鉄釘・不明銅	ＳＥ119(不)・ＳＸ278(不)・ＳＸ301(不)	
13	ＳＢ85	R　47・48	7×3		W　13°　S		ＳＥ120(新)・ＳＸ275(新)	
14	ＳＢ86	Q・R　48・49・50	5×4		N－8°－W	青(高)・白(瓦)・銭貨・砥・鉄釘	ＳＸ276(不)・ＳＸ279(不)・ＳＤ85(不)	
15	ＳＢ87	Q・R　49・50	3×2		W－11°－S	砥石	ＳＥ127(新)・ＳＸ275(新)	
16	ＳＢ88	S・T・U　48・49	7×6	南側1×3	N－10°－W	瓦器(碗)・土師(鍋)・銭貨 角釘・土器	ＳＴ223(新)・ＳＸ267(不)・ＳＸ268(不) ＳＸ312(不)・ＳＤ96(新)・ＳＤ98(新)	
17	ＳＢ70	R・S　42・43	5×4	東側1×1	W　9°　S	瓦器・かわらけ・鉄釘	ＳＴ246(新)・ＳＴ247(新)・ＳＴ280(新) ＳＸ327(新)・ＳＸ330(新)	
18	ＳＢ72	Q・R　42・43	5×3	北側1×1	N－22°－W	青(磁)・白(瓦)・銭貨・小礼	ＳＴ280(新)・ＳＸ330(新)	
19	ＳＢ73	Q・R　48・49	3×3		N　46°　W	青(磁)(高)・銭貨・不明銅	ＳＢ68(不)・ＳＤ95(新)	
20	ＳＢ90	S・T　38・39	5×4	東側1×2	N－12°－W	鬼瓦(つば)・鉄釘	ＳＸ341(新)・ＳＸ346(新)	
21	ＳＢ92	Q・R　43・44	5×4		N　24°　W	青(磁)・白(瓦)・陶(高)・越前 鬼瓦(鍋)・銭貨・不明鉄	ＳＴ288(新)・ＳＥ96(新)・ＳＥ159(新) ＳＥ160(新)	
22	ＳＢ93	R・S　39・40	7×5		W－20°－S		ＳＸ342(新)	
23	ＳＢ95	R・S　38・39	4×3	北側1×3	N－24°　W	銭貨・小礼		
24	ＳＢ100	R・S　47・48	4×2	東側1×3	N－9°－W	銭貨	ＳＴ258(不)	
25	ＳＢ101	S　45・46	4×3		N－15°－W			
26	ＳＢ102	T　42・43	4×2		W－20°　S		ＳＴ301(新)・ＳＴ302(新)・ＳＴ303(新) ＳＥ178(新)・ＳＸ402(新)・ＳＸ404(新)	
27	ＳＢ103	V　45	2×2		N－6°－W			

2．竪穴建物跡（付図参照）

竪穴建物跡の定義については以前にも報告書等で記しているが、名称については今後「竪穴建物跡」で統一する予定である。「竪穴遺構」という名称はその概念に幅があることと、掘立・礎石建物跡と同時期に共存して生活空間を構成していることから、「○○建物跡」とした方がより具体的に遺構の性格をあらわしていると考えているからである。現在までの発掘調査成果に依拠すると、掘立柱建物跡や井戸跡の配置と密接な関連を有して構築され、住居ないしは作業場・倉庫的な機能を推定でき、浪岡城跡においては下人（職人も含む）住居や作業場的機能を考えている。

内館からは61棟の建物跡が確認され、出入部と思われる張り出しを有する例が26棟、確認できなかった例が35棟である。構築方法は、方形の竪穴を掘り壁面ないしは棟通りに柱穴を設定して上屋を築いていると考えられる。柱穴配置にも各種みられるが、占地・時期差等については検討中の段階であり、北館に比較して完掘した例が少ないため充分な対応ができない状況である。出土遺物の面からある程度の時期差を理解できたので、後述の配置問題で提起しており参照願いたい。付図でもわかる通り、重複関係の激しい箇所では４～５期に亘る例があり、構築時期別の配置把握にはさらに時間を要すると思われる。

Ch. 2　竪穴建物跡集計表

No	遺構名	地区		規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	主な出土遺物	重複関係	備考
1	ＳＴ246	R・S	41・42	445×370×40		青(磁)(鉢)・白(皿)・染(鉢)・美濃(瓶)・越前・鉄釘	ＳＢ70(新)	
2	ＳＴ247	R・S	42・43	500×490×70		青(磁)(鉢)・白(鉢)・染(鉢)・美濃・越前・珠洲・鉄釘 鉄刀・不明鉄・不明銅・石臼・炭化米	ＳＸ324(新)・ＳＸ330(不)・ＳＢ70(同)	
3	ＳＴ248	P	46	216×177×40	W－12°－S	青(磁)・白(皿)・染(鉢)・瓦器・鉄釘		
4	ＳＴ249	O・P	47	(700)×(450)×(30)		青(鉢)・白(鉢)・越前・鉄釘・不明鉄・漆器		
5	ＳＴ250	R	47	325×290×28		青(磁)・白(皿)・染(皿)・土師・漆塗物・鉄釘・不明鉄	ＳＢ41(新)	
6	ＳＴ251	S	48・49	(400)×336×23		鉄釘・鉄鏃・不明銅・鉄釘		
7	ＳＴ252	T	47	262×257×36	N－84°－E	青(磁)・鉄釘・不明鉄・不明銅・鉄刀	ＳＸ228(同)・ＳＸ225(同)・ＳＸ256(同) ＳＢ38(同)	
8	ＳＴ253	O	44・45	910×570×46	N－63°－E	青(磁)・白(皿)・珠洲(鉢)・鉄釘・鉄鏃・鉄刀	ＳＴ296(新)・ＳＥ108(新)・ＳＸ371B(新) ＳＢ41(新)	
9	ＳＴ254	T・U	47・48	295×282×88	N－10°－W	青(磁)(鉢)・染(鉢)・青白磁・漆椀・瓦器・鉄釘・鉄刀	ＳＴ262(同)・ＳＥ128(同)	
10	ＳＴ256	T・U	45	494×440×32		不明鉄	ＳＴ257(新)・ＳＤ80(同)・ＳＤ81(同)	
11	ＳＴ257	U	45	380×225×16		鉄釘・鉄刀・不明鉄	ＳＴ256(同)・ＳＤ82(同)	
12	ＳＴ258	U・V	45	550×400×15	W－70°－S	青(磁)・白(皿)・美濃・珠洲(不)・瓦器・鉄釘・不明鉄 鉄刀・小刀・不明銅	ＳＤ92(不)・ＳＤ44(新)・ＳＦ84(新)	
13	ＳＴ259	W	45・46	277×250×23	N－80°－E	青(磁)(鉢)・白(皿)・瓦器(不)・漆器・鉄釘・鉄鏃・石臼	ＳＸ275(不)	
14	ＳＴ260	V	46・47	444×157×16		青(磁)・美濃(茶壺)・不明銅・銅牛	ＳＤ83(同)	
15	ＳＴ261	U	47	380×395×40	N－65°－E	青(磁)・珠洲(不)・不明鉄・小刀・鉄釘	ＳＦ103(不)・ＳＸ240(同)・ＳＸ239(新) ＳＦ63(新)	
16	ＳＴ262	T	47	370×280×30		鉄釘・刀・不明鉄・鉄刀・不明銅	ＳＴ254(新)・ＳＤ84(同)	
17	ＳＴ263	U	46・47	626×602×35		刀・陶器物・鉄鏃・鉄釘	ＳＸ250(同)・ＳＤ81(同)	
18	ＳＴ270	R	51	(465)×(252)×6	W－7°－S	美濃(皿)・瀬戸(カメ)・珠洲(不)・碧		
19	ＳＴ271	R	51	(302)×(145)×26	N－85°－E	砥(同)		
20	ＳＴ272	R	49	450×112×26	W－26°－S	鉄釘・火打石	ＳＥ130(新)・ＳＸ290(新)	
21	ＳＴ273	S	48	250×250×30	S－13°－E	砥(同)・銅鉄金具・鉄釘	ＳＥ135(新)	
22	ＳＴ274	R	50	380×220×24		青(磁)(皿)・白(皿)・美濃(鉢)・瓦器・鉄釘・鉄刀	ＳＸ309(同)・ＳＸ277(新)・ＳＸ298(同)	
23	ＳＴ275	V・W	45	400×320×20	W－32°－S	珠洲(不)	ＳＸ273(同)・ＳＢ60(新)	
24	ＳＴ277	Q・R	42・44	465×395×40	S－26°－E	青(磁)(鉢)・白(皿)・美濃・越前・瓦器・漆椀(不) 漆器・鉄釘・不明鉄・鉄刀・小刀・銅牛	ＳＥ140(同)・ＳＥ156(新)	
25	ＳＴ280	S	42	410×375×20		青(磁)(皿)・白(皿)・美濃(鉢)・瓦器・珠洲(不)・鉄釘 漆器・不明鉄・鉄刀	ＳＴ282(同)・ＳＸ327(同)・ＳＢ70(同) ＳＢ71(新)	

No	遺構名	検出区		規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	主な出土遺物	重複関係	備考
26	S T281	S	43	250×250×50		青(磁)・白(陶)・染(陶)(磁)・美濃(陶)・瓷器(不) 銭貨・火箸・小札・不明鉄・刀・鉄釘・不明銅・砥石		
27	S T282	R	42	230×200×50		白(陶)・鉄釘	S T288(新)・S X337(新)・S B70(古)	
28	S T283	H	42	270×350×20		青(磁)(陶)・白(陶)・染(磁)(陶)・美濃(陶)・珠洲 溶融物・鉄製・小札・不明鉄・火箸・鉄釘	S X330(不)・S B70(古)・S B71(古)	
29	S T290	R	41	(350)×(250)×40		白(陶)・越前(カメ)・銭貨・小刀・鉄釘	S T291(新)・S T305(新)	
30	S T291	R	41	397×302×40		青(磁)・白(陶)・染(陶)・瓷器・小札・鉄釘	S T290(古)・S X366(古)	
31	S T292	P	42	(480)×(500)×27		青(磁)・白(陶)・美濃(陶)・銭貨・鉄釘・不明鉄・漆器	S X363(古)	
32	S T293	Q	43・44	600×480×50	N－1°－W	青(磁)(陶)・白(陶)・染(陶)・美濃(陶)(陶)・越前(カメ)・瓷 器(不)・瓦器・香炉・銭貨・鉄釘・不明鉄・鉄・キセル	S E150(新)・S B90(古)	
33	S T294	O	44	620×490×98	W 21°－S	青(磁)(陶)・白(陶)・染(磁)(陶)・美濃(陶)・珠洲(陶) 越前(カメ)・銭貨・小札・鉄釘・不明鉄・不明銅・漆器	S T253(古)・S X337(古)・S B(古)・ S X385(古)	
34	S T297	R	40	300×350×25	S－17°－E	青(磁)・染(陶)・瓦器・銭貨・小札・鉄釘・鑓・不明鉄 不明銅	S X397(古)・S X332(古)・S X398(古)	
35	S T300	Q	39・40	410×310×30		美濃(瓷器)	S X400(新)	
36	S T302	T	42・43	400×310×45	N－26°－W	青(磁)・白(陶)・染(陶)・美濃(陶)・常滑(カメ)・中国製(つ ぼ)・瓷器(不)・銭貨・鉄釘・不明鉄・不明銅・漆器・石臼	S T301(古)・S B102(古)	
37	S T304	S	41	615×433×34	N－65°－W	青(磁)(陶)・白(磁)(陶)・染(磁)(陶)・美濃(磁)(陶)・瓦器 (瓷)・越前(つぼ)(瓷)・瓦器・小札・鉄釘・不明鉄・鉄棒・不 明銅・銭貨・白鞘・漆器・臼	S T305(古)・S X412(古)	
38	S T305	R・S	41	370×330×30	S－11°－E	青(磁)・白(陶)(瓦)・染(瓦)・珠洲(カメ)・瓦器・かわらけ 銭貨・鉄釘・漆器	S T290(古)・S T304(新)・S E127(新)	
39	S T306	T	40・41	400×(90)×50		瓦器	S X413(古)	
40	S T307	R・S	40	(130)×(95)×65		青(磁)・染(陶)・越前(カメ)・鉄釘・火打金・銅銭・石臼・砥石	S E181(古)	
41	S X206	P・Q	47	(400)×(340)×35		青(磁)・白(陶)・美濃・越前(カメ)・珠洲(不)・銭貨・鉄釘 不明鉄・鉄棒・不明銅・硯・漆器	S E90(新)・S X211(新)・S X212(新)	
42	S X212			(250)×(250)×35		青(磁)・白(陶)・染(磁)・美濃・溶融物・銭貨・小刀・小札 鉄釘・鉄棒・不明銅・漆器	S E90(新)・S X206(古)・S X211(新)	
43	S X213	R	45	350×250×60		青(磁)・染(磁)(陶)・美濃(磁)・瓷器(不)・表口・溶解物 銭貨・鏡・小札・鉄釘・鑓鉄・不明銅・漆器・臼	S X224(古)	
44	S X222	Q	45・46	303×243×42		青(磁)・美濃・鉄製・鉄釘・漆器	S X258(不)・S B(古)(新)	
45	S X274	W	46	(250)×(250)×25	N－64°－E	白(陶)・染(瓦)・美濃(陶)・銭貨・鉄製・鉄・鉄釘 不明鉄・炭化米	S T250(新)	
46	S X276	W	45	300×270×45		銭貨・鉄釘・鉄棒	S T250(新)	
47	S X287	S	49	280×(210)×20		白(陶)・瓷器(不)・取手・銭貨・ナタ刀・鉄釘・鉄棒・不明鉄 砥石・炭化米	S B60(不)	
48	S X293	R	49	185×110×60		鉄釘	S X219(新)	
49	S X305	S	48	360×360×		染・銭貨・鉄製・鉄釘	S B100(不)	
50	S X340	S	38	230×220×28		青(磁)・美濃(陶)・越前(カメ)・瓦器・銭貨・鉄釘 鉄棒・鉄工具		
51	S X360	Q	41	420×330×32	N－25°－W	青(磁)・白(瓦)・染(陶)・瓦器・かわらけ・瓷器(不)・鉄製 小札・鉄釘・不明鉄・石臼・凡熱石・漆器		
52	S X362	Q	41	(285)×(275)×37	S－30°－E	染(陶)・小柄・鉄釘・不明銅・漆器	S X368(新)	
53	S X366	Q・R	41	522×387×34		青(磁)・白(陶)・染(磁)(陶)・美濃(陶)・越前(カメ)・銭貨 手引金・鉄釘・鉄棒・不明鉄・不明銅・炭化米	S T291(新)・S X370(新)	
54	S X368	P・Q	41	970×450×25	N－60°－E	青(陶)・白(陶)・珠洲(カメ)・越前(カメ)・銭貨・鉄釘・不明 鉄・鉄鏃玉・不明銅・自然石・漆器	S T292(不)・S X362(古)・S X363(新) S X369(不)	
55	S X371	O	44	(540)×530×46	N－62°－E	青(磁)・白(陶)・染(瓦)・美濃・珠洲(陶)・越前(カメ)・瓦器 銭貨・鉄鏃・不明銅・自然石・漆器・炭化米・馬面	S T253(古)・S T294(新)	
56	S X376	P	44	238×175×20		青(陶)・白・瓷器(不)・不明銅	S X377(古)	
57	S X377	P	44	400×310×25	S 25°－E	青(磁)(陶)・白(陶)・銭貨・不明鉄	S X376(新)	
58	S X398	Q	40	(335)×253×22		白(陶)・銭貨・小札・鉄棒	S T297(新)	
59	S X402	T	41・42	450×325×32	N－3°－W	青(磁)・白(陶)・染(陶)・瓦器・越前・かわらけ・瓷器(不) 銭貨・小札・皮札・鑓先・鑓鉄・鉄釘・砥石・自然石	S T245(不)・S B102(古)	
60	S X410	T	42	284×264×26		青(磁)・越前(カメ)・銭貨・不明金	S T303(新)・S B102(古)	
61	S X412	R	41・42	445×318×48		瓦器・銭貨	S T304(古)	

3．井戸跡（付図参照）

井戸跡は総数117基を確認しているが、完掘したのはわずか７基であり作業上の危険度からプラン確認に終止した例が多いため、集計表中のすべてが井戸跡とは言いきれない点がある。しかしながら掘り下げ部から１ｍのボーリング棒でも底まで達することができないため、井戸的な機能は有していると考えられ、不明遺構としたもの（ＳＸ表記）にも同類の例が多々みられた。

井戸跡の中で木枠を有する例（ＳＥ82・86・111・137・138）が５例、曲物を入れていた例（ＳＥ80Ａ）が１例あり、木枠は隅柱横桟型のものだけであった。それ以外は素掘りのものが大部分と考えられ、北館と比較して素掘りの井戸跡の率が高い。出土遺物はすべて覆土中のものであり、自然堆積と考えられる例はなく、すべて埋め戻されている。

Ch.3　井戸跡集計表

No.	遺構名	検出区		規模(長径×短径×深さ)cm	木枠の有無	主な出土遺物	重複関係	備考
1	ＳＥ80Ａ	S	45	257×120×415		青(磁)白(陶)白(瓦)染(瓦)黒褐(瓦)鉄釘(カメ)土師(不) 銭貨・鉄釘・不明鉄・不明銅・石臼・自然石・礫石・漆器・くるみ	ＳＥ80Ｂ(不)	曲物枠
2	ＳＥ80Ｂ	R	45	150×150×(250)		青(磁)・書状・越前(カメ)・土師・砥石	ＳＥ80Ａ(不)	
3	ＳＥ81	S	45	160×156×(105)		白(瓦)・染(瓦)・黒褐(瓦)(陶)・漆塗・小札・鉄釘・不明鉄 不明銅	ＳＢ103(不)	
4	ＳＥ82	P	47	274×270×450	隅柱横桟型(二段)	青(磁)(陶)・白(陶)・黒褐(瓦)・地蔵・漆解物・瓦器・銭貨 鉄鏃・小刀・鉄槍・鉄刀・不明鉄・不明銅・硯・＊焦石 赤鳥・書・加工木・犬の歯		
5	ＳＥ84	P	46	308×306×(120)		青(磁)・白(陶)・染(瓦)・黒褐(瓦)・土師(カメ)・越前(カメ)(陶) 書状・鉄鏃・小札・鉄刀・鉄滓・不明鉄・石臼・漆器・硯	ＳＢ30(Ｂ)	
6	ＳＥ85	H	46	220×220×(150)		白(瓦)・瓦器・漆解物・かわらけ・羽口・土師(不)・鉄釘・鉄滓	ＳＢ41(不)	
7	ＳＥ86	O・P	45・46	350×320×515	隅柱横桟型(二段)	青(磁)(瓦)・白(瓦)・染(瓦)・黒褐(瓦)(陶)・地蔵(瓦)・漆塗・瓦器 鉄鏃・鉄釘(?)・銭貨・鉄鍋・かすがい・小札・火箸・鉄釘 鉄滓・不明鉄・石臼・漆器・書・動物・櫛・桶	ＳＥ90(新)	
8	ＳＥ87	Q	45	270×270×(200)		青(磁)・白(陶)・染(陶)・黒褐・漆解物・瓦器・土師(不)・銭貨 鉄釘・不明鉄・不明銅・砥石・漆器・書・馬歯	ＳＸ214(新)	
9	ＳＥ89	P	45	175×175×(150)		青(磁)・黒褐・漆解物・土師(不)・銭貨・鉄滓・鉄釘・不明鉄 不明銅・砥石・硯・火打石・漆器・貝片	ＳＸ200(不)・ＳＢ42(新)	
10	ＳＥ90	Q	47	160×150×(255)		青(磁)・染(陶)・黒褐・地蔵(瓦)・羽口・銭貨・小刀・鉄鏃 鉄釘・紙・炭化材	ＳＸ208(Ｂ)・ＳＸ211(不) ＳＸ212(不)	
11	ＳＥ91	P	46	180×130×(265)		鉄釘		
12	ＳＥ92	O	46	130×120×400		青(瓦)・白(瓦)・鉄鍋・鉄釘・不明鉄・漆器	ＳＥ80(新)・ＳＳ37(新) ＳＹ46(Ｂ)・ＳＢ47(不)	
13	ＳＥ93	P	46	225×163×(160)		黒褐(陶)・土師(不)・銭貨・鉄釘・鉄滓・礫石	ＳＢ40(新)	
14	ＳＥ94	S	52	150×153×(50)		鉄釘	ＳＸ225(Ｂ)・ＳＤ94(新)	
15	ＳＥ95	S	47	200×200×(230)		青(磁)・黒褐(瓦)・羽口・鉄釘・鉄滓・不明鉄	ＳＢ38(新)	
16	ＳＥ96	S	50	225×200×(47)		鉄釘	ＳＸ231(不)	
17	ＳＥ97	O	45	130×130×(60)		土師(不)	ＳＸ230(不)	
18	ＳＥ98	P・Q	46	175×175×(40)		鉄釘	ＳＢ39(不)・ＳＳ45(不)	
19	ＳＥ99	Q	45	225×225×(90)		瑞(陶)・銭貨・鉄釘・漆器	ＳＳ43(不)・ＳＢ92(不)	
20	ＳＥ200	W	45	143×130×(30)				
21	ＳＥ201	W	46	145×95×(100)		青(磁)・白(陶)・染(陶)・黒褐(瓦)・土師(不)・銭貨・かすがい・鉄釘 不明鉄・礫石		
22	ＳＥ202	O	47・48	160×140×(52)		黒褐(瓦)・書状・鉄釘・鉄滓	ＳＢ65(新)	
23	ＳＥ203	U	47	180×150×(60)			ＳＸ259(新)	
24	ＳＥ204	U	47	150×130×(40)		白(陶)・瓦器・鉄鏃・鉄釘		
25	ＳＥ205	O	46・47	135×123×(30)				
26	ＳＥ206	O	44・45	140×140×(65)			ＳＴ250(新)	
27	ＳＥ207	U・V	48	148×138×(37)		瑞(陶)	ＳＳ46(不)	
28	ＳＥ208	R	45	150×150×(90)		白(陶)・染(瓦)・鉄釘		
29	ＳＥ209Ａ	W	45	91×(87)×(90)		青(磁)・黒褐・万子・鉄釘・不明鉄・漆器・書	ＳＥ209Ｂ(新)	
	Ｂ	W	45	(205)×(127)×(90)		青(磁)・銭貨	ＳＥ209Ａ(新)	
30	ＳＥ211	V	46	290×270×370	隅柱横桟型(三段)	青(磁)・白(陶)・染(陶)・黒褐(瓦)(陶)・越前(カメ)・瓦器・漆解物 羽口・銭貨・小札・大刀・小刀・鉄釘・不明鉄・漆塗・不明銅 火打石・硯・加工石・石臼・漆器・板	ＳＤ93(新)	
31	ＳＥ212	V	45・46	190×157×(150)		染(陶)・瓦器・銭貨・小札・鉄釘		
32	ＳＥ213	W	46	125×105×(83)		青(陶)・白(瓦)・染(陶)・黒褐(瓦)・銭貨・鉄釘		
33	ＳＥ214	W	47	142×118×(160)		漆解物・刀子・鉄釘・鉄滓		
34	ＳＥ215	W	47	130×130×(110)		黒褐(陶)・土師・銭貨・不明銅		
35	ＳＥ216	W	46・47	153×125×(110)		青(磁)・白(陶)・黒褐・漆解物・埋蔵・土師(不)・銭貨・小札 鉄釘・硯・石臼・漆器		
36	ＳＥ217	H	50	197×175×(100)		白・刀子・鉄鏃	ＳＤ93(新)	
37	ＳＥ218	H	50	235×215×440		青(磁)(陶)・白(陶)・染(瓦)・瓦器・銭貨・鉄鏃・火箸・不明金 かすがい・鉄・鉄鍋・小札・鉄釘・鉄滓・不明鉄・小銅 不明銅・礫石・茶臼・硯・石臼・漆器		
38	ＳＥ219	R	50	175×168×(115)		羽口・鉄釘・鉄滓・不明鉄・炭化物	ＳＢ55(新)	
39	ＳＥ220	R	50	125×125×(80)		越前(カメ)・鉄滓・銭貨・不明銅・自然石		

No.	遺構名	検出区	規模(長径×短径×深さ)cm	井戸枠の有無	主な出土遺物	重複関係	備考
40	SE121	Q・R 50	200×195×(120)		青磁(碗)・美濃・瓦質・擂鉢(不)・銭貨・鉄釘・漆器・不明鉄	SF72(新)	
41	SE122	Q 48	165×160×(93)		擂鉢(不)・土器(取手)・漆器		
42	SE123	P・Q 48	200×165×(135)		青磁(碗)・白磁(皿)・信楽(不)・銭貨・鉄鍋・鉄釘・砥石・炭化木		
43	SE124	R 48	185×170×(130)		青磁(碗)(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(碗)(皿)・瀬戸・越前(カメ) 瓦器・かわらけ・小札・鉄滓・鉄釘・漆器・不明鉄	SB85(新)	
44	SE125	P・Q 48	210×177×(106)		鉄鍋・不明鉄	SX296(新)	
45	SE126	R 48・49	162×160×(118)		青磁(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(碗)(皿)・瀬戸・鉄滓・砥石 鉄釘・不明鉄・銅銭・不明銅・漆器	SX296(不)・SX304(新)	
46	SE127	S 49	137×120×(40)		染付(碗)・不明鉄・火打金	SB67(古)	
47	SE128	U 48	245×225×(200)		かわらけ・石棒	SX289(古)	
48	SE130	R 46	170×166×(120)		白磁(皿)・鉄鍋・不明鉄	ST272(古)	
49	SE131	W 47・48	200×(90)×(95)		青磁(碗)・美濃(皿)・不明鉄		
50	SE132	T 44	330×220×(130)		白磁(皿)・鉄釘		
51	SE133	R 49	250×163×(85)		漆器・骨	SX294(古)・SX304(新)	
52	SE134	R 50	120×123×(90)		不明鉄		
53	SE135	S 48	135×118×(120)		鉄釘・不明鉄	ST278(新)	
54	SE136	S・T 49	153×145×(130)		青磁(碗)・白磁(皿)・染付(碗)・美濃・鉄釘・銭貨・漆器	SB68(不)	
55	SE137	Q 42	340×296×495	方形横板組(二段)	青磁(碗)(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(皿)・瀬戸(皿)・越前(擂鉢)(カメ) 瓦質・溶解物・羽口・瓦器・銭貨・小札・鉄鍋・鉄釘・鉄刀 鉄滓・不明鉄・銅銭・銅製品・飾金具・不明銅・砥石・硯 石臼・漆器・箸・骨	SX354(旧)	
56	SE138	T 42・44	375×355×400	方形横板組(二段)	青磁(碗)(皿)・白磁(皿)・染付(碗)(皿)・美濃(碗)(皿)・瀬戸(皿)・越前 (擂鉢)(カメ)・羽口・瓦器・銭貨・鉄鍋・小柄・小札・鉄釘 鉄滓・不明鉄・飾金具・銅鏡・砥石・石臼・漆器・箸・桶	SX300(不)・SX220(不)	
57	SE139	S・T 45	165×145×(120)		青磁(碗)・美濃・越前(カメ)・鉄鍋・鉄釘・不明鉄	SX305(新)・SX320(不)	
58	SE140	Q 42	245×230×(5)		鉄釘・不明銅	ST277(新)	
59	SE141	R・S 42	195×190×(35)		白磁(皿)・染付(碗)・銭貨・小札・鉄鍋・鉄釘・不明鉄	ST283(新)	
60	SE142	R 42			青磁(皿)・溶解物・鉄釘		
61	SE146	T 44	186×180×(47)		青磁(碗)・白磁(皿)・溶解物・鉄釘		
62	SE150	S 39	100×95×(105)		赤絵(皿)・漆器		
63	SE151	S 39	155×155×(145)		青磁(皿)・白磁(皿)・鉄鍋・鉄釘・椀	SB90(新)	
64	SE152	T 38	137×120×(125)		青磁(碗)・石臼・銭貨・鉄鍋・鉄釘・飾り金具		
65	SE153	Q 41	140×136×(98)		美濃(碗)・越前(カメ)・鉄釘・炭化木		
66	SE155	Q 42	145×130×(76)		溶解物		
67	SE157	R・S 40・41	350×(350)×(96)		青磁(碗)(皿)・白磁(皿)・染付(碗)(皿)・越前(カメ)・瓦質・瓦器・擂鉢 (不)・銭貨・小札・火箸・鉄釘・不明鉄・砥石	ST302(不)・SE161(不) SB83(不)	
68	SE158	R 44	180×160×(125)		青磁(碗)(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(皿)・越前(カメ)・瀬戸・溶解物 銭貨・小札・鉄鍋・鉄釘・不明鉄・炭化木		
69	SE159	Q 44	180×170×(125)		青磁(碗)・白磁(皿)・染付(碗)(皿)・美濃・溶解物・擂鉢(不)・銭貨 鉄鍋・鉄釘・不明鉄・砥石・漆器	SR42(古)・SB92(新)	
70	SE160	Q 44	340×340×(100)		青磁(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(碗)・羽口・かわらけ・溶解物 瓦器・銭貨・鉄鍋・鉄滓・小札・砥石・白磁石・漆器	ST290(古)・SB92(古)	
71	SE161	Q 44	220×230×(100)		青磁(碗)・青磁(皿)・越前(カメ)・鉄釘・不明銅・漆器	SE160(不)・SX320(古)	
72	SE164	Q 45	95×95×(80)		火箸・砥石	SE161(不)	
73	SE165	Q 44	115×115×(60)		青磁(碗)・銭貨・鉄鍋・鉄釘	SB93(不)	
74	SE170	R 39	130×120×(40)		小札・鉄釘		
75	SE171	Q 40	145×130×(60)		美濃(皿)		
76	SE172	Q 39	170×(120)×(45)		鉄釘		
77	SE173	R 40	220×(85)×(65)		青磁(碗)・羽口・溶解物・鉄釘・火打石・漆器・柄・笄		
78	SE174	Q 39	165×150×(50)				
79	SE175	Q 39	160×135×(40)		白磁(皿)・美濃(皿)・越前(カメ)・銭貨・鉄釘		
80	SE176	R 39・40	155×(75)×(40)		白磁(皿)・染付(碗)・砥石	SB93(不)	
81	SE177	T 42	185×185×(95)		珠洲(カメ)・越前(カメ)・かわらけ		
82	SE178	T 42	135×135×(80)		青磁(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃・瀬戸(天目茶碗)・越前(カメ)・瓦質 中国(つぼ)・瓦器・銭貨・小札・鉄鍋・鉄釘・不明銅	ST306(旧)	
83	SE179	T 41	325×280×(130)		青磁(碗)(皿)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(皿)・越前(カメ)・瓦器・瓦質 かわらけ・溶解物・銭貨・羽口・小札・鉄鍋・鉄釘・鉄斧 不明鉄・キセル・石臼・白磁石・漆器・桶底・骨		
84	SE180	S 45	120×100×(30)		青磁(碗)・白磁(皿)・染付(皿)・越前(カメ)・瓦質・銭貨・鉄釘		
85	SE181	S 40	90×(70)×(20)		越前(カメ)・鉄釘	ST307(新)	
86	SX205	P 47	145×140×(20)		青磁(碗)・白磁(皿)・擂鉢(不)・鉄鍋・鉄釘・不明鉄		
87	SX211	Q 47	180×140×(115)		青磁(碗)・白磁(皿)・美濃(皿)・越前(カメ)・溶解物・擂鉢(不)・銭貨 刀・鉄鍋・鉄釘・挟み金具・砥石	SE90(新)・SX206(不) SX212(旧)	
88	SX214	S 49・50	162×142×(42)		染付(皿)・擂鉢(不)		
89	SX230A	P 45	140×135×(50)		擂鉢(不)		
90	SX234	R・S 46	145×120×(30)		白磁(皿)・美濃・瀬戸・銭貨・鉄釘・不明鉄・砥石		
91	SX235	T 46	167×160×(140)		染付(皿)・越前(カメ)・羽口・擂鉢(不)・銭貨・小札・鉄釘		
92	SX245	T 46	150×140×(85)		青磁(碗)・白磁(皿)・染付(皿)・美濃(碗)・越前(カメ)・擂鉢(不)・銭貨 火箸・鉄釘・溶解物		

No.	遺構名	検出区		規模(長径×短径×深さ)cm	杭跡の有無	主な出土遺物	重複関係	備考
92	SX251	V	47	332×320×(35)		青(磁)・白(磁)・染(磁)・鉄(釘)・鉄滓・須恵器・土師器・瓦器(不)・鉄滓・鉄釘・不明鉄・不明銅・砥石		
94	SX255	T	47	337×135×(75)		瓦器(不)・須恵器・鉄滓・鉄釘	ST252(新)	
95	SX257	T	46	270×140×(45)				
96	SX277A B	R R	50 50	250×150×(135) 123×120×(100)		高麗(瓦) 須恵器・鉄釘	SX270(旧) ST247(新)・SX277(新)	
97	SX282	Q	48	180×180×(100)		瓦(平)・白(磁)・鉄滓・火箸・鉄釘・不明鉄		
98	SX290	J	45	120×115×(90)		瓦(丸)・白(磁)・染(磁)・鉄釘・不明鉄		
99	SX295	U	49	190×150×(45)		瓦(平)・須恵器・鉄滓・鉄釘・不明鉄	SX68(旧)	
100	SX298	T	48	140×125×(90)		瓦(平)・瓦器(不)・鉄滓・鉄釘・かすがい・鉄砲玉・砥石		
101	SX303	T	48	92×88×(100)		瓦(平)・染(磁)・鉄釘・須恵器		
102	SX313	W	48	(140)×(140)×(67)		瓦(平)		
103	SX314	V	48	206×(140)×(80)		鉄釘		
104	SX316	S	44	245×170×(95)		白(磁)・鉄滓・鉄釘・須恵器	SX315(新)	
105	SX324	S	43	95×95×(30)		白(磁)・須恵器・瓦器	ST247(不)	
106	SX327	R	42	150×136×(37)		白(磁)・鉄釘	ST280(新)・ST282(旧)	
107	SX344	S	38	120×(25)×(50)		染(不明)・瓦器(不)		
108	SX352	T	39	113×100×(200)		青(磁)・白(磁)・高麗(瓦)・骨灰・炭	SX343(旧)	
109	SX358	S	38	(62)×(27)×(77)		瓦器		
110	SX369	P	41	122×100×(125)		青(磁)・染(磁)・越前(カメ)・瓦器(不)・鉄滓・鉄釘	SX368(不)	
111	SX375	R	41	235×190×(40)		高麗・鉄滓・鉄釘・須恵器	SX366(旧)	
112	SX378	Q	45	216×(176)×(97)		染(磁)・瓦器		
113	SX394	Q	39	136×(90)×(21)		石塔		
114	SX396	Q	40	105×(87)×(30)				
115	SX409	T	41・42	105×105×(100)		青(磁)・染(磁)・鉄釘・不明鉄	SF302(旧)	
116	SX411	P	38	200×(160)×(45)		瓦器(不)		
117	SX413	T	41	140×110×(45)		青(磁)・高麗(瓦)・須恵器・須恵器(壺)・不明銅・鉄金具	ST286(新)	

4．不明竪穴遺構（付図参照）

上屋構造を有しないと考えた竪穴構造の遺構を一括した。この中には遺物廃棄に特色があったＳＸ244や、当初竪穴建物跡と考えたＳＴ245・255・301・303、井戸跡と考えたＳＥ129・154・156も含まれており、遺物は出土するがどのような機能を有するのか明確にできなかったものである。方形基調の掘り込みをして柱穴が発見できないからと言って竪穴建物跡にならないという補償はないのであるが、現段階では不明竪穴遺構という名称を付したいと思う。

総数117基が確認でき、プラン確認が不充分な例が多い。

Ch. 4　不明竪穴遺構集計表

No.	遺構名	検出区		規模(長軸×短軸×深さ)cm	主な出土遺物	重複関係	備考
1	SX200A B	P	45-46 〃	170×80×53 350×300×30	青(磁)・白(磁)・染(磁)・越前(カメ)・須恵器・石鏃・かわらけ・鉄釘・小刀・小柄・鉄滓・不明鉄・不明銅・銅印・砥石・須恵器	SE88(旧)	
2	SX202	Q・R	47	950×120×20	白(磁)・越前(カメ)・瓦器(不)・須恵器・壁・鉄釘・鉄滓・不明鉄・釜・鉄釘・茶臼・須恵器	SB41(新)	
3	SX204	Q・R	45	184×153×80	青(磁)・白(磁)・高麗・瓦・鉄釘・不明鉄・石臼		
4	SX207	R	46	167×125×(60)			
5	SX208	R	46	200×125×25	白(磁)・高麗・鉄釘・鉄釘・不明鉄・鉄鏃・不明銅・板の跡	SF85(不)・SF52(新)	
6	SX209	S	50	(250)×(225)×15	青(磁)・染(磁)・高麗(瓦)・鉄釘・鉄釘・不明鉄	ST276(旧)	
7	SX210	R・S	49	151×(160)×20	鉄釘	SX209(旧)	
8	SX214	Q	44-45	(332)×(296)×41	白(磁)・鉄釘・鉄滓	SE87(新)	
9	SX215	Q	47	162×113×30	鉄滓	SX217(新)	
10	SX217	Q	47	不明確	瓦器・鉄釘	SX212(不)・SX216(不)	
11	SX218	Q	47	250×140×45	青(磁)・高麗・瓦器(不)・鉄釘・かすがい・鉄釘・石臼	SX211(不)・SX212(不)	
12	SX220	S	46-47	300×286×38	青(磁)・白(磁)・染(磁)・高麗(瓦)・(磁)・小刀・鉄・鉄釘・不明銅・銅滓・鉄・砥石		
13	SX220	S	39	250×230×35	染(磁)・鉄釘・鉄釘	SE94(不)	
14	SX224	R	46	150×(120)×20	瓦器・鉄釘・鉄釘・不明鉄	SX213(新)	
15	SX225	Q	46-47	(535)×(320)×(23)	青(磁)・白(磁)・染(磁)・高麗(瓦)・瓦器・須恵器(不)・鉄釘・小刀・鉄鏃・火箸・不明鉄・銅滓・須恵器・羊毛	SX329(不)	

No.	遺構名	検出区		規模(長径×短径×深さ cm)	主な出土遺物	図版番号	備考
16	SX226	P・Q	45	(450)×(400)×(22)	青磁(椀)・白磁(皿)・染付(皿)・瓦器・瓦質土器・土師(カメ) 鉄釘・小刀・鉄鍋・砥石・人形土製品・赤彩・小骨	S 240(不)・S 242(不)・S 243(不)	
17	SX227	J	46	190×126×28	青磁(椀)・瓦器(椀)		
18	SX228	R	46	200×135×20	青磁(椀)・瓦器・石臼	S F55(新)	
19	SX229	S・T	47・48	180×120×30	土師・瓦質・瓦器・不明鉄	S T252(新)	
20	SX230B	P	45	185×161×(30)		S X230A(不)	
21	SX231	C	45	250×125×10	不明鉄	S R40(不)	
22	SX232	O	45	320×(75)×13	白磁	S T253(不)	
23	SX233	S	48	210×114×30			
24	SX236	S	46	122×100×20	瓦器(椀)・鉄釘・鉄刀・皮・骨	S S38(新)	
25	SX237	T	45	(430)×(390)×(35)	青磁(皿)・白磁(皿)・染付(椀)・瓦器(椀)・土師(カメ)・須恵 瓦器・須恵器・鉄滓・鉄釘・火箸・小刀・不明鉄 銅製・不明銅・石臼・漆器	S T255(不)	
26	SX238	T	45	250×230×36	青磁(椀)・白(皿)・瓦器(椀)不・不明鉄		
27	SX239	L	44・45	300×(140)×37			
28	SX240	C	47	195×188×(50)	刀子・須恵器・かわらけ・鉄釘	S T261(新)	
29	SX241	T	46	(480)×(140)×10		S X253(不)	
30	SX244	T	45	208×135×77	青磁(椀)・白(皿)・染付(椀)(皿)・瓦器(皿)・瓦質(皿)・土師(カメ)・瓦器 須恵器(不)・須恵器・鉄滓・小刀・鉄釘・鉄鍋・火打金・鉄鍋 不明金・印鑑・鏡・火箸・鍋・毛抜・鉄釘・鉄滓 不明鉄・砥・人形金具・小刀・鉄・銅製・漆金具 下駄・銅吸・鉛・不明銅・銅・磁石・すもも・くるみ 紙・紙こも・漆付着紙・皮革・金付着革・染皮革・麻 漆器	S X240(新)	
31	SX246	T	45・46	205×168×10			
32	SX247	T	46	215×190×50	青磁(椀)(皿)・瓦器(椀)・土師(カメ)・鉄滓・小刀・小鉄 鉄滓・鉄釘・不明鉄・不明銅・銅・漆器・皮・皮革	S X254(不)・S X269(新)	
33	SX248	H	47	206×152×33			
34	SX251	T	46	(170)×120×25	かわらけ	S X244(不)	
35	SX256	T	47	93×87×140	かわらけ	S T232(新)	
36	SX258	Q	46	142×128×23		S X222(不)	
37	SX259	U	47	180×(150)×50	鉄滓	S T261(新)・S E139(新)	
38	SX260	T	46	(164)×95×20	鉄釘	S X247(新)	
39	SX270	V	46	380×270×36	青磁(椀)(皿)・白(皿)・瓦器(椀)不・かわらけ・鉄滓・鉄釘 不明鉄・不明銅		
40	SX271	W	46	260×(150)×70	青磁(椀)・白(皿)・瓦器(椀)(皿)・須恵器(皿)・鉄釘・鉄滓 小刀・火打石・漆片		
41	SX273	V	46	310×(200)×30	青磁(椀)・瓦器・須恵器(不)・鉄滓・不明鉄・不明銅	S T275(不)・S D91(不)	
42	SX275	Q・R	46	730×470×40	青磁(椀)(皿)・白(皿)・染付(椀)(皿)・瓦器(椀)(皿)・瓦器(不) 須恵器・瓦器・埴輪・須恵器・鉄滓・銅・鉄釘・鉄滓 不明鉄・キセル・不明銅・火打石	S X280(新)・S B63(新)・S B67(新)	
43	SX278	R	49	268×133×25	青・鉄釘・不明鉄	S X301(新)・S B53(不)・S B66(新)	
44	SX279	R	49	315×150×22	鉄滓・鉄釘	S B66(不)	
45	SX280	R	49	250×168×13	青磁(椀)(皿)・須恵器(不)・瓦器・不明鉄	S T272(新)	
46	SX281	P	48	181×160×20	不明鉄		
47	SX283	Q	48	140×95×35		S X275(新)	
48	SX284	Q・R	46・49	(250)×105×20	鉄釘	S E139(新)・S E139(新)・S X304(新)	
49	SX285	Q	48	(178)×168×12		S X256(不)	
50	SX288	T	49	(300)×170×8	色絵皿(椀)・瓦器(椀)・鉄釘・不明金・鉄釘・不明鉄・炭化米	S B66(不)	
51	SX295	Q・R	48	230×142×11	漆器・鉄滓・不明鉄		
52	SX296	P・Q	48	136×(135)×15	漆器・鉄器	S T129(新)	
53	SX297	P	48	96×82×25			
54	SX301	R	49・50	310×270×10		S X278(新)	
55	SX302	Q・R	49	157×107×22	鉄釘		
56	SX303	R	49	122×86×21	鉄滓(不)		
57	SX304	R	48・49	(120)×112×5		S E138(新)・S E133(新)・S X284(新)	
58	SX306	Q	48	－×－×－		S B63(不)・S B66(不)	
59	SX309	J	46	280×190×18	鉄釘	S X312(不)	
60	SX310	T	49	1.6×(90)×30	青(皿)・小札		
61	SX311	T・U	48	320×140×10	礎石	S B68(不)・S D86(不)・S D90(不)	
62	SX312	U	48	202×168×10	瓦質土器・自然石	S X309(不)	
63	SX315	S	44	(310)×(200)×23	白(皿)・瓦器・鉄釘	S X316(新)	
64	SX317	T	44	330×　×(40)	染(皿)・土師(カメ)・瓦器	S T235(不)	
65	SX318	T	44	(458)×(280)×10	青磁(椀)・白(皿)・瓦器(皿)・土師(カメ)・須恵(不)・鉄滓 鉄鍋・鉄釘・漆器	S E138(新)・S F133(新)・S X320(不) S X328(不)	
66	SX320	S・T	43・44	－×－×35	青磁(椀)・白(皿)・瓦器(皿)(椀)(不)・須恵器(皿)・土師(カメ)・瓦器 かわらけ・須恵(不)・小刀・火箸・鉄釘・鉄滓・不明鉄 不明銅・銅鏡・漆器	S E138(新)・S F139(新)・S X318(不) S X325(新)	

No	遺構名	検出区		遺構(長軸×短軸×深さ)cm	主な出土遺物	重複関係	備考
67	SX321	S	42-43	(400)×256×36	青(磁)・白(磁)・染(磁)[瓶]・溶解物・鉄釘・刀子 鉄鏃・鉄斧・不明鉄・須恵	SB70(旧)	
68	SX322	S	42	135×72×31	青(磁)・白(磁)・美濃・鉄釘		
69	SX326	S	44	148×92×10	瓦器	SX320(新)	
70	SX329	S	44	340×240×20	青・染(磁)・石製(カメ)・埋鉢(不)・小札	SF75(新)	
71	SX330	R	42	560×(320)×32	青(磁)・白(磁)・染(磁)・美濃・瓦器・溶解物・鉄釘 鉄鏃・鉄斧・須恵	ST281(不)・SE148(新)・SB70(旧) ST71(新)	
72	SX332	S	38	130×120×30	青(磁)・白(磁)・染(磁)・銭貨・小札・鉄釘・鉄滓・骨	SB38(新)	
73	SX341	S	38	240×162×40	白(磁)・染(磁)・瓦器・溶解物	SB90(新)・ST90(不)	
74	SX342	S	38	170×150×95	溶解物・鉄滓・加工石	SB90(不)・SB93(新)	
75	SX343	T	39	× ×8	白(磁)・鉄釘・鉄滓・骨	SX352(新)・SD123(旧)	
76	SX345	T	39	135×110×14	埋鉢(不)・鉄釘		
77	SX346	S・T	38	310×180×26	青(磁)・越前(カメ)・かわらけ・鉄釘	SX347(不)・SB90(新)	
78	SX347	T	38	125×92×19	白(磁)・鉄釘・鉄鏃・骨	SX346(不)	
79	SX348	D	44-45	90×76×35	鉄釘		
80	SX349	U	47	不明	陶器(瓶)・溶解物・銭貨・小刀	SX350(新)・SX352(新)・SB90(新)	[illegible]
81	SX350	T	46	不明	かわらけ・鉄釘	SX348(旧)・SX357(新)・SB90(新)	
82	SX353	T	35	(290)×(220)×30	青(磁)・白(磁)・染(磁)・瓦器・須恵・埋鉢(不)・銭貨 小札・鉄釘・鉄滓・不明鉄・八反金具・不明銅・砥 敲石・炭	SX349(旧)・SX357(新)・SB90(新)	
83	SX354	T	38	130×130×10	溶解物		
84	SX355	T	39	100×90×―	鉄釘・炭・鉄釘・不明銅・魚の骨	SD123(旧)	
85	SX356	S	37-38	130×(120)×(6)			焼土塊
86	SX357	T	38	130×120×80	溶解物・金属石	SX349(旧)・SX356(旧)	
87	SX359	R	41	255×(130)×47	埋鉢(不)		
88	SX363	P・Q	42	450×(450)×35	青(磁)[瓶]・こ(瓶)・染(磁)[瓶]・美濃(瓶)・青白(陶器) 銭貨・鉄釘・不明鉄・不明銅	SX368(新)	
89	SX364	Q	41-42	225×178×50	こ(瓶)・越前(カメ)・溶解物	SE167(新)	
90	SX365	S	39	126×86×54	銭貨・鉄釘・須恵	SB90(不)	
91	SX372	Q	42	202×148×30	白(瓶)・美濃・溶解物・銭貨・鉄釘		
92	SX373	R	44	255×220×35	青(磁)・白(磁)・染(瓶)・銭貨・水晶金・鉄釘・不明銅・骨		
93	SX375	O	43	105×(94)×35	青(瓶)・美濃・鉄釘・紙石・須恵	ST284(不)	
94	SX382	O・P	44	310×(150)×30	越前(カメ)・鉄鏃・鉄釘・不明銅	SX385(新)	
95	SX384	P	44	(130)×130×14	瓦(鉢)・小札・鉄釘・鉄滓		
96	SX385	O・P	44	250×(130)×35	青(磁)・染(磁)・鉄釘	ST294(新)・SX382(旧)	
97	SX390	Q	40	108×(100)×25	青(磁)・白(瓶)・美濃(瓶)	SE170(新)	炭だまり遺物
98	SX391	R	40	不明	青(磁)・白(瓶)・埋鉢(不)・銭貨・不明鉄	ST237(新)・SF100(旧)	
99	SX392	Q	39-40	(365)×(290)×14	青(磁)・白(瓶)・染(磁)・美濃・埋鉢(不)・銭貨・鉄釘 不明鉄		
100	SX393	Q	40	(150)×(100)×29		ST287(新)	
101	SX395	T	42	107×73×32	白(小杯)		
102	SX396	R	39	(280)×95×30		SX400(新)	
103	SX400	Q	39-40	235×200×48	瓦器・鉄釘	ST300(旧)・SX396(旧)	
104	SX401	R	38	不明	青(磁)(瓶)・美濃(瓶)・鉄釘・鉄滓・紙石		
105	SX403	T	41	145×125×25	青(磁)		
106	SX405	T	40	160×120×5	青(磁)・染(瓶)・越前(カメ)・瓦器・溶解物・銭貨・鉄釘 不明銅	SX406(不)	
107	SX406	S・T	40	260×(522)×25	越前(カメ)・銭貨・鉄釘・不明銅・縄文土器	SX405(不)・SX414(新)	
108	SX407	S・T	41	(330)×250×15	銭貨・鉄斧・不明銅	SX402(不)	
109	SX408	T	41	113×(133)×10	かわらけ		
110	SX414	S	40	80×80×38	青(磁)・越前(カメ)・火箸・鉄釘・不明鉄・砥石	SX406(旧)	
111	ST245	S	41-42	400×288×55	青(磁)(瓶)・白(瓶)・染(磁)(瓶)・高麗(磁)(瓶)・唐津 羽口・溶解物・珠洲(壺)(カメ)・埋鉢・瓦器・鉄釘 鉄鏃・小札・鉄鏃・鉄釘・不明銅・銅鈴・小鉢 鉄斧・不明鉄・漆塗・くるみ・柿	SX402(不)	
112	ST256	T	44-45	500×(230)×34	青(磁)・白(瓶)・美濃・越前(カメ)・かわらけ・銭貨・鉄釘 不明鉄	SX237(不)・SX319(不)	
113	ST301	T	42	(510)×(360)×30	弓(磁)・美濃(磁)・越前(カメ)・埋鉢・溶解物・銭貨 鉄釘	ST302(新)・ST303(新)・SB102(旧)	
114	ST303	T	42	290×(240)×42	青(磁)・埋鉢・かわらけ・溶解物・小札・鉄鏃・鉄釘 須恵	ST301(不)・SE178(新)・SX402(旧)・ SB102(旧)	
115	SS129	S・T	49	140×134×80	青(磁)(瓶)・高麗(磁)・瓦器・溶解物・銭貨・鉄釘 鉄斧・不明鉄・漆塗	SB68(不)	
116	SE154	Q	41	120×105×104	青(磁)・越前(カメ)・金口・小札・鉄鏃・鉄釘・不明鉄		
117	SE156	Q	42	145×136×130	美濃(瓶)・かわらけ・鉄滓・不明鉄	ST277(旧)	

5．焼土遺構（付図参照）

焼土遺構としては、焼土の存在をもって遺構と認定したが、まかどや炉的な使用と推定される例はＳＦ50・73だけであり、それ以外は焼土の分布が認められるという程度にすぎない。ただＳＦ100については焼土下から炭化材が出土しており焼失家屋の可能性もあるが完掘していないため詳細は不明である。

Ch. 5　焼土遺構集計表

No.	焼土遺構名	検出区		規模(長軸×短軸×深さ)cm	主な出土遺物	重複関係	備考
1	ＳＦ50	S	45	450×180×30	須(器)・瓦器・鉄釘・刀剣・くるみ・種		
2	ＳＦ51	R	45	260×120×10			
3	ＳＦ52	R	46	117×90×18	鉄釘	ＳＸ208(中)・ＳＢ41(不)	
4	ＳＦ53	S	46	140×95×20	青(磁)・白(磁)・無釉(磁)・鉄釘・不明鉄・不明銅製品		
5	ＳＦ55	R	46	110×95×32	瓦質・不明灰	ＳＸ228(旧)	
6	ＳＦ56	T・U	45	130×100×11	須器(カメ)・けが土	ＳＸ250(旧)	
7	ＳＦ57	T	46	120×(23)×26		ＳＸ241(不)	
8	ＳＦ58	T	46	76×73×40		ＳＸ252(旧)	
9	ＳＦ59	U	45	132×70×22		ＳＤ80(不)	
10	ＳＦ61	T	47	73×60×17			
11	ＳＦ62	T	45	76×51×4			
12	ＳＦ63	U	47	90×64×29		ＳＴ261(旧)	
13	ＳＦ64	V	45	110×100×38	須(器)	ＳＴ258(中)・ＳＥ44(旧)	
14	ＳＦ65	S	47	225×220×—			
15	ＳＦ70	W	45	94×70×20			
16	ＳＦ71	W	46	80×55×24	須器	ＳＴ259(旧)	
17	ＳＦ72	P	48	142×98×—			
18	ＳＦ73	Q・R	50	68×38×25	須器物	ＳＥ121(新)	
19	ＳＦ74	S	44	78×46×— 35×28× 41×13×—			
20	ＳＦ75	S	44	142×118×—	銭貨・土師器	ＳＸ329(旧)	
21	ＳＦ76	S	44	68×38×—		ＳＸ329(旧)	
22	ＳＦ77	S	44	66×24×—			
23	ＳＦ78	S	42	85×20× 50×40× 25×17×—		ＳＢ70(旧) ＳＸ321(旧)	
24	ＳＦ90	S	38	122×80×27	青(磁)・鉄釘	ＳＸ341(不)	
25	ＳＦ91	Q	41	120×98×33		ＳＥ158(不)	
26	ＳＦ92	Q	42	90×69×—			
27	ＳＦ93	Q	44	340×38×—	須器(カメ)・鉄製・鉄釘・自然石	ＳＢ92(新)	
28	ＳＦ95	R	44	120×(85)×			
29	ＳＦ96	Q	44	108×97×—	鉄釘		
30	ＳＦ100	S	40	(335)×(265)×15	青(磁)(器)・鉄釘・火打石・番匠・自然石・炭化木	ＳＸ391(新)	

6．溝跡（付図参照）

溝跡についてみると、後世の攪乱と考えられる例や出土遺物のみられない例があり重複関係から掘立柱建物跡・竪穴建物跡より古い構築が多く、城館期の例は少ないと思われ、北館でみられた屋敷割境界線に添うような状況は認められない。ただし不明竪穴遺構と考えたＳＸ202については再検討の結果、掘立柱建物跡（ＳＢ67）と軸を同じくすることから溝跡的な機能も推定できる。

Ch. 6　溝跡集計表

No.	遺構名	検出区	時代	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主な出土遺物	重複関係	備考
1	SD80	U	45	約(280)×165×55		ST250(不)・SF59(新)	
2	SD81	U	45-46	約(1170)×134×28	鉄滓・鉄石	ST256(新)・ST263(新)	
3	SD82	U・V	45-46	約(870)×230×20	礫石	ST256(不)・ST257(新)	
4	SD83	U・V	47	約(370)×120×13		ST300(新)	
5	SD84	[illegible]	46-47	約(910)×112×20	青(磁)・染(瓦)・不明鉄	SX226(新)	
6	SD90	U・V・W	47-48-49	約(2820)×340×55	青(磁)・白(瓦)・瓦器(皿)・伊万里・陶器・瓦器 鉄釘・鉄滓・不明鉄		
7	SD92	V	46	約(570)×114×15	瓦器・かわらけ	ST258(不)・SX114(新)・SX273(不)	
8	SD93	R	50	約(260)×38×8		SC117(新)	
9	SD94	Q・R	49-50	約(1980)×60×30	瓦器	SF96(新)・SX276(新)・SX30(1新) SD95(不)・SB63(不)・SB66(新)	
10	SD95	Q	49	約(1030)×176×26	青(磁)	SD94(不)・SB63(新)・SB66(新) SB73(新)	
11	SD96	T	48-49	約(1400)×154×14	土師器・鉄釘・自然石	SX311(不)・SD98(新)・SB68(新)	
12	SD98	T	48-49	約(1040)×160×12		SX311(不)・SD96(旧)	
13	SD110	S・T	39	約(865)×70×23		SX152(新)・SX336(新)・SB90(不)	
14	SD111	T	39	約(300)×82×15		SX343(新)	
15	SD112	R	44	約(580)×120×10	土師器		
16	SX249	T	46-47	約(370)×114×25		SX244(新)	
17	SX250	T・U	46	約(700)×160×18		ST263(不)・SX234(新)・SX247(新) SF56(新)	
18	SX252	T	45-46	約(910)×170×14		SX241(不)・SX265(新)・SF58(新)	
19	SX298	R	50	約(250)×130×23		ST274(新)	

7．その他の遺構

内館において注目できるその他の遺構として、蓄銭遺構（ＳＰ11）・鍋伏せ遺構（ＳＰ12）があり、それぞれの詳報が「浪岡城跡Ⅶ」に掲載しているので参照願いたい。

V　内館における遺構配置

1．はじめに

内館から検出された遺構としては、礎石建物跡・掘立柱建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・溝跡竪穴遺構・焼土遺構・蓄銭遺構等があり、時期別変遷を考えるのが本章の目的である。遺構の構築時期・使用時期・廃棄時期を同定する場合に出土遺物が重要な視点を有する事は当然であるが、浪岡城跡（他の遺跡でもほぼ同様であるが）についてみると出土遺物による遺構の新旧関係を把握することは実に困難な作業である。

その理由として、①遺構の使用期間を把握できないことが多い。②出土遺物（遺構の構築から廃棄された時点で覆土内に混入する遺物群も含む）がまったくみられないか、あるいは有ったとしても時期を特定できる遺物群でない事が多い。③遺物の伝世及び使用期間の幅が、遺構の構築から廃棄までの時間幅に直接連動させるには遺構の重複関係が多すぎて、新旧逆転の事態も想定せざるをえない。があげられ、以下の如く仮説的作業に基づいて、本作業を実施した。

2．作業仮説の設定

内館の作業に入る以前、同様の作業を北館において実践した経緯があるので紹介し、作業仮説の補強としたい。

北館の遺構群を分析する基本として、掘立柱建物跡（以下掘立という）・竪穴建物跡（以下竪穴という）・井戸跡（以下井戸という）がセット関係として把握できる。さらに、時期的重複関係を把握するため、16世紀の指標となる染付を出土する遺構とそれ以外の遺構に区分し、後者をⅠ期（15世紀後半）前者をⅡ期（16世紀前～中頃）、さらに16世紀後半以降の指標となる唐津・志野を出土する遺構をⅢ期（16世紀後半以降）に大別し、遺構の配置状態を推定したのがFig. 3・Fig. 4・Fig. 5である。なお、図中で区画線を引いたのは各遺構群を把握するための仮説線であって、一部に溝や柵列的遺構も利用しているがあくまで任意の線であることをおことわりする。本作業は以下の仮説に依拠している点が多く、仮説の吟味と修正は今後さらに検討する必要がある。

仮説(1)　遺構が廃棄される段階で覆土中に入る遺物は、廃棄時以前の遺物でありそれを遺構の下限年代と考える。

仮説(2)　遺構の配置にあたっては、同一区域内（セットとして把握する遺構群）での基本軸は大幅に相違ないものとする。

仮説(3)　遺構の存在が稀薄な部分および溝等が走る部分を道路ないしは区画に関連した施設と考える

以上の仮説の中で(1)についてはⅠ期がⅡ期・Ⅲ期に包含される可能性、Ⅱ期がⅢ期に包含さ

Fig. 3　北館遺構配置概念図(Ⅰ期・15世紀後半)

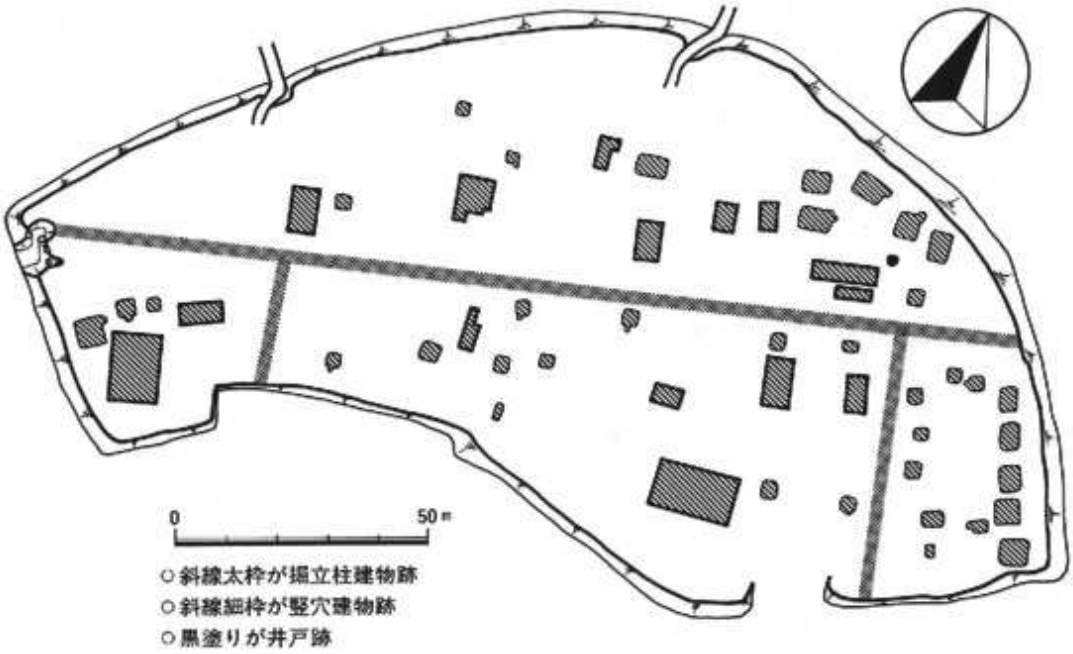


Fig. 4　北館遺構配置概念図(Ⅱ期・16世紀前半)

Fig. 5　北館遺構配置概念図(Ⅲ期・16世紀後半)

れる可能性を有しており、仮説(2)等で補正しなければならない。さらに仮説の上塗りになるかもしれないが、本作業の途中でたまたま地籍図を見る機会があり、地籍境界線が屋敷割想定線に近いことを発見できた。(Fig. 6)。

各時期別の遺構配置の特徴はすでに別稿で発表(注1)済であり参照願うことにして、結論的な部分を述べると以下のことになる。

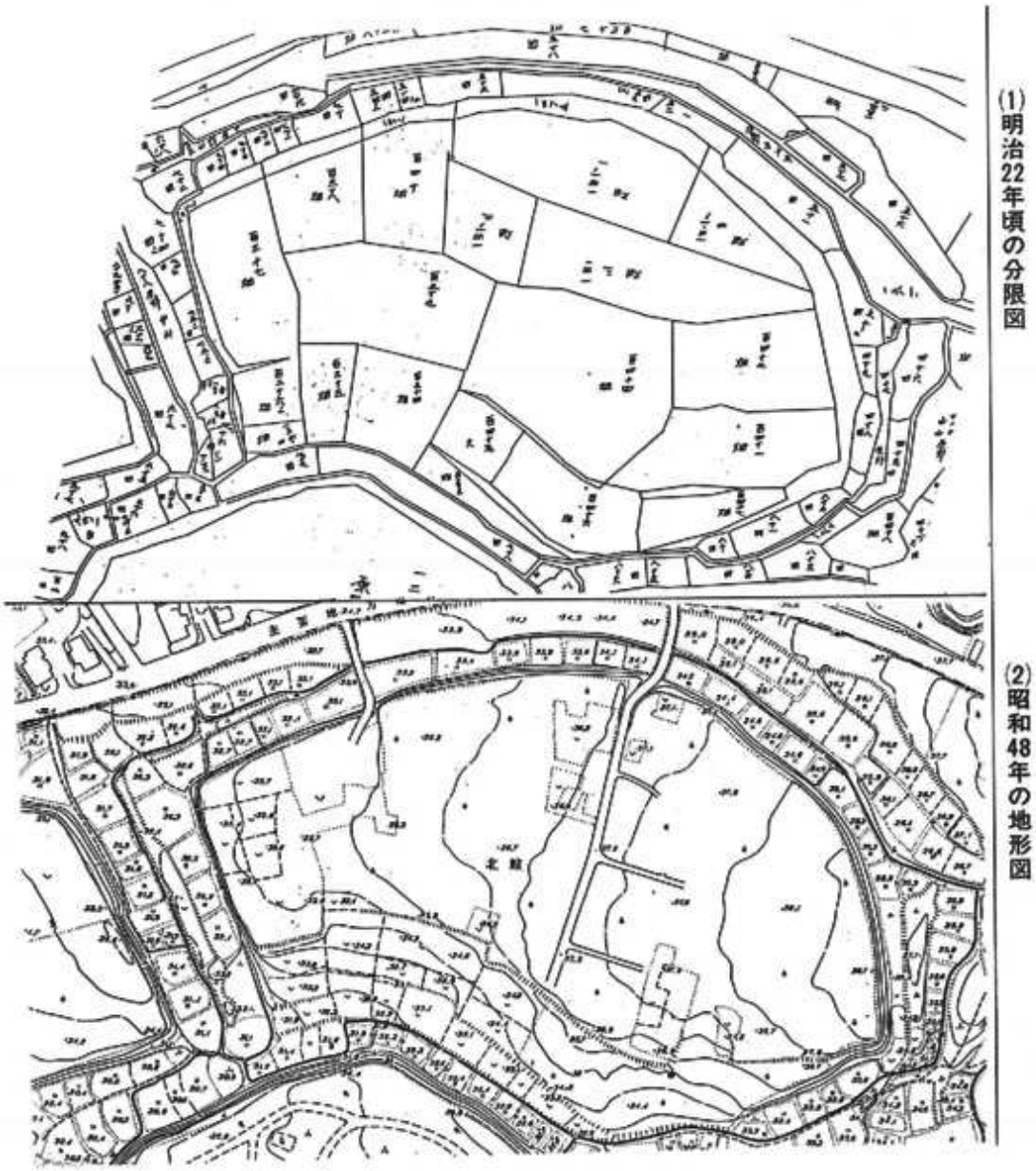
(1)大形掘立は、Ⅰ期段階で寝殿造系の様式を示すのに対しⅡ期・Ⅲ期は書院造系に変遷し、なおかつ同一地域に重複関係が存在する事から武家邸宅の機能を強く有する建物であり、屋敷地の主体的位置を示すと考えられる。

(2)小形掘立と竪穴については、倉庫・作業場等を伴う下人階層の住居と考えられ、大形掘立の位置に強く規範された配置はその事を裏付けていると思われる。

(3)北館は基本的に「武家屋敷」とでも呼べる遺構群と把握できるが、鋳銅関連遺物の出土から、職人等も屋敷地に内包した構成を示し、決して近世的な身分差による居住域の区画を示しているものではない。ただし、遺構群の構成によって内館に近い区画には、武家階層のなかでもより上位のものを配置していた可能性が高い。

以上の事を理解した上で内館の遺構配置に関する変遷的仮説を以下のように設定し、作業を進めた。

Fig. 6　北館の分限図と地形図



出土遺物の中で編年を実施できるのは陶磁器だけであり、しかも数が限定されている現状から以下の類品によって時期設定する。(当初、瀬戸・美濃製品について井上喜久男氏の詳細な鑑定があり、それに依拠すれば良いと考えていたが、遺構と伴出する事例が少なかったため他の陶磁器も付加せざるを得なかった。)

Ⅰ期（15世紀後半以前）――出土陶磁器の中で美濃・瀬戸については15世紀後半以前と鑑定を受けた製品の出土する遺構で、大窯期の陶器を伴出しない。さらに、16世紀代の指標

となる染付端反皿・白磁端反皿・青磁線描蓮弁文碗を伴出する遺構は除外し、白磁内湾形小皿・青磁無文碗・珠洲擂鉢については伴出可能として扱った。

II期（16世紀前葉）――美濃・瀬戸については大窯Ⅰa・Ⅰb期に限定し、青磁線描蓮弁文碗・白磁端反皿・染付端反皿・越前擂鉢の伴出も含めた。

III期（16世紀中葉）――美濃・瀬戸については大窯IIa・IIb・III期に限定し、次時期（IV期）の特徴となる遺物群を伴出しない遺構とした。

IV期（16世紀後葉以降）――美濃・瀬戸については大窯V期以降の製品と、唐津製品、染付皿の中で口縁が内湾形を呈する類、青磁線描蓮弁文碗の中で蓮弁の葉先を省略し単に縦位の線描だけになった類が伴出する遺構群。

以上の陶磁器による時期別配置を設定したところ、掘立についてはほとんどが出土遺物による区分は無理で、竪穴・井戸・他の遺構との重複関係・基本軸の方向による相違から考察せざるを得ない状況となった。さらに4期区分の整合性は、すべての区域に合致するもではなく、5期・6期区分をしなければ遺構の重複関係を説明できない状況もみうけられた。しかし、現状で5期・6期と区分することは出土遺物の面からもさらに全面調査を実施していないことからも大変困難な事であり、今回は試行作業として4期区分に終止した。

3．各時期の特徴

(a) I期の遺構配置（Fig. 7）

I期を15世紀後半以前としているが、本期の中には出土遺物の項目で述べるように12世紀後半から13世紀・14世紀・15世紀前半も包含した長い時間幅を想定しなければならない。今回の報告にあたっては一応15世紀後半を主体とする遺構群と考えて記述してゆく。

本期の遺構は、掘立、竪穴、井戸、その他の竪穴を中心に構成されており、掘立が6棟（SB90・70・101・100・37・63）竪穴が14棟（ST249・253・270・262・260・259・290・300、SX206・209・276・398、SF100）井戸が13基（SE89・93・123・128・110・143・139・155・142・172、SX358・300・327）その他の遺構が18基である。掘立の南北軸はN－9°～15°－Wの中におさまり、ほぼ均一な構成とみられるが、掘立に強く規範された竪穴は、SB37に対するST253やSB63に対するST270以外は明瞭でなく、竪穴の規模・配置も統一的でない。特に井戸は木枠を有する例がなく素掘りのものだけと考えられる。空間構成からみると、SB90周辺の一画、SB70の一画、SB37の一画、SB63の一画（SB100も含まれるかもしれない）が屋敷地に近い状況と考えられるが区画範囲は明確でない。

(b) II期の遺構配置（Fig. 8）

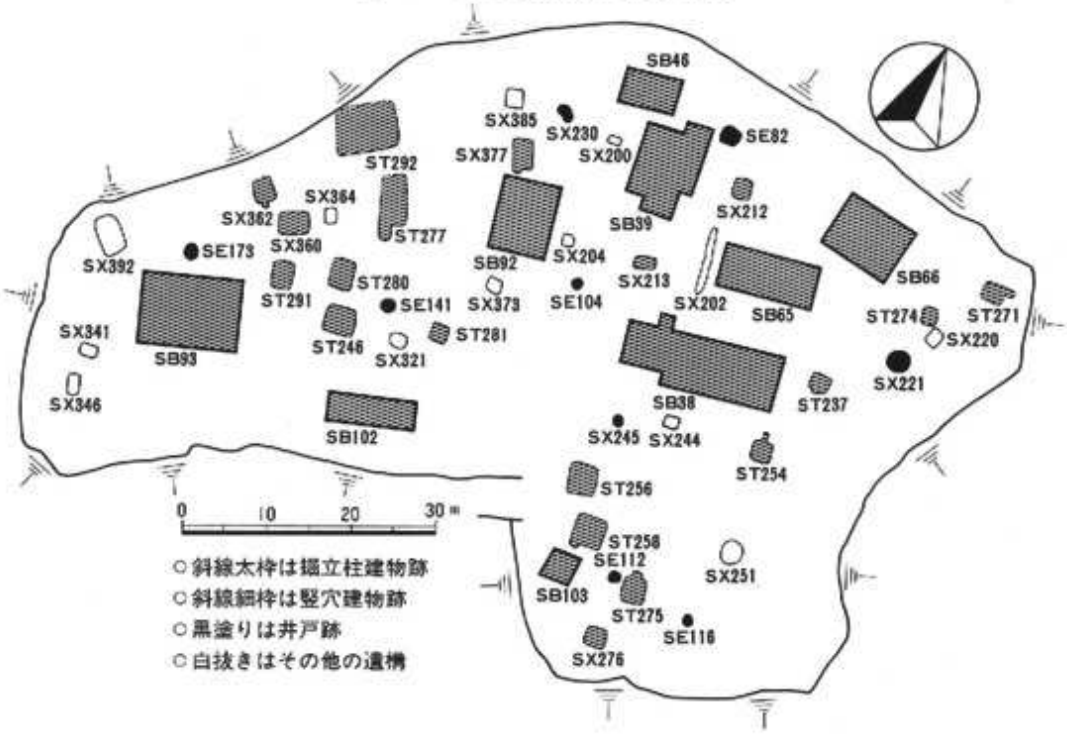
II期を16世紀の前葉ととらえると、本期は浪岡北畠氏の最盛期と考えられる時期でありそれなりの充実した遺構配置が認められる。

Fig. 7　内館遺構配置概念図
（第Ⅰ期）

掘立は９棟（ＳＢ38・39・46・65・66・92・93・102・103）、竪穴は19棟（ＳＴ271・274・237・254・256・258・275・281・280・246・277・292・291、ＳＸ276・212・213・377・362・360）、井戸は９基（ＳＥ82・104・112・116・141・173、ＳＸ221・245・230）、その他の遺構12基が認められる。

掘立の南北軸はＳＢ66だけがＮ－６°－Ｅの他はＮ－６°～20°－Ｗの間に入り、特にＳＢ93・102はＮ－20°－Ｗ、ＳＢ46・65・38・92はＮ－13°・14°－Ｗと近似した軸方向を示し、建物の景観という面からも良好な結果が得られている。ＳＢ38については従来までみられなかった礎石（根石）造りの建物であり、部屋割も六間２室九間１室と縁・入口が把握されており、内館においては重要な位置を占める建物であったと考えることができる。このＳＢ38を主殿クラスと考えるとＳＢ65は西側に溝状の区画推定線（ＳＸ202）を有していることから、ＳＢ38と関連のある建物跡と考えられ、ＳＢ46とＳＢ39が一ブロックと推定することもできる。さらにＳＢ92のブロックとＳＢ93のブロックが大きな意味の区画領域と想定される。しかしながら掘立の関連を裏づける資料は少なく、竪穴自体がブロックごとのまとまりとして考えられる面がある。つまり、ＳＴ292・277・280・246・291とＳＸ362・360のブロック、ＳＴ256・258・275とＳＸ276のブロック（ＳＢ103も含まれるかもしれない）であり、いずれもＳＥ141やＳＥ112等の井

Fig. 8　内館遺構概念図(第II期)



戸をブロック内に内包する形で配置されるのが特徴である。井戸の中ではＳＥ83だけが木枠を有するものであり、他は素掘りと考えられることから、規範された状況で配置されたものではないらしい（ただし、III期・IV期の木枠を有する井戸の使用期間が長いことも考えられ簡単には言えないかもしれない)。このような遺構の配置をみると、掘立自体が竪穴を付属するというより掘立だけで一つのまとまりを有しているように思え、北館南半の屋敷地にみられた３～４棟の大型掘立構成をさらに拡大した屋敷地（この言葉で適切などうかはわからない）ととらえる事も可能で内館における居住空間が全体として１～２ブロックと推定されるのではなかろうか。

(c)III期の遺構配置（Fig. 9）

III期は16世紀中葉と考えた時期である。本期は浪岡北畠氏が川原御所の内乱(永禄５年、1562)へ経て衰退期に向う過渡期であり、建物のバラつきが目立ち始め掘立の配置も分散傾向を示すようになる。

掘立は９棟（ＳＢ40・42・43・41・73・68・44・71・95)、竪穴15棟（ＳＴ248・252・255・251・261・247・302・297、ＳＸ340・400・366・412・402・368・371)、井戸14基（ＳＥ90・92・124・126・111・115・131・138・160・161・157・177・175、ＳＸ345）その他の遺構５基が認

Fig. 9　内館遺構概念図(第Ⅲ期)

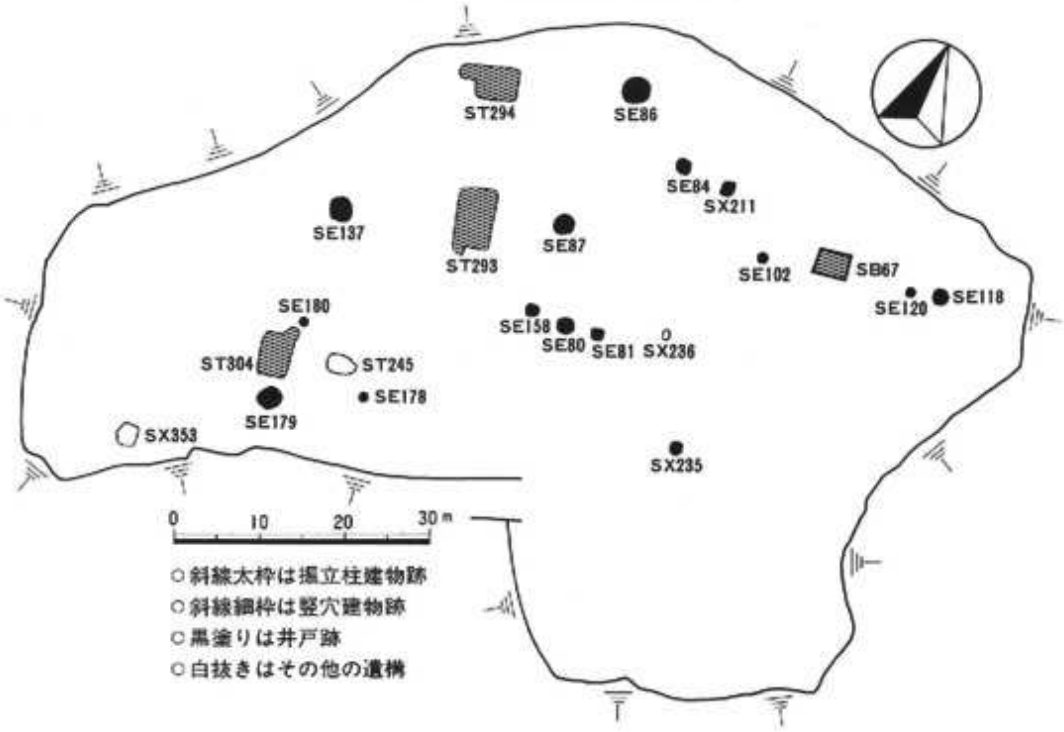
められる。

掘立の南北軸はN－19°～25°－Wのものが6棟、N－10°－W（SB68）が1棟、N－6°－W（SB44）が1棟、N－4°－E（SB73）が1棟存在する。SB44やSB73は占地の問題があるため斉一性がないと思われるが、SB68についてはST252と261が掘立方向に出入口を有し基本軸が近似していることからセット関係とみなすことも可能である。SB40・41・42・43のブロックは竪穴が2基しかなく、II期における同地区のあり方と類以している。しかし、SB71の周辺にはST247・302、SX402・412・366・368が周回する状況で配置され、SB71を中心とするブロックが構成されているらしい。井戸についてみると、木枠を有するものがSE111・138と2基ありSE160・157については底まで掘り下げが終了していないため確実ではないが木枠を有しても不思議でない構築の仕方をしている。この事は、井戸の占地がそれぞれのブロックの一隅に位置しているのであり、中央広場的に使用されていなかったものと考えられる。最後に、SB60については現在なお性格不明の構造物であり、識者の助言をお願いしたい。

(d)IV期の遺構配置（Fig. 10）

IV期を16世紀末葉と考え、選出したのがFig. 10である。図でもわかる通り掘立が1棟（SB67）竪穴が3棟（ST293・294・304）、井戸15基（SE84・86・87・80・81・102・118・120・

Fig. 10　内館遺構概念図(第Ⅳ期)



158・137・178・179・180、ＳＸ235・211)、その他の遺構２基であり、圧倒的に井戸が多い。この事は落城・廃城時の遺物が井戸に廃棄された結果と思われるが、北館と比較した場合(Fig. 5)内館における遺構の消滅が激しい事を理解でき、おそらく16世紀末葉(落城に近い時期)に内館は浪岡城の主館的位置を失っていたのではないかと考えることができる。ただし、後述するように遺物の出土のみで遺構の増減を把握することは危険な点もあるため今後さらに検討を加える必要がある。

4．おわりに

内館の時期別遺構配置を作業仮説に基づいて実施してみた。しかし本仮説の最大の弱点は出土遺物の下限時期を指標としている事であり、上限時期が遺構の上限時期とは必ずしも一致しない点にある。つまり、Ⅳ期と考えた遺構群だけはⅠ～Ⅲ期に入る可能性をたたれているがⅠ～Ⅲ期はⅣ期に入れることも可能であるし、Ⅰ～Ⅱ期はⅢ期に、Ⅰ期はⅡ期に入れる可能性を有している事である。遺物を指標とする限りにおいて、「たまたま遺物が入っていなかった」遺構を特定できる時期設定の方法論を持ち合わせていないのが現状であり、今後陶器以外の遺物編年や、空間構成における規範等を考慮しながら検討する必要がある。

以上の点を理解した上で、内館の遺構配置を概観すると、15世紀段階にはすでに複数の屋敷地が構成されており北館における未成熟さとは一線を画することができる。そして16世紀前葉になると一部の建物群が求心的に構成され、いわゆる政庁的な色彩を濃くしIII期まで継続するが、III期はその求心的な部分と屋敷地的な部分に分離する傾向を読み取れ、竪穴建物跡が2棟の掘立に付属するような状況となる。おそらく、内館内における政庁的部分（ハレの部分）と日常生活的部分（ケの部分）が16世紀前葉から中葉にかけて拡張や分散をくりかえした結果と推定される。そして、16世紀後葉以後は、内館において政庁的機能はなくなり落城・廃城への道をたどると考えられる。

（注1）工藤清泰　1988　「浪岡城跡の発掘調査成果からみた北日本における中世城館研究の課題」『よねしろ考古』第4号

VI　内館出土陶磁器の特色

浪岡城発掘調査によって出土した陶磁器について、既刊報告書の中で器種別破片数を提示してきた。これを内館平場について比較したのが下表（Ch. 7）である。北館平場の調査面積はおよそ13,135㎡で対象陶磁器破片数は7,788点、内館平場の調査面積は5,966㎡で対象陶磁器破片数は7,171点であり、単位面積あたりの出土率は北館0.59／㎡、内館1.20／㎡となる。この事は、北館に比較して内館が単位面積あたり２倍の陶磁器が出土していることになり、内館における陶磁器需要が高かったか、使用期間が長かったかいずれかの結果と考えられる。

Ch.7 を見る限り特徴的な事項を列挙すると以下の如くである。

①青磁皿は、内館397点、北館754点で北館が1.9倍の出土数がある。

②白磁皿は、内館1,136点、北館548点で内館が２倍以上の出土数がある。

③美濃・瀬戸の製品は、内館976点、北館1,572点で北館が1.6倍の出土数がある。

④唐津の製品は、内館176点、北館340点で北館が1.9倍の出土数がある。

⑤珠洲擂鉢は、内館309点、北館44点で内館が７倍の出土数がある。

⑥越前擂鉢は、内館80点、北館293点で北館が3.6倍の出土数がある。

⑦瓦質土器火鉢類は、内館237点、北館797点で北館が3.4倍の出土数がある。

Ch. 7　陶磁器類器種別破片数出土表

産地	名称	器形	内館平場(1984～1987)			%	北館平場(1978～1983)			%	合計	%
中国	青磁	碗	1,328		1,833	25.6	1,007		1,883	24.2	3,716	24.8
		皿	397				754					
		香炉・鉢・他	108				122					
	白磁	皿	1,136		1,289	18.0	548		650	8.3	1,939	13.0
		碗	105				19					
		小杯・壺・他	48				83					
	染付	皿	879		1,182	16.5	1,047		1,318	16.9	2,500	16.7
		碗	280				230					
		壺・小杯・他	23				41					
	鉄・褐釉	碗	25		60	0.8	3		63	0.8	123	0.8
		壺	35				60					
	赤絵	皿・碗	9		9	0.1	11		11	0.1	20	0.1
朝鮮		碗・皿	13		13	0.2	22		22	0.3	35	0.2
日本	美濃・瀬戸（灰釉）	皿	537	699	976	13.6	1,087	1,218	1,572	20.2	2,548	17.0
		鉢・徳利・他	162				131					
	美濃・瀬戸（鉄釉）	碗	145	206			215	323				
		壺・皿・他	61				108					
	志野	皿	62	62			29	29				
	黄瀬戸	皿	9	9			2	2				
	唐津	皿	164		176	2.5	314		340	4.4	516	3.4
		碗・他	12				26					
	珠洲	擂鉢	309		380	5.3	44		54	0.7	434	2.9
		甕・壺	71				10					
	越前	擂鉢	80		609	8.5	293		614	7.9	1,223	8.2
		甕・壺	529				321					
	瓦質土器	火鉢・他	237		237	3.3	797		797	10.2	1,034	6.9
	産地不詳陶器	擂鉢	314		407	5.7	434		464	6.0	871	5.8
		甕・壺・他	93				30					
計					7,171	≒ 100			7,788	≒ 100	14,959	≒ 100

以上の数値はあくまで破片数の数値であるため、概略的傾向をみるためには有効でも、はたして陶磁器の実数（個数体）としてどうなのかという疑問が残る。そのため、作業仮説として青磁と白磁について実見しながら個体数把握をしたのが下表（Ch. 8・9）である。

Ch. 8　青磁分類別個体数表（分類はP30を参照のこと）

	碗Ⅰ類	碗Ⅲ類	碗Ⅴ類	碗Ⅵ類	碗Ⅶ類	碗Ⅸ類	皿Ⅱ類	皿Ⅳ類	香　炉
内　館	1	93	7	29	177	75	4	78	6
北　館	0	144	12	15	29	66	11	254	16

（※個体数を出すにあたっては主として口縁部の整形・文様・胎土・釉調を総合的に観察した結果に拠った。）

Ch. 9　白磁分類別個体数表（分類はP30を参照のこと）

	小杯Ⅰ類	小杯Ⅲ類	皿Ⅰ類	皿Ⅲ類	皿Ⅳ類
内　館	10	1	94	12	162
北　館	5	7	35	8	96

（※個体数を出すにあたっては口縁部・底部の残存部とともに、胎土・色調等を総合的に観察した結果に拠る。）

青磁碗について破片数でみると、内館1,328点、北館1,007点は内館が1.3倍の比で多く出土しているだけであるが、碗Ⅲ類（線描蓮弁文碗・小野分類：蓮弁文碗ｃ群）は北館が内館の1.5倍の出土率を示し、逆に碗Ⅶ類（無文端反碗）は内館が北館の６倍以上の出土率を示しており、個体数の中では好対照をみせている。破片数でも指摘できた青磁皿が北館に多い傾向は、いわゆる稜花皿（皿Ⅳ類）の個数において北館が内館の3.2倍を示す結果と符合している。

白磁小杯についてみると個体数自体は少ないものの、Ⅰ類は内館で北館より２倍の出土率を示すのに対し、Ⅲ類は北館が内館の７倍を示す。白磁皿Ⅰ類（小野分類：白磁皿Ｂ群）は内館が北館の2,7倍の出土率を示し、皿Ⅶ類（小野分類：白磁皿Ｃ群）もまた内館が北館の1.7倍の出土を示し、破片数において指摘した内館が北館の２倍の白磁皿を出土する傾向を裏付けている。

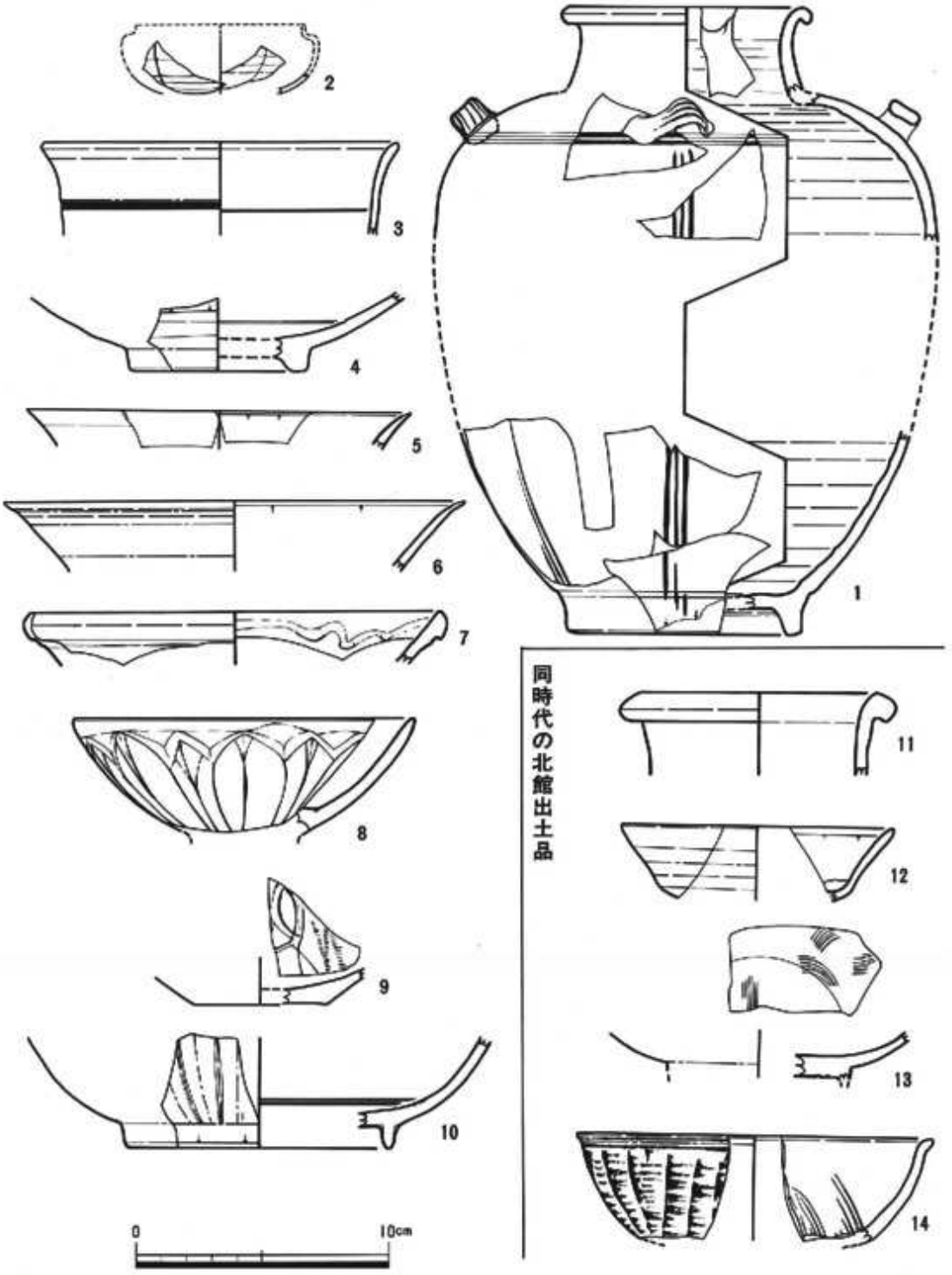
以上の事から、破片数の集計は個体数の数値を考える上で有効な数値と成り得ることを追認しているが、編年的な意味ではどうであろうか。浪岡城跡のように100年以上も城館として形成されたり、城館期以前から別性格の遺跡として形成され複層的な陶磁器を出土する場合、層位的把握や遺構別把握が最も考古学的研究対象となるが、現状ではとてもその水準まで至っていない。

まず、城館期とそれ以前に分けて陶磁器の概要をみてみる。

(1)12～13世紀の陶磁器

内館の調査で概略を理解できた陶磁の中に、今まで伝世品として扱かってきた城館期以前の製作年代観を有する陶磁器群がある。これら中には同時期に使用されたと考えられる土師質土器の出土によってもはや伝世品としての理解より、城館期以前にも浪岡城遺跡内で生活していた人々があったと理解する方が現実的であると認識するに至っている。ただ、本時期の遺構を

Fig. 11 陶磁器実測図(1)



明確に把握できなかったことは、城館期の地業・作事の多さにもよるが環境整備を目的とする調査方法にも一因があったと言わざるを得ない。

まず、本時期の中国製品としては白磁四耳壺・白磁皿・白磁碗・白磁合子・青磁碗・青磁皿があり日本製品として瀬戸瓶子・同卸皿・同仏花瓶、産地不詳須恵器系甕、そして在地製品として土師質土器が存在する。

白磁四耳壺は北館にても出土していたが、内館では一応推定復元図を作製できる資料（PL. 10—①、Fig. 11—1）があり、推定高約25cm、口径10cm、最大幅20cm、底径9.4cm、口縁は玉縁状に外側に張り出し胴部上半で最大幅を有する。耳の取り付け部に横位の割線二条、胴部上半から底部にかけては一定間隔を有して縦位の割線が三条施され、底は高さ1cmほどの高台造りとなっている。胎土堅緻・釉調は光沢のある灰色で内面のロクロ成形痕が特徴的である。

白磁皿には、口縁が外反して口禿を呈するもの（PL. 10—②、Fig. 11—5）があり、碗には口禿のもの（PL. 10—②、Fig. 11—6）や玉縁を呈するもの（PL. 10—②、Fig. 11—7）がみられる。白磁合子と推定されるものに胴部を輪花状に成形した小破片（PL. 10—②、Fig. 11—2）がある。

青磁碗には、複葉の鎬蓮弁文を有する例（PL. 10—②、Fig. 11—8）や白磁碗と同様に底部上半で釉が止まる例などもみられる。皿としては内面に櫛描文を有する底無釉の例（PL. 10—②、Fig.11—9）や外面に鎬蓮弁文を有するきれいな青磁釉を施した例（PL. 10—②、Fig. 11—10）がある。

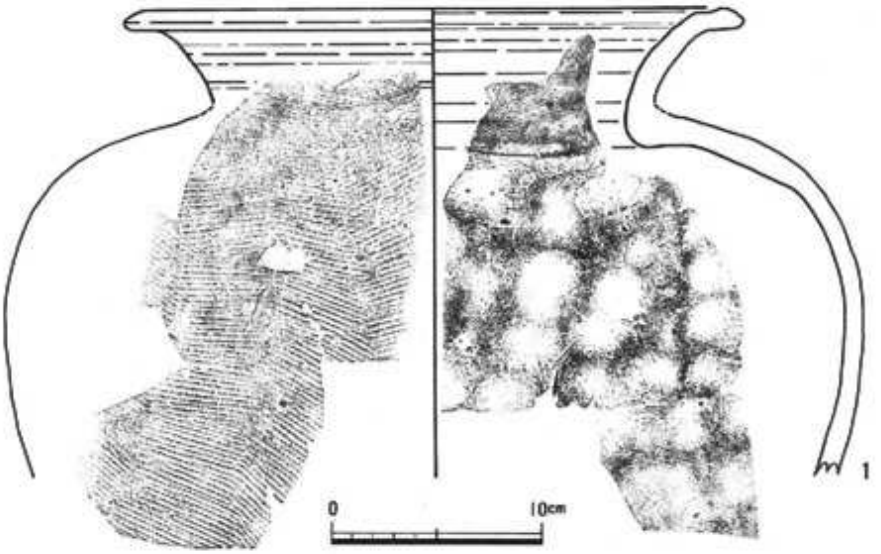
瀬戸の製品としては、13世紀後半と鑑定を受けている瓶子（PL. 10—④、Fig. 21—2・3）、底に糸切痕を残す仏花瓶底部片（PL. 10—④、Fig. 21—4）、釉がハゲ落ちている卸皿（PL. 10—④、Fig. 21—1）がある。

産地不詳須恵器系甕としては、推定口径29.6cm、口縁はするどく外反し内面に段状のロクロ成形が存在する。外面胴部は幅2mm前後の細かい叩目があり、内面には凹凸した叩きあての痕跡が残っている。外面胴部および口縁部に灰釉と思われる釉が認められる（PL. 11—⑤、Fig. 12—1）。なお、本資料の類例として秋田県大館市矢立廃寺遺跡のものがある。

土師質土器を前回の報告書（「浪岡城跡IX」P110）では、一括して城館期に使用されたと考えたが、その後の他遺跡等の比較によって、城館期以前の遺物と認識するに至った土器類である。特に土師質土器が陶磁器類と共伴する状況をみると、T41・42区から多量に出土した土師質土器と白磁四耳壺（Fig. 11—1）、須恵器系甕（Fig. 12—1）が同一層から伴出している以外、15〜16世紀の陶磁器群に混在している結果しか得られていない。また土師質土器伴出の遺構としてはSE128（V48区）だけが単純遺構と認識できるが、これ以外はたとえ土師質土器が出土しても遺構年代を決定できる状況ではない。

前述の土師質土器・白磁四耳壺・須恵器系甕が出土している遺跡としては、平泉関連遺跡（岩

Fig. 12　陶磁器実測図(2)



手県)・矢立廃寺遺跡（秋田県大館市）等があり、いずれも12世紀を中心とする年代観で一致している。浪岡城跡出土の土師質土器にあっても、手づくね成形土師質土器を各地の研究者に観察していただいた結果、12～13世紀代をはみ出して城館期（15～16世紀）に入れることは無理である意見がすべてであり、明確な層位的・遺構別出土状況把握からの資料ではないが、現時点では土師質土器を城館期以前の遺物と考え報告する。

Ⅰ類　手づくね成形（内型成形の可能性も否定するものではない）で、口径10cm前後、器高2cm前後の小皿。(PL. 11—⑥、Fig. 13—1～9)

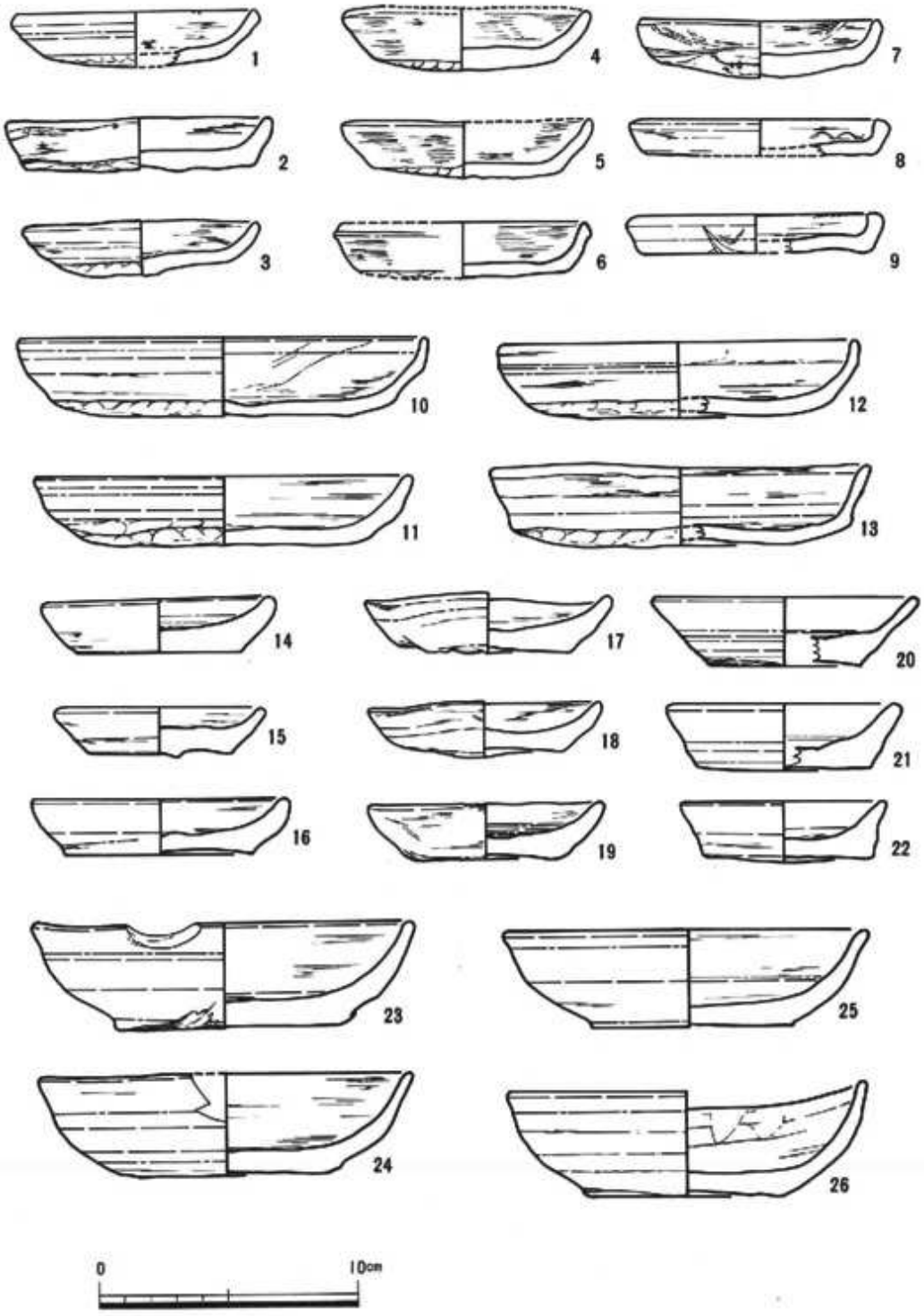
外面胴部立ち上がり横ナデ、以下は指頭による整形。内面は指ナデによって横方向に調整されている。色調は暗灰色・黄灰色・赤褐色等各種存在するが、基本的形状はかわらない。一部に、底部立ち上がりが直立し、口縁が平坦な器形が存在する（Fig. 13—8・9)。

Ⅱ類　手づくね成形で、口径14cm前後、器高3mm前後の皿。底はまったく無調整であるのに対し、外面底部立ち上がりから口縁にかけては横位のナデ、内面もナデによる調整をおこなっている。色調等はⅠ類と同様である。(PL. 11—⑦、Fig. 13—10～13)

Ⅲ類　ロクロ成形で、口径9cm前後、器高2cm前後の皿。底の厚さが約1cm前後と肉厚に成形され口縁は内湾気味につまみ出された程度で、底の切り離しは回転糸切りにより粗雑なものも多くみられる。(PL. 11—⑧、Fig. 13—14～22)

Ⅳ類　ロクロ成形で、口径15cm前後、器高4cm前後の皿。内面に同心円状のロクロ調整痕が残り、底は回転糸切による切り離し痕が明瞭である。(PL. 12—⑨、Fig. 13—23～26)

Fig. 13　土師質土器実測図



以上の土師質土器の胎土には、小石等が混在して決して精選された粘土を使用しているとは考えられず、手づくね成形とロクロ成形の製作技術の相違はあっても焼成等による相違は明確でない。おそらく在地にて製作したものと思われ、今後の類例調査によって古代から中世への土師器系譜も明らかになると思われる。

(2)14～15世紀前半の陶磁器

本時期の陶磁器については、はっきりした年代観を有しているというより、前代から後述する城館期に至る過渡的製品として把握しているだけのため、概要を述べるにとどめる。製品としては青磁碗皿・白磁碗・瀬戸窯産・珠洲窯のものがみられる。

青磁碗の中には、鎬造りから篦ケズリ状になる蓮弁文を胴部外面に施すものが多く、口縁は直行状態である。内面に劃花文を有する例もある。(PL. 12—⑨、Fig. 14—1)皿には口縁が外反し、胴部に篦描蓮弁文を有する例（PL. 12—⑩、Fig. 14—2）がある。

白磁碗としては、口縁が端反りして施釉が底部下半で止まり、見込に印花文を施す例（PL. 12—⑪、Fig. 14—4)と、比較的薄手に成形され口縁が外反しながら立ち上がる例(PL. 12—⑫、Fig. 14—3）が存在する。おそらく後者は畳付部を除いて全面施釉とみられる。

瀬戸窯の製品としては、14世紀代として灰釉平碗（Fig. 21—5)、同壺（Fig. 21—6・7・8）鉄釉碗（Fig. 21—9)、同花瓶（Fig. 21—10・11）等があり（PL. 13—⑬・⑭)、15世紀前半代として灰釉浅鉢（Fig. 21—12～14・17)、同片口鉢（Fig. 21—16)、同壺（Fig. 21—20)、同瓶子（Fig. 21—18)、同卸皿（Fig. 21—15)、同平碗（Fig. 21—21）等の他鉄釉碗（Fig. 21—22～25）が認められる（PL. 13—⑮)。

珠洲窯の製品としては、口縁内面に櫛目波状文を有せず角ばった口縁の造りをする擂鉢等が本時期に属すると考えられる。

(3)城館期の陶磁器（15世紀後半～16世紀末)

城館期の陶磁器については、既刊報告書の中である程度まで報告済のものが多く、内館の全体像を理解できるように、名称別に器種・器形の概略を述べることとし、時期差等については、今後さらに検討を加えた後に編年的位置づけを考えてみたい。

a）青磁

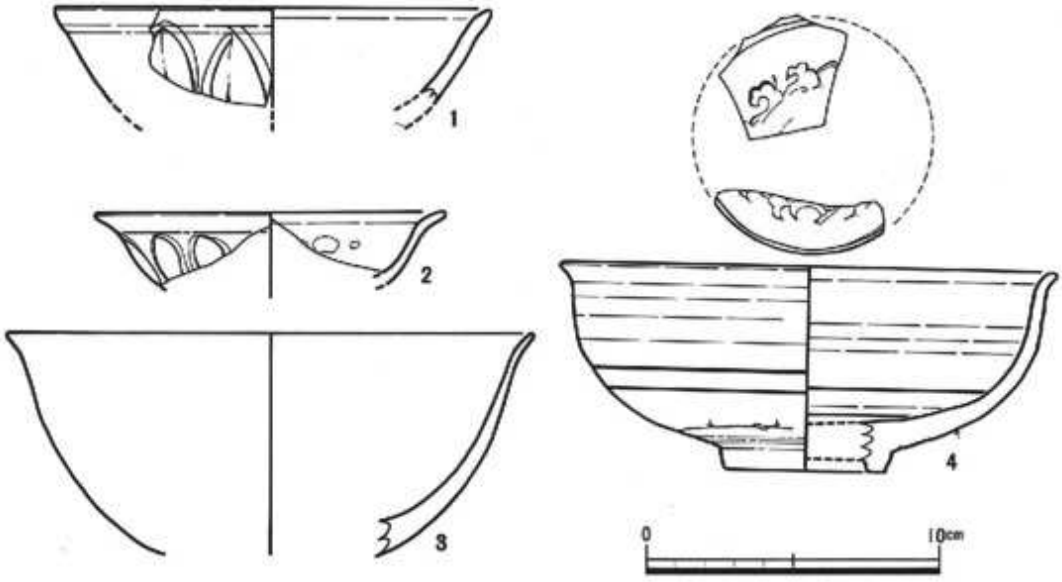
青磁の器形としては、碗・皿・盤・香炉・承台・壺・水注・小鉢等がある。

碗Ⅰ類　口縁が直行し、ある程度鎬状になった幅広の篦描蓮弁文を有する例(PL. 12—⑨、Fig. 14—1)。14～15世紀前半と考えた類と一部重複する。

碗Ⅱ類　簡略化した蓮弁文の中で、谷部分を若干削ってへこませ、蓮弁の単位が葉先から明確に一単位を構成する例（PL. 13—⑯、Fig. 15—1)。

碗Ⅲ類　山形蓮弁文・線描蓮弁文を有するものの中で、蓮弁の幅が狭く葉先と側線が一致しないほど簡略化した例。内面に劃線文・スタンプ文を施すものや、見込を釉ハギしてい

Fig. 14　陶磁器実測図(3)



る例もみられる（PL. 14—⑬、Fig. 15—2）。

碗Ⅳ類　蓮弁文の最簡略化によって葉先を省略し、縦位の線描だけになった例。見込にスタンプ文を施す（PL. 14—⑱、Fig. 15—3）。

碗Ⅴ類　外面口縁下に線描の雷文帯を有し、その下胴部に蓮弁文あるいは劃花文を線描によって施し、内面にも劃花文がみられる口縁直行の例。（PL. 14—⑲、Fig. 15—4）

碗Ⅵ類　外・内面にスタンプによる雷文帯を有し、内面に人形手や花状のスタンプ文を施す例（PL. 14—⑳、Fig. 15—5・7）。SX244出土のものには見込に「金玉満堂」の文字がみられる。

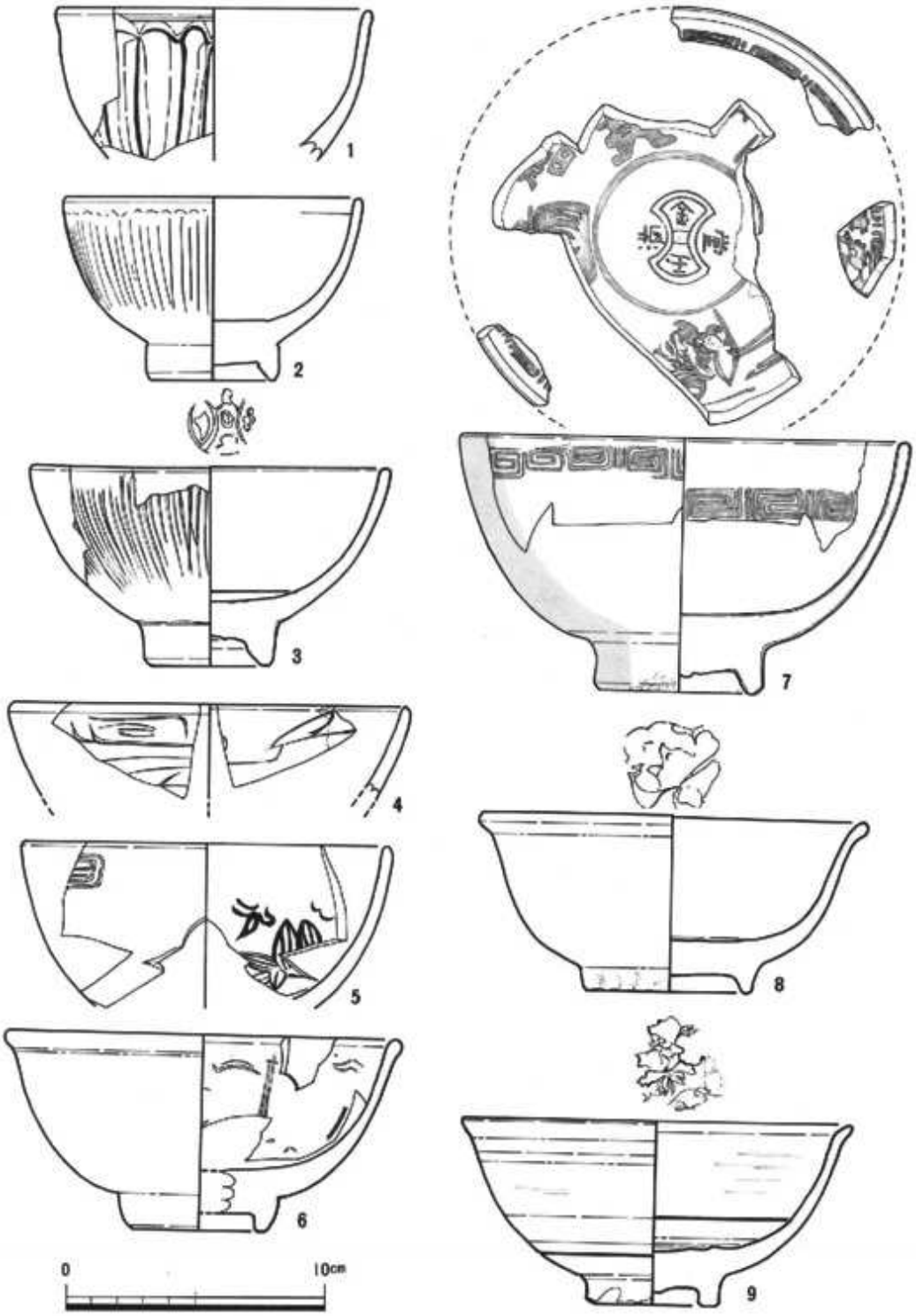
碗Ⅶ類　内外面は無文で口縁が端反ないしは玉縁伏を呈し、見込に印花文を施するものもみられる例（PL. 15—㉑・㉒、Fig. 15—8・9）。

碗Ⅷ類　外面は無文で口縁が玉縁状につまみ出され、内面に陽刻文を施す例。見込には釉ハギがみられる（PL. 15—㉓、Fig. 15—6）。また、陽刻かどうか不鮮明であるが外面無文で内面に花状の文様がみられる例がある（PL. 15—㉔）。

碗Ⅸ類　内外無文で口縁が直行するもの。口縁下外面に一条の劃線を有することが多く、概して無文で口縁が端反りする類（碗Ⅶ類）より釉が厚く施され透明感がある。（PL. 16—㉕、Fig. 16—1・2）

碗Ⅹ類　外面に縦位の片刃削り痕があり、内面は見込に印花文がある以外無文、口縁はやや外反する。釉調が透明感のある飴色を呈し胎土も精選されている（PL. 16—㉖）。

Fig. 15 陶磁器実測図(4)



皿Ⅰ類　口縁が外反し、胴部外面に幅広の篦描蓮弁文を有する例（PL. 16－㉗）

皿Ⅱ類　口縁が直行して立ち上がり、胴部外面に幅広の蓮弁文、内面に縦位の線刻が施される口径7～8cmの小皿（PL. 16　㉗、Fig. 16－5）。

皿Ⅲ類　口縁が外反し、内外面とも無文の例（PL. 16－㉘、Fig. 16－4）。

皿Ⅳ類　いわゆる稜花皿といわれる皿で、内面に櫛描波状文や劃花文を施す例とまったく文様のみられない例がある（PL. 16－㉘、Fig. 16－4）。

皿Ⅴ類　稜花皿のように腰部に段を有して朝顔状に開く形状を呈するが、口縁は平坦で稜花をなさない例（PL. 17　㉙）。

皿Ⅵ類　胴部下半で段を有し、そこから外反せず直線的に口縁に立ち上がる皿（PL. 17－㉚）。類例は少なく2片の出土である。

皿Ⅶ類　口縁から胴部を菊花状に成形した皿（PL. 17－㉛、Fig. 16－6）。

盤Ⅰ類　口縁が折縁状を呈し、胴部内面にヒダを有する例（PL. 17－㉛、Fig. 16－7）。

盤Ⅱ類　口縁までやや内湾気味に直行し、内面口縁下からヒダを有する例（PL. 17－㉛、Fig. 16－8）。

香炉Ⅰ類　口縁が内側に張り出した形状を呈する筒形のもの。突起状に張り出す例と肉厚に内側に張り出す例がある（PL. 17－㉜）。

香炉Ⅱ類　口縁が直行し筒形を呈する例（PL. 17－㉜）。

小鉢　口縁が外反し、内面にタスキ状のケズリを入れた例（PL. 17－㉜、Fig. 16－9）がある。

承台　四足を有し、上方に器物を受ける突起が四ヶ所に存在したと考える例（PL. 18－㉝、Fig. 16－10）がある。

水注（水滴）　小形壺形のもので注口がみられる（PL. 18－㉝）。

壺　内面はロクロ成形痕とともに銅の溶解物が付着している例（PL. 18－㉝）と頸部付近とみられる破片がある（PL. 17－㉜）。

b）白磁

白磁の中には小杯・皿・他の器形があり、形状と特徴から分類記述する。

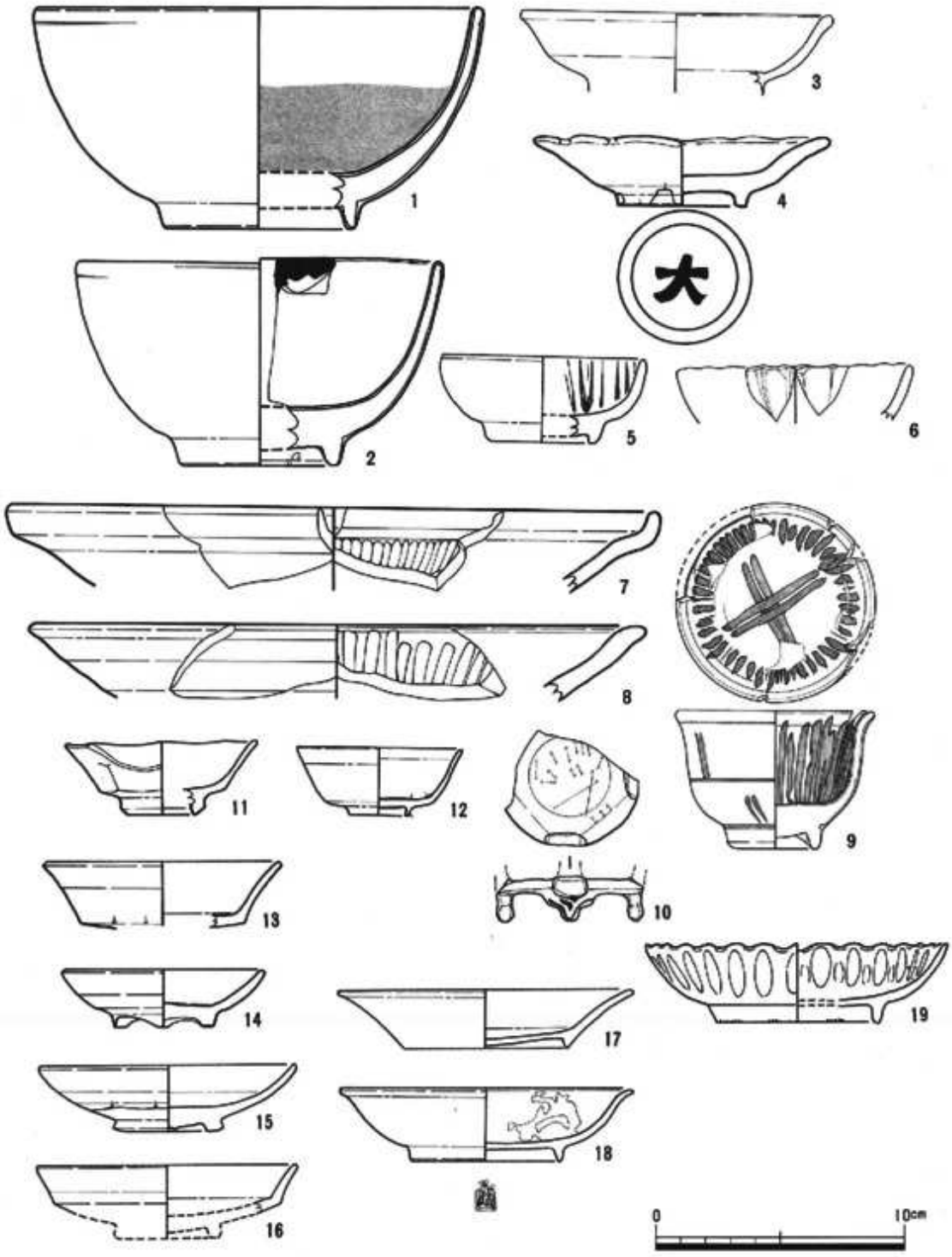
小杯Ⅰ類　胴部を八角に面取りし、口縁が外反気味に開き、胴部下半で釉止まりがみられる例が多い。見込が釉ハギのものもある。（PL. 18－㉞、Fig. 16－11）

小杯Ⅱ類　胴部の面取がなく、胴部下半の段から一気に外反し口縁にいたる例（PL. 18－㉞、Fig. 16－13）。

小杯Ⅲ類　内館では小片が一点あるのみであるが、硬質で口縁が直行するおちょこ形の小杯（PL. 19－㊵、Fig. 16－12）。

皿Ⅰ類　概して胎土が軟質であり、高台立ち上がりから口縁にかけて内湾しながら立ち上がる丸小皿。本類には高台に四ケ所削り込みを入れる例（PL. 18－㉟、Fig. 16－14）と削

Fig. 16 陶磁器実測図(5)



りがまったくみられない例（PL. 18—㊱、Fig. 16—15）があり後者の底には墨書の認められる例が多い。

皿II類　見込部分が平坦な状態で、口縁が外反気味の短い立ち上がりを呈する。高台の造作と施釉はI類よりは硬質のものが多い（PL. 19—㊲、Fig. 16—16）。

皿III類　硬質薄手の中皿で高台部から一気に外反し、朝顔状に開く例。高台畳付だけ釉ハギされ砂等の付着が認められる（PL. 19—㊳、Fig. 16—17）。

皿IV類　硬質薄手の中皿で高台部から内湾して立ち上ったのち口縁が端反りする。色調・釉調も各種存在するが一括する（PL. 19—㊴、Fig. 16—18）。底に銘を有するものもあり、浪岡城出土白磁皿の中では最も多く出土する。

皿V類　内館では出土例がなかったが、いわゆる菊皿といわれる輪花状に成形された例（Fig. 16—19）

皿VI類　上記の分類に含まれず、成形や施釉・焼成等が粗雑になされている例（PL. 19—㊵）。

他に、角形の白磁製品がある。この資料は外面に劃花文等を施し、内面には型押し時に付いたと思われる布圧痕が残っている例で、製作年代等は不詳である（PL. 20—㊶）。

c）染付

染付の器形には、壺（水注？）・小杯・碗・皿・盤がある。

壺(水注？)　壺とみられる中にはやや広口で口縁外面に雷文帯を有する例（PL. 20—㊷、Fig. 17—1）、胴部に牡丹唐草文を有する例（PL. 20—㊷、Fig. 17—2）があり、耳を取り付ける例（PL. 20—㊷、Fig. 17—3）は水注とも考えられる。

小杯I類　高台内は無施釉で腰部立ち上がりから口縁にかけて一気に外反する例（PL. 20—㊷、Fig. 17—4）。外面に草花文、見込にも特徴のある文様を有している。

小杯II類　I類より小型で、口縁が直行した立ち上がりを呈し、見込に山水画文等を施す例が多い。（PL. 20—㊷、Fig. 17—15）

碗I類　口縁が端反りする例(PL.20—㊸)。本類には口唇に鉄釉が施され、外面に牡丹唐草文、見込に輪花状の意象を有する例（Fig. 17—5）と外面が唐草文あるいは草花文だけの例、そして内面口縁にタスキや雷文の意象を有する例（Fig. 17—6）などがある。

碗II類　口縁が直行し、見込部がU字形に落ち込む、いわゆるレンツー碗と言われる例（PL. 20・21—㊹・㊺・㊻）。本類には比較的器高が高く、外面に芭蕉葉文・アラベスク（連鎖）文・唐草文・飛馬文・雷文等を施す例（PL. 20—㊹・PL. 21—㊺、Fig. 17—7・8・9）と比較的器高が低く、内外面に独特の草花文を施す例（PL. 21—㊻）がある。

碗III類　見込が平坦に成形され口縁まで直線的な立ち上がりを呈する例（PL. 21—㊼、Fig. 17—10）。外面にアラベスク文、見込に十字花状文を施す。

碗IV類　見込が内側に盛り上がる形状を呈するいわゆるマントーシン碗（PL. 21—㊼、Fig.

Fig. 17 陶磁器実測図(6)

17—11)。内館では3片だけの出土で、見込みに菊花文・人物画文等がみられ、底には「長命富貴」等の文字が認められる。

碗V類　内館での出土はないが、16世紀末の特色を有する碗（Fig. 17—12)。

碗VI類　全体形がわからないとか、文様が明確でないため不分明な一群（PL. 21—㊽)。

皿I類　高台を有し口縁が端反りする例。本類には、見込に玉取獅子文、外面に牡丹唐草文を施す例（PL. 22—㊾、Fig. 17—13)、見込に梵字文・アラベスク文、外面に唐草状の意象を施す例（PL. 22—㊿、Fig. 18—1)、見込に十字花（羯磨）文・菊状の輪花文を施す例（PL. 22—51、Fig. 18—4)、見込に花卉文と外面に牡丹唐草文を施す例（PL. 22—52、Fig. 18—2)、見込に花卉文、外面無文の例（PL. 23—53、Fig. 18—3)、見込に雲堂状の文様で外面無文（PL. 23—54、Fig. 18—5）の例などが存在する。

皿II類　白磁皿III類と同様に高台から一気に外反して口縁にいたる朝顔状を呈し、見込に草花文・羯磨状雲堂文を有し、外面無文の例（PL. 23　54、Fig. 17—14)。

皿III類　いわゆる碁笥底の皿で口縁は内湾して立ち上がる。見込の文様として文字文、捻花文等があり、外面には光芒文・梵字文等がみられる（PL. 23—55、Fig. 18—6)。

皿IV類　口縁は端反（外反）りし、口縁部内面に四方襷状の意象を有する例（PL. 23—56、Fig. 18—10)。焼成粗悪のためか黄色の色調を呈する例もみられる。

皿V類　高台を有し、口縁が内湾して立ち上がる例。内面の文様として菊花文・山水人物文等を施す例（PL. 24—57、Fig. 18—9)、蚊龍文を施す例（PL. 24—58、Fig. 18—8）があり、まったく圏線だけかまたは陰文を有する例（PL. 24—59・60、Fig. 18—11・12）がある。

皿VI類　高台を有し、口縁は内湾した立ち上がりを呈するが焼成不良のためか磁器質にならず、見込を釉ハギする例（PL. 24—59）があり、圏線だけ認められる。

皿VII類　ミニチュア小皿。碁笥底で、菊皿状に口縁をケズリ外面に縦位の刻線を入れている。見込の文様は十字花（羯磨）文である（PL. 24—59、Fig. 18—13)。

皿VIII類　器形も明確でないが、見込に「福」字を有する例（PL. 24—59）と軟質な素地に貫入が多くみられ山水画状の文様を見込に有する例（PL. 24—59）があり、不分明の一群ととらえておく。

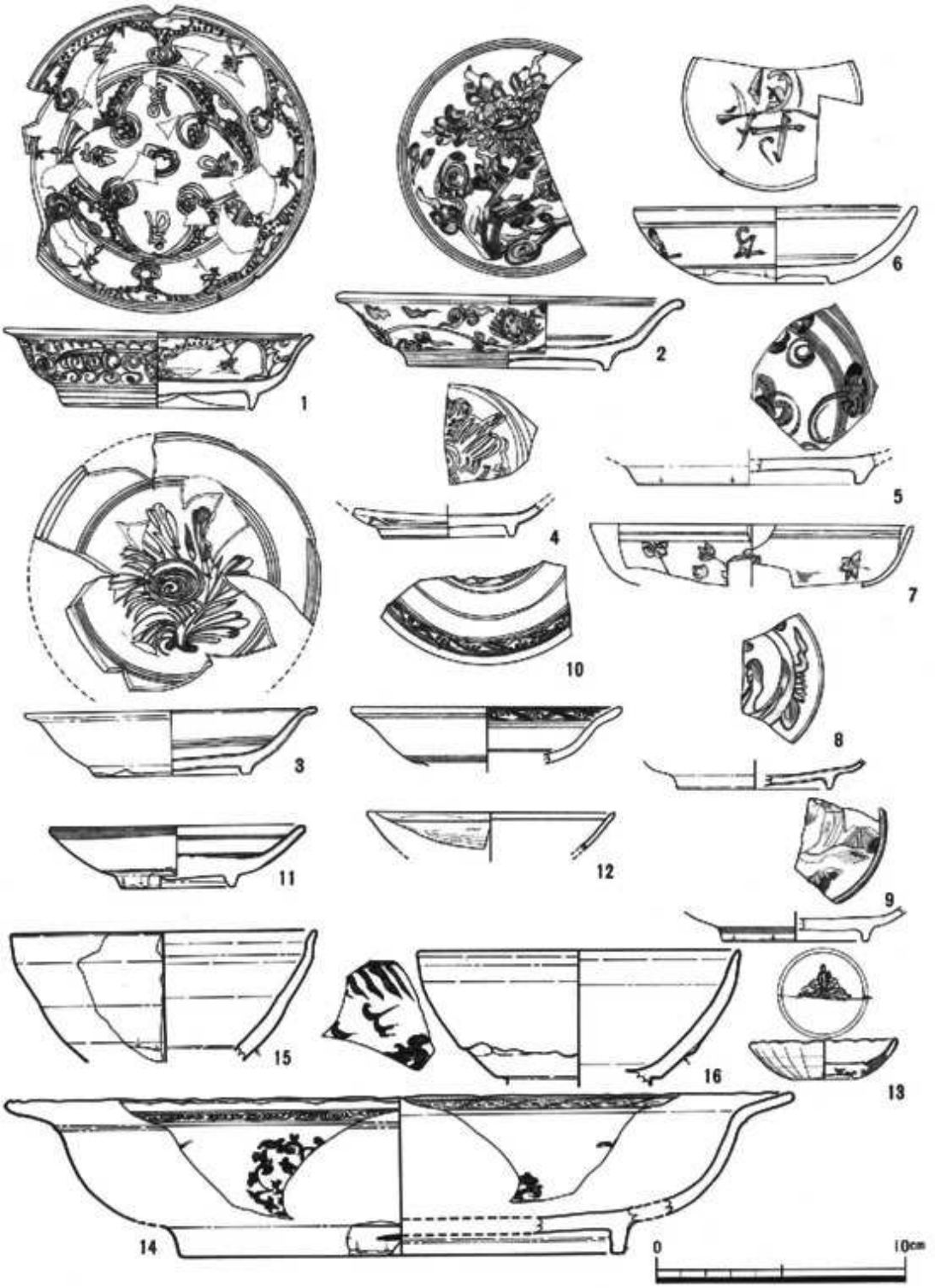
盤　口縁が外側に強く張り出した稜花状を呈し、推定口径32cm、推定器高6.45cmの製品で、口縁内面に四方襷文、外面に渦巻状の文様があり胴部外面に宝相華状の文様が施されている。見込は少片であるが波濤状の文様が認められる（PL. 24—60、Fig. 18—14)。

d）赤絵

赤絵には碗・皿の器種があり、内館では9点の出土があった。

皿I類　白磁皿IV類の器形に赤色・緑色で唐草状の文様を施す例（PL. 25—61)。

Fig. 18 陶磁器実測図(7)



皿II類　染付皿I類の器形・文様の上に赤色文様を施す例（PL. 25—㊶）。

皿III類　口縁が内湾形の皿に赤色で牡丹唐草文等の文様を施す例（PL. 25—㊶）。

碗　口縁が外反し、胴部に赤色・緑色の文様がみられる例（PL. 25—㊶）。

e）中国製鉄釉・褐釉製品

本製品には、碗・壺の器形がある。

碗　碗はいわゆる天目茶碗といわれるもので胎土が堅緻なことと口縁の造りがシャープなものが多い。外面の成形もケズリ出しの幅が広く、底部の成形も日本製と違いが認められる（PL. 25—㊷、Fig. 18～15・16）。底に「大」字の朱筆が認められる例あり。

壺　壺の中には釉調が黒色を呈する例と、褐色を呈する例があり、褐釉には耳が付く壺も認められる（PL. 25—㊸、Fig. 19—1）。

f）朝鮮製品

朝鮮製品には碗・皿の器形があり、光沢のある透明釉が施されている。

碗　高台は削り出し高台で薄手に成形され、外反気味に立ち上がる例と内湾気味に立ち上がる例がある（PL. 25—㊹、Fig. 19—2）。

皿　高台は削り出しにより成形され、内湾気味に立ち上がる例が多い。見込に重ね焼の痕跡を認める例、白色土を象眼した例等がある（PL. 25—㊹）。

g）美濃・瀬戸窯製品

美濃・瀬戸窯の製品の中で15世紀後半から17世紀前半までと鑑定を受けている器種について述べる。

1）15世紀後半

本時期には灰釉として平椀、皿、卸皿、香炉、壺、瓶子、盤、水滴の器形、鉄釉として茶入、水滴、碗、香炉、壺の器形がある。

灰釉平碗　口径20cm前後のものが多く、口縁端はシャープな成形となり胴部下半で釉止まりが認められる（PL. 26—㊺、Fig. 22—13・14・15）。

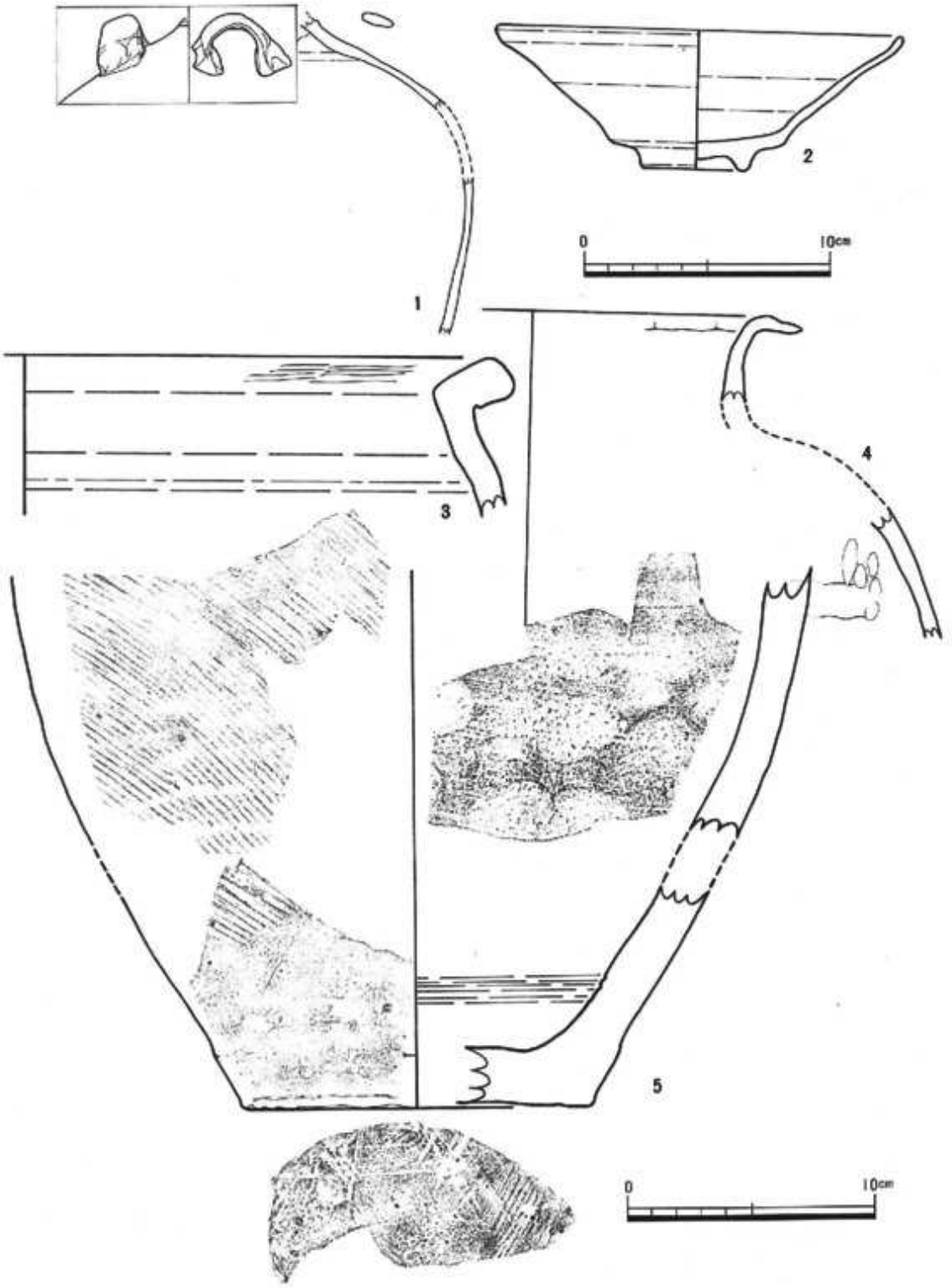
灰釉皿　いわゆる縁釉皿といわれる口縁部だけに施釉し底は糸切りの切り離し状態のままの例（PL. 26—㊺、Fig. 22—1～17）と口縁が折縁になり内面は全体に外面には底部上半まで施釉され底は糸切底の例（PL. 26—㊺、Fig. 22—8）がある。

灰釉卸皿　口縁が段を有し施釉も見込や底にまでは至らない例（PL. 26—㊺、Fig. 22—10）と口縁を内側に突き出した小形の例（Fig. 22—9）、片口を有する例（Fig. 22—11）がある。

灰釉香炉　口縁が内側に突き出した円筒形の例（PL. 26—㊻、Fig. 22—19～23）といわゆる袴腰を呈する例（PL. 26—㊻、Fig. 22—16～18）がある。

灰釉壺　おそらく仏花瓶の底部と思われる例（PL. 26—㊻、Fig. 22—25）がある。

Fig. 19 陶磁器実測図(8)



灰釉瓶子　肩部や底部等の破片があり、外面の施釉は底部上半で止まる例が多い（PL. 26—㊼、Fig. 22—26～28）。内面のロクロ痕が明瞭に残っている。

灰釉盤　口縁に段を有し、口径35cm前後と思われる。片口の付く例や、一部に卸目あるいは貼り付けた脚部の認められる例もある（PL. 26—㊽、Fig. 22—29）。

灰釉水滴　推定器高3.6cm、胴幅6.0cmを計る水滴（PL. 26—㊾、Fig. 22—30）。

鉄釉茶入　推定口径2.5cmで肩部片が出土している（Fig. 22—31）。

鉄釉水滴　推定口径2.0cmで注口が取り付けてある（PL. 27—㊾、Fig. 22—32）。

鉄釉碗　いわゆる天目茶碗であり、小片が2点のみ出土している。

鉄釉香炉　口縁が内側に丸く折りまげた状態の筒形製品（PL. 27—㊾、Fig. 22—33）と袴腰形の底部片（PL. 27—㊾、Fig. 22　34・35）がある。

鉄釉壺　肩部に耳の付くと推定される例や底部上半釉止り下に数条の沈線を施す例等がみられる（PL. 27—㊾、Fig. 22—36・37）。

2）大窯Ⅰa期

本時期には灰釉碗・皿と鉄釉碗がある。

灰釉碗　外面に青磁写しの剣先形蓮弁文や縦位の劃線だけを施す例がある（PL. 27—㊿、Fig. 23—3・4）。

灰釉皿　口縁が端反りし、見込に七弁の印花を施し、高台の削り出しがシャープな例が多い（PL. 27—㊿、Fig. 23—1・2）。底に輪ドチ痕の認められる例もある。

鉄釉碗　口縁がシャープなくびれを有し、高台の造りもきっちりした削り出しとなっている（PL. 27—㊿、Fig. 23—5）。

3）大窯Ⅰb期

本時期には灰釉皿（中型・小型）、鉄釉碗の器形がある。

灰釉皿　口縁が端反りし全面に施釉され口径12cm前後の中皿（Fig. 23—6・7）と口径8cm前後の小皿（Fig. 23—8・9・10）があり、見込に七弁印花文等を施す例がある（PL. 27—(71)）。

鉄釉碗　口縁が「く」字状にくびれ、胴部下半の露胎部は鉄サビによる化粧がけがなされている（PL. 27—(71)、Fig. 23—11・12）。

この他に鉄釉壺口縁部らしい破片も認められるが、小片のため全体形を推定するには至っていない（PL. 27—(71)）。

4）大窯Ⅱa期（PL. 27—(72)）

本時期には灰釉皿（大型・中型・小型）の器形がある。

灰釉皿　口縁は若干例を除くとすべて内湾気味の立ち上がりを呈し、口径30cm前後の大皿（Fig. 23—13・18）［大皿は大窯Ⅰ～Ⅱの鑑定を受けている］、口径12cm前後の中皿（Fig. 23—15・16）、口径8cm前後の小皿（Fig. 23—17）があり、中皿の中には内面にヒダを

有する例（Fig. 23—14）もみられる。

5）大窯II b期

本時期には灰釉皿、鉄釉碗、鉄釉皿、鉄釉壺の器形がある。

灰釉皿　口縁は内湾気味に直線的立ち上がりを呈する例（Fig. 23—19～24）が多く、見込に六弁状の印花（Fig. 23—27）、十六弁の菊花を押印される例（Fig. 23—28・29）があり、内面を釉ハギする例(PL. 28—㉓、Fig. 23—25)や口縁をヒダ状にする例(Fig. 23—26)も出現する（PL. 28—㉔）。

鉄釉碗　口縁は「く」字状に屈折し、胴部が前代に比較して直線的になる。底部は中央を削り出したものが多く鉄サビの化粧がけがされている（PL. 28—㉕、Fig. 23—32・33）。

鉄釉皿　口縁がヒダ状を呈する例（Fig. 23—34）と単純に外反する例（Fig. 23—35・36）があり、いずれも黒色と褐色の斑状の釉が施されている（PL. 28—㉔）。

鉄釉壺　頸部の破片で光沢の強い鉄釉が施され、ロクロ水挽き痕が明瞭に残っている（PL. 28—㉔、Fig. 23—37）。

PL. 28—㉓の皿は大窯II期として一括鑑定をうけたものである。

6）大窯III期

本時期には灰釉皿、鉄釉碗、茶入の器形がある。

灰釉皿　口縁が折縁状を呈する例が多くなり、内面にヒダ状の削り出しを有する例（Fig. 24—1～4）と持たない例（Fig. 24—5・6）があり、見込を釉ハギするものがある。また、口縁を指で押圧し波状の成形をし内面を釉ハギしている例（PL. 28—㉖、Fig. 24—7）もあり、見込の印刻は特色のある例（PL. 28—㉖、Fig. 24—8）が認められる。

鉄釉碗　天目茶碗の類には口縁のくびれが小さくなり（Fig. 24—9・10）、胴部が直線的になる井戸茶碗的な器形（Fig. 24—11）もみえる（PL. 28—㉖）。

鉄釉茶入　胴部下半に釉止りの認められる破片（Fig. 24—12）が出土している。

7）大窯V期

本時期には、灰釉皿、志野皿、黄瀬戸皿、鉄釉碗の器種・器形がある。

灰釉皿　口縁が折縁を呈する口径12cm前後の中皿が多く、内面にヒダを有してない例（Fig. 24—13～15）と有する例（Fig. 24—16）があり、内面見込は釉ハギしている（PL. 29—㉗）。

志野皿　口縁が端反りする例（Fig. 24—17・18・20）と内湾気味に立ち上がる例（Fig. 24—19）及び菊皿状の成形をする例（Fig. 24—21・22）がある（PL. 29—㉗）。

黄瀬戸皿　口径が27cm前後の大型皿で、口縁は外側に突き出す状態ですぼまり底部は碁笥底状の削り出しを呈する。外面は釉のムラがかなり認められる（PL. 29—㉗、Fig.

24…23～26)。

鉄釉碗　口縁のくびれは少ないものとシャープさが失われる例があり、外面胴部露胎部には鉄サビの化粧がけは認められず、素地が露出している（PL. 29—㊼、Fig. 24—27～29)。

8）登窯Ⅰ期

本時期の器種・器形としては緑釉に近い青織部皿、志野鉄絵皿がある。

青織部皿　口縁が内湾気味に直行した立ち上がりを呈し、緑色の発色を呈する釉が口縁から下に流れ落ちるように施されている（PL. 29—㊽、Fig. 24—30・31)。

志野鉄絵皿　内面に鉄絵文様が施され、口縁が直行して立ち上がる皿（PL. 29—㊽)。

以上の美濃瀬戸窯の製品に関して大窯期の推定実年代は以下のようになっているので参考のために提示しておく。

大窯Ⅰa期（1490年～1510年）——主な窯跡として「小金山」
大窯Ⅰb期（1510年～1530年）——主な窯跡として「小名田1号」
大窯Ⅱa期（1530年～1550年）——主な窯跡として「玉子沢」
大窯Ⅱb期（1550年～1570年）——主な窯跡として「妙土」
大窯Ⅲ　期（1570年～1580年）——主な窯跡として「東池Ⅰ」「尼ヶ根1号」
大窯Ⅳ　期（1580年～1585年）——主な窯跡として「山之神」
大窯Ⅴ　期（1586年～1610年）——主な窯跡として「牟田洞」
登窯Ⅰ期　（1610年～　　）

h）唐津窯製品（PL. 29—㊾)

唐津窯の製品には、碗・皿・鉢・壺の器形がある。

唐津碗　口縁が直行する立ち上がりを呈し、高台内はケズリ出したままで施釉されない例があり、黄白色の釉調を呈する。

唐津皿　皿の形状は高台のケズリ出しから内湾気味に口縁に至る例が多く、胴部上半で段を有し変形している例もある。施釉状況・成形状況によって分類が可能であるが、今回は特徴だけ記する。口縁が波状を呈し口唇に鉄釉胴部に白濁釉を施す例、胴部上半で段を有し鉄絵文様が内面に施される例、口唇にだけ鉄釉を施す例、主として灰釉だけの例等がある。

唐津鉢　小鉢と平鉢（北館にて出土）の器形があり、小鉢は灰釉や白濁釉を施している。

唐津壺　皿の類と違い、焼き締めの強い硬質感のある胴部片があり、内面に格子状の叩目が認められ施釉は薄く施されている。

唐津製品についてみると、北館では一部に砂目積みの皿が認められたが内館では現在まで胎土目積みの製品しか認められない。唐津の搬入年代が何時頃かという問題については、おそらく天正年間以降と考えられ、浪岡城落成・廃城年代とも係り今後十分に検討しなければならな

いところである。

i）珠洲（PL. 30—㊶・㊷・㊸）

珠洲の製品としては甕・壺・擂鉢等の器形があり、北館と比較して7倍以上の出土率を示し器種構成の上で注目できる資料である。

珠洲甕　口縁が玉縁状を呈して外側に強く張り出し、外面には叩目がみられる。全体形を知り得る資料がないので不確実であるが口径は約40cm前後と思われる（PL. 30—㊶、Fig. 19—3）。

珠洲壺　壺の特徴としては肩部に耳が取り付けられることと肩部下半に波状櫛目文が施されること、素地・焼成が他の珠洲製品と類似することから同製品と推定した（PL. 30—㊷）。

珠洲擂鉢　擂鉢については「浪岡城跡IV」P103・104で示した以外に特徴のある出土品はみられず、記述を省略するため前述の報告書を参照願いたい（PL. 30—㊸）。

j）越前（PL. 30・31・32—㊹・㊺・㊻・㊼）

越前の製品としては甕・壺・擂鉢の器形がある。

越前甕　甕の中には口径60cm以上の大形品と40cm前後の中形品があり、前者は口縁が直行し外面に一条の稜を有して肩部には「本」「格子」のスタンプ文がみられる（PL. 30—㊹、Fig. 20—1）。後者は、口縁外面に一条の稜を有し焼成時の付着物が各所に認められ、肩部に窯印と思われる箆書きが存在している（PL. 31—㊺）例と口縁内面に一条のくびれが認められる例（PL. 31—㊻）もある。

越前壺　口径20cm以下のもので、口縁が鍔状に外側へ強く張り出す例（PL. 31—㊼）、全体の色調が赤褐色を呈する例（PL. 31—㊽、Fig. 20—2）などがあり（PL. 32—㊾）や（PL. 32—㊿）で示した破片についても越前窯の可能性はあるが現在のところ産地は不詳である。

越前擂鉢　擂鉢は口縁に指を押しただけの片口を有し、内面口縁下に一条の沈線を巡らす特徴がある。色調・焼成度も各種存在するが一般に赤褐色を呈し、甕・壺のように硬質感のあるものは少ない。櫛歯原体は13本のものを使用している例が多く、珠洲や産地不詳の擂鉢に比較して歯先はきっちりした押圧卸目となっている（PL. 32—(51)）。

k）その他の陶磁器

いわゆる産地不詳の陶磁器の中には擂鉢、壺等の器形がある。

（PL. 32・33—(52)・(53)・(54)・(55)）の擂鉢類は、いわゆる瓦質の類であり、焼成・色調・成形等によって数類に分類できるが、今回は紙数の関係で省略する。ただ（PL. 31—(55)）で示した擂鉢・壺については備前産の可能性もあるため特記しておく。

Fig. 20 陶磁器実測図(9)

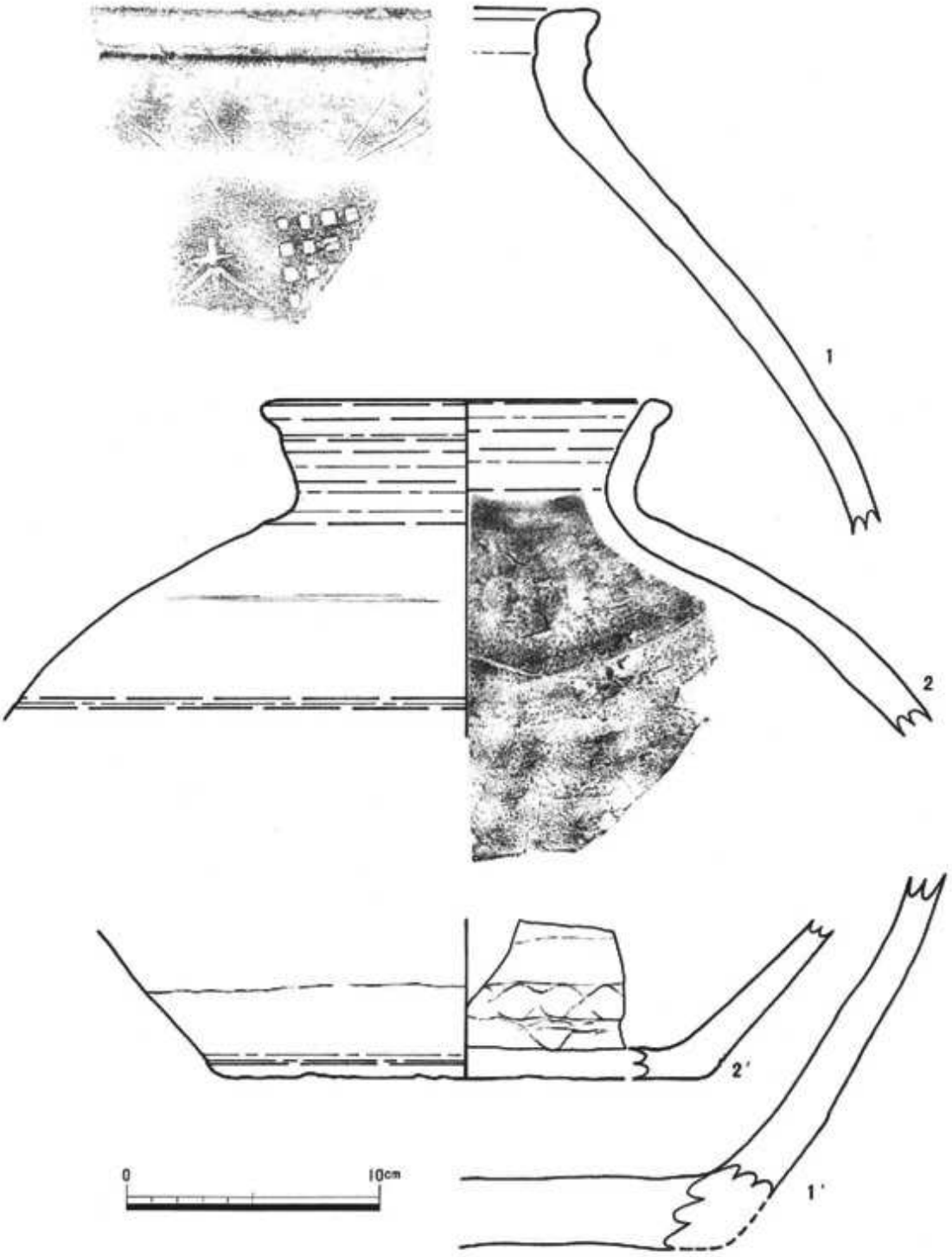


Fig. 21　美濃瀬戸実測図(1)

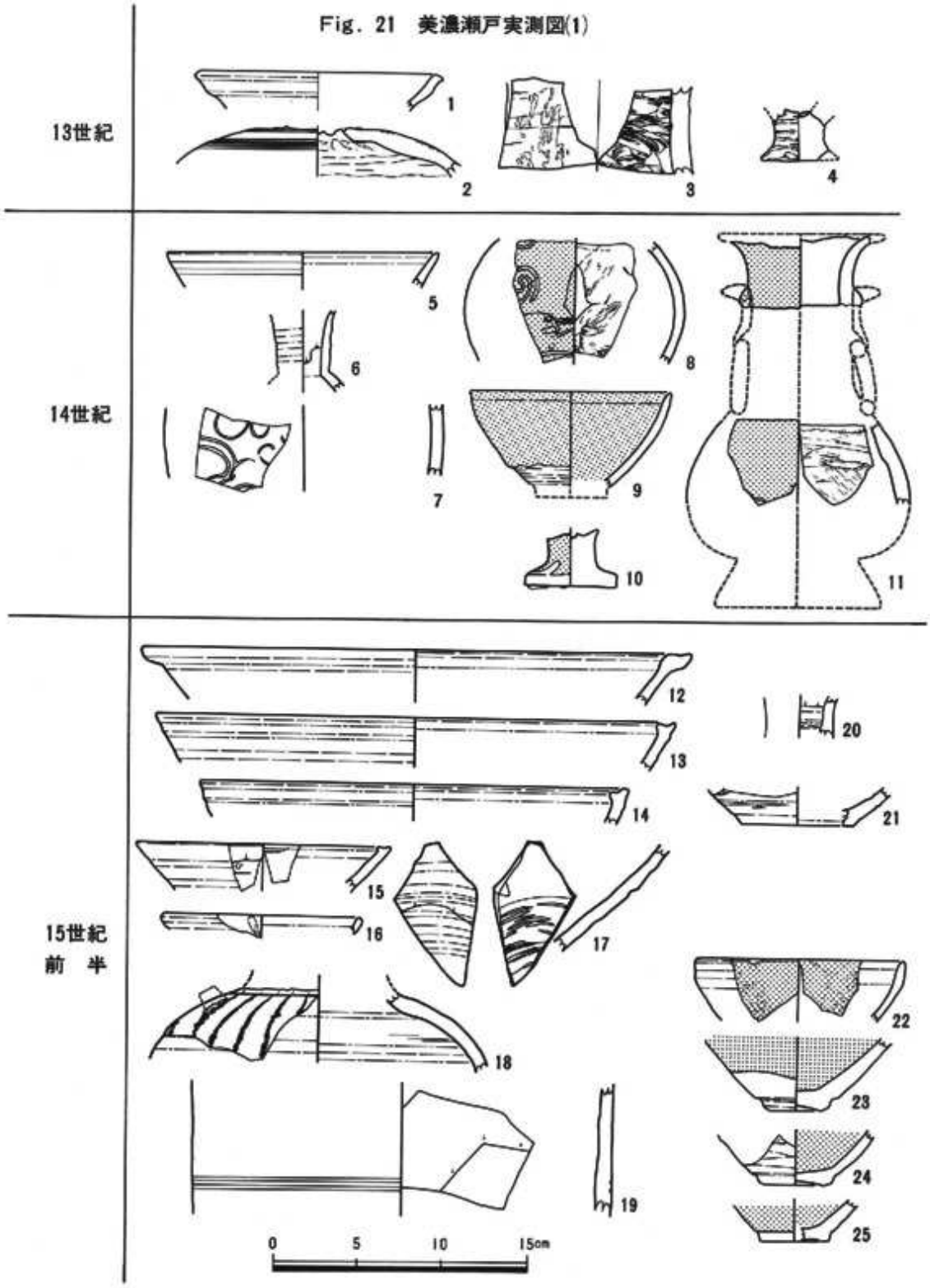


Fig. 22　美濃瀬戸実測図(2)

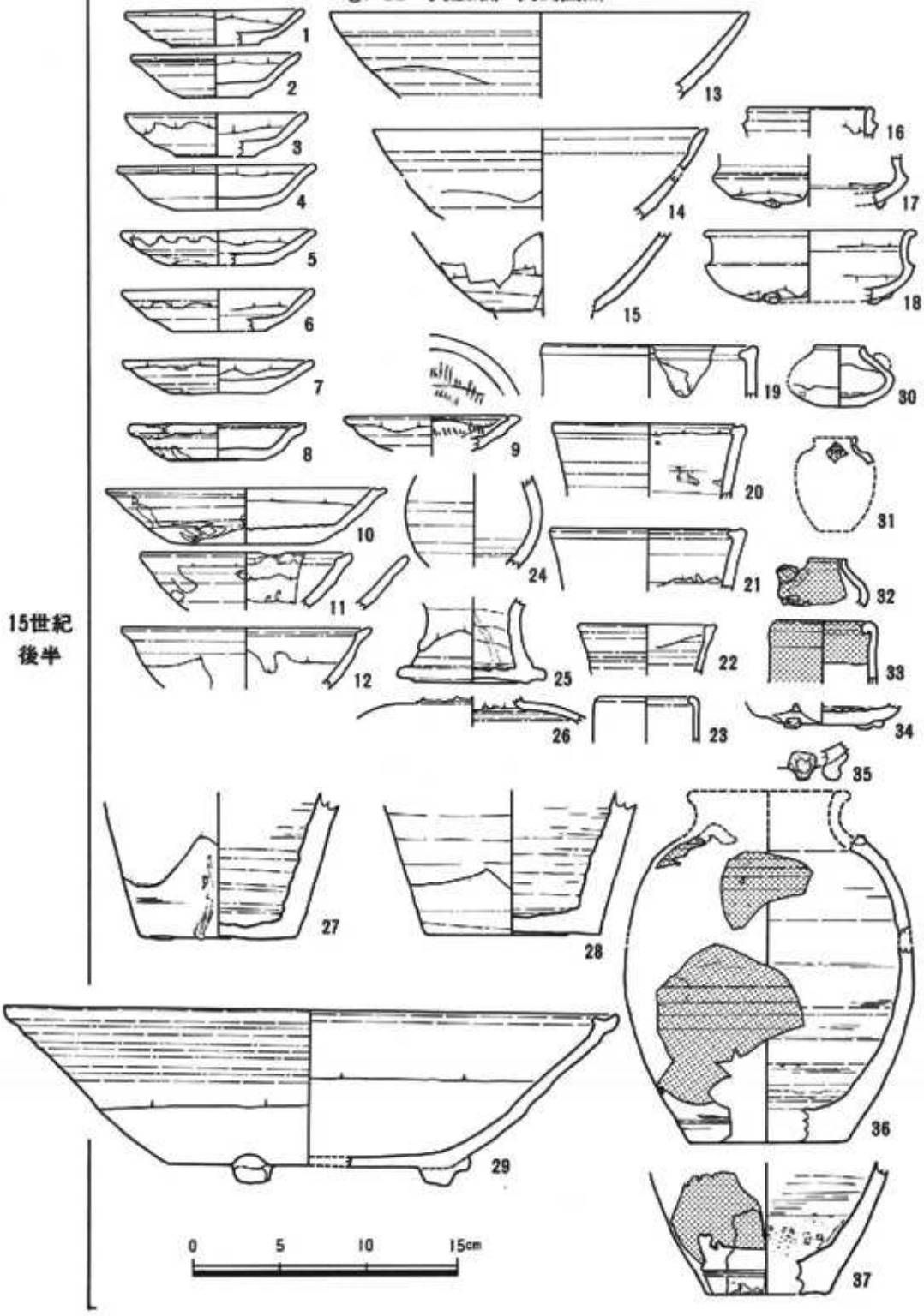


Fig. 23　美濃瀬戸実測図(3)

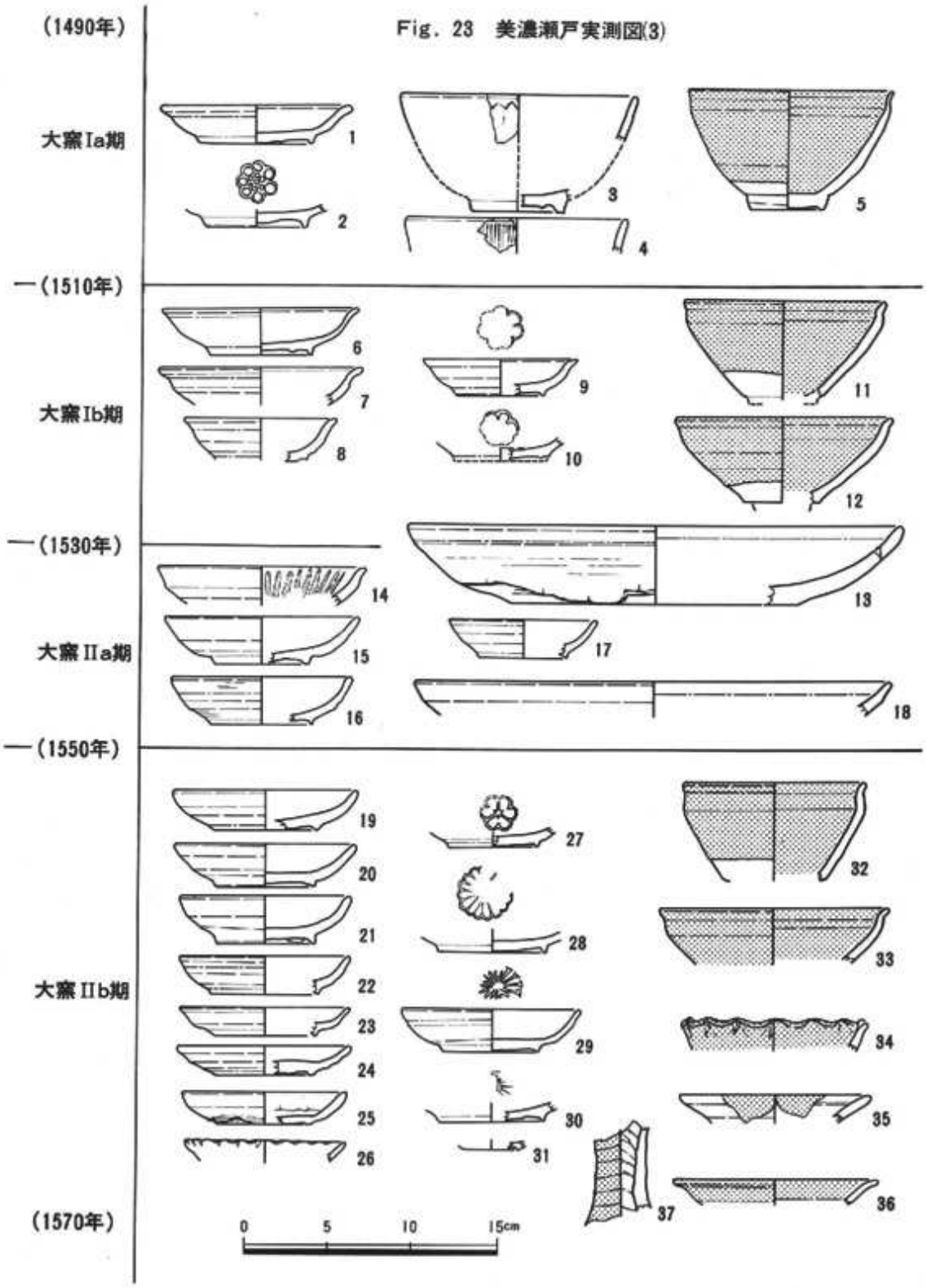
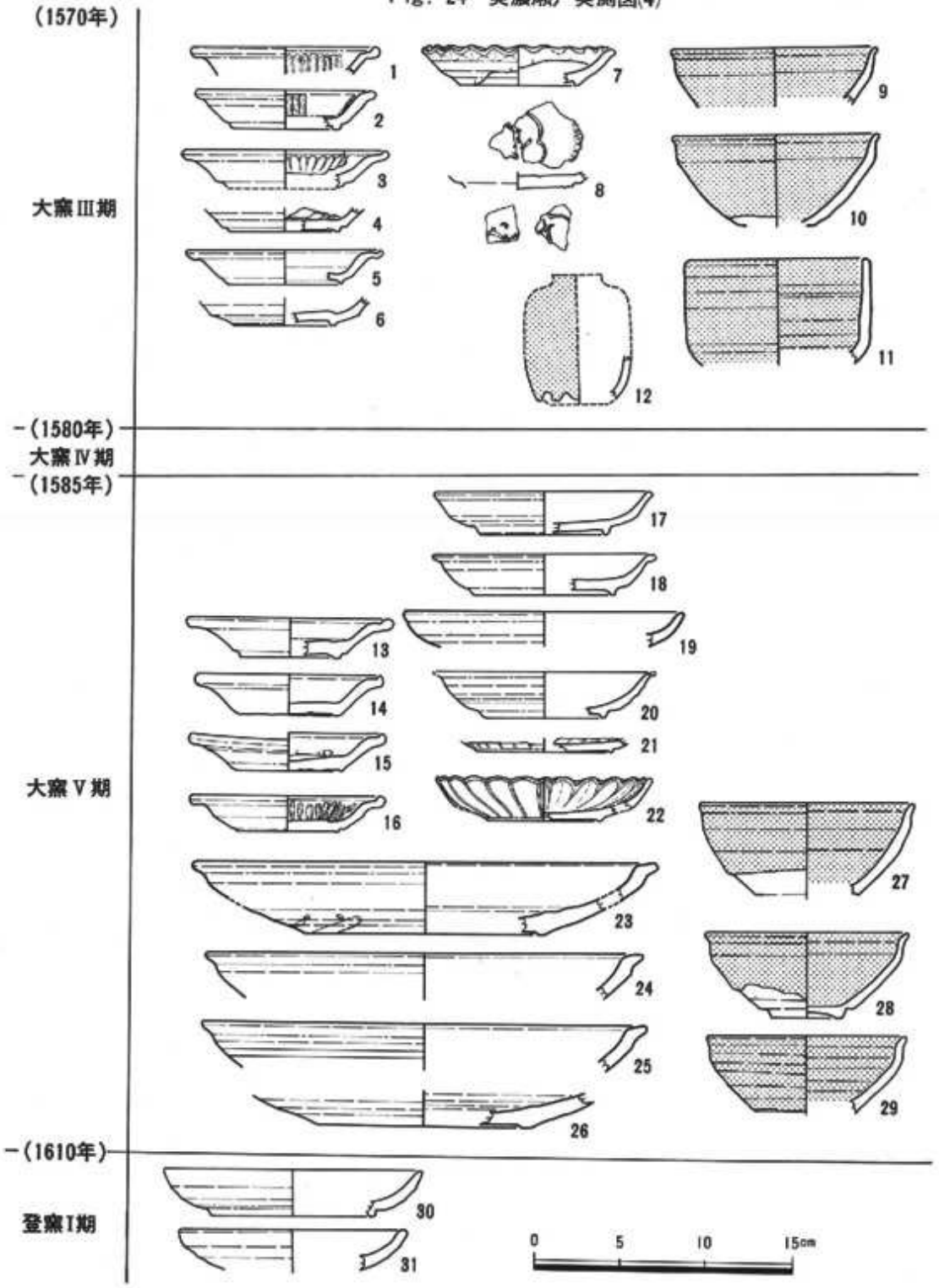


Fig. 24 美濃瀬戸実測図(4)



Ⅶ　浪岡城跡出土の瓦質土器とその考察

浪岡城跡から出土した瓦質土器は、西日本を中心に全国各地から出土する屋根瓦の質・色調の焼き物を総称し、いわゆる瓦器と呼ばれる事が多い椀形の器形以外の火鉢・香炉等の器形を対象としている。浪岡城跡からは、火鉢・行火・香炉・花瓶・燭台？・天目碗等の器形が出土し、その成形・素地・外面調整・焼成が一部を除きほぼ一律であることを指摘できる。

1．浪岡城跡出土瓦質土器の特徴

たとえば、火鉢類の成形にあたっては、輪積みないしは巻き上げに拠って概その形を造り、各部位（口縁帯・脚等）を接合して全体の形に整えてゆくもので、一部には型押し成形も認められるが、ロクロ引き上げ等による一気の成形ではないという点があげられる。素地は、一部の製品を除き不純物の少ない精選された粘土を使用し、焼成良好なものは灰白色の色調を有する。内面の調整は、口縁部周辺を除いて簡単な横ナデ痕あるいは指圧痕が残る無造作に対し、外面の調整は口縁周辺および隆帯部・底部立ち上がり部が横方向の研磨に近いミガキ調整、胴部を中心とする部分は縦方向による研磨に近いミガキ調整をおこなって器面を仕上げている。

焼成は一般に燻焼と称される表面が漆黒色に焼き上がる技術系譜上にあるが、浪岡城跡出土の製品に関して言えば、黒色を呈するものと褐色ないしは赤褐色を呈するものは半々の状況となっている。この事は、焼成時の窯構造・位置による原因もさることながら、土中に埋没する前段および埋没中の化学変化と考えられなくもない。事実、一部の接合資料の中では表面黒色の破片と褐色を呈する破片が接合している事例も多くみられる。(PL. 29—㊵参照)

火鉢類の脚を観察すると、外面はきっちりした面取りがみられるのに対し内面は粘土を押し付けた指紋痕が多くあり、同笵でなければ成形できないだろうと思われる類品が存在する。この事は型押しによる成形を推定でき、小形品や角型火鉢の成形にあたっても本技法の認められる箇所が存在し、前述した輪積みないし巻き上げ技法も型押し成形と併用されるか型押し時の単なる行為所産なのかは、現状の破片では明確に言及できない。

2．浪岡城跡出土瓦質土器の形状と分類

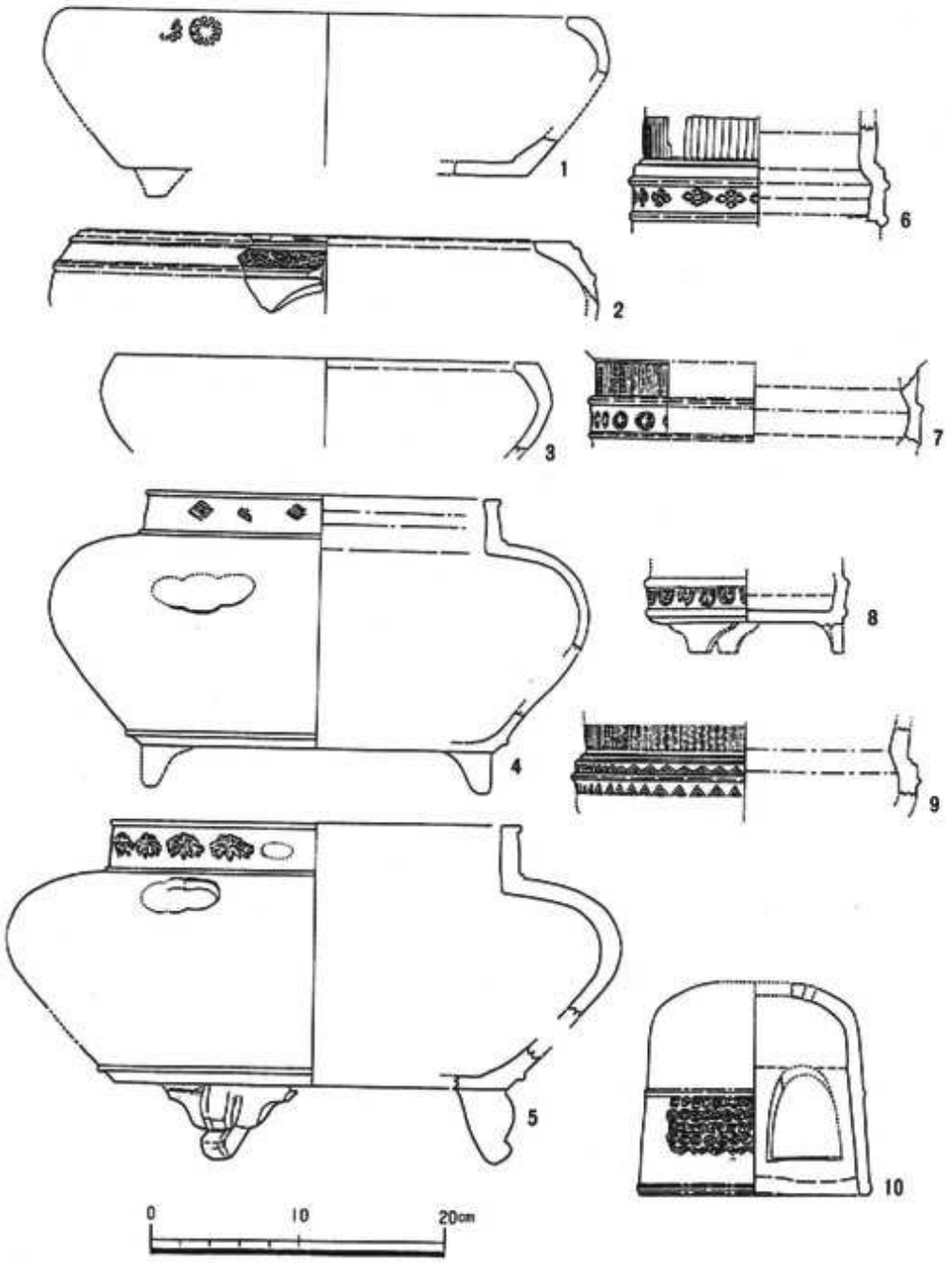
出土した瓦質土器の形状を実側図を参考にして分類する。ただし、破片からの推定復元も多々あることから、今後の再検討によって修正が生じることもありえる。

(a)　火　　鉢

火鉢の基本形として上観円形の類と方形の二種に大別できる。浪岡城跡出土品についてみると円形のものが圧倒的に多く、方形のものは破片観察で4～5個体である。

円形の形態としては以下のものがある。

Fig. 25　瓦質土器実測図(1)



Ⅰ類　口縁が肉厚に内湾し上端が1.5cmぐらい平坦に整形され、胴部上半で最大の張り出しを有して斜行しながら底部に至る。おそらく三脚を有すると考えられ、外面口縁下端に花弁状スタンプ文を２～３個一単位として押圧している。推定最大径39cm、器高（脚を除く）11cm。(Fig .25―１）この類は出土数が少なく２～３個体と思われる。

II類　口縁端がややすぼまる状態で内湾し、上端は約2cm強ぐらいの平坦面を有する。外面口縁下を二本の隆帯で区画し、その中に唐花菱文（唐菱文・花菱文）が連続押圧されている。この文様帯の下が最大径となる部分で窓が存在、やや緩い傾斜を示しながら底部に至ると思われる。推定最大径39cm。（Fig.25－2）浪岡城跡では1点の出土しかない。しかし、文様帯の有無を抜きにすれば口縁形上半が似かよった無文の破片も出土しており（Fig.25－3）それらは3～4個体の出土がある。

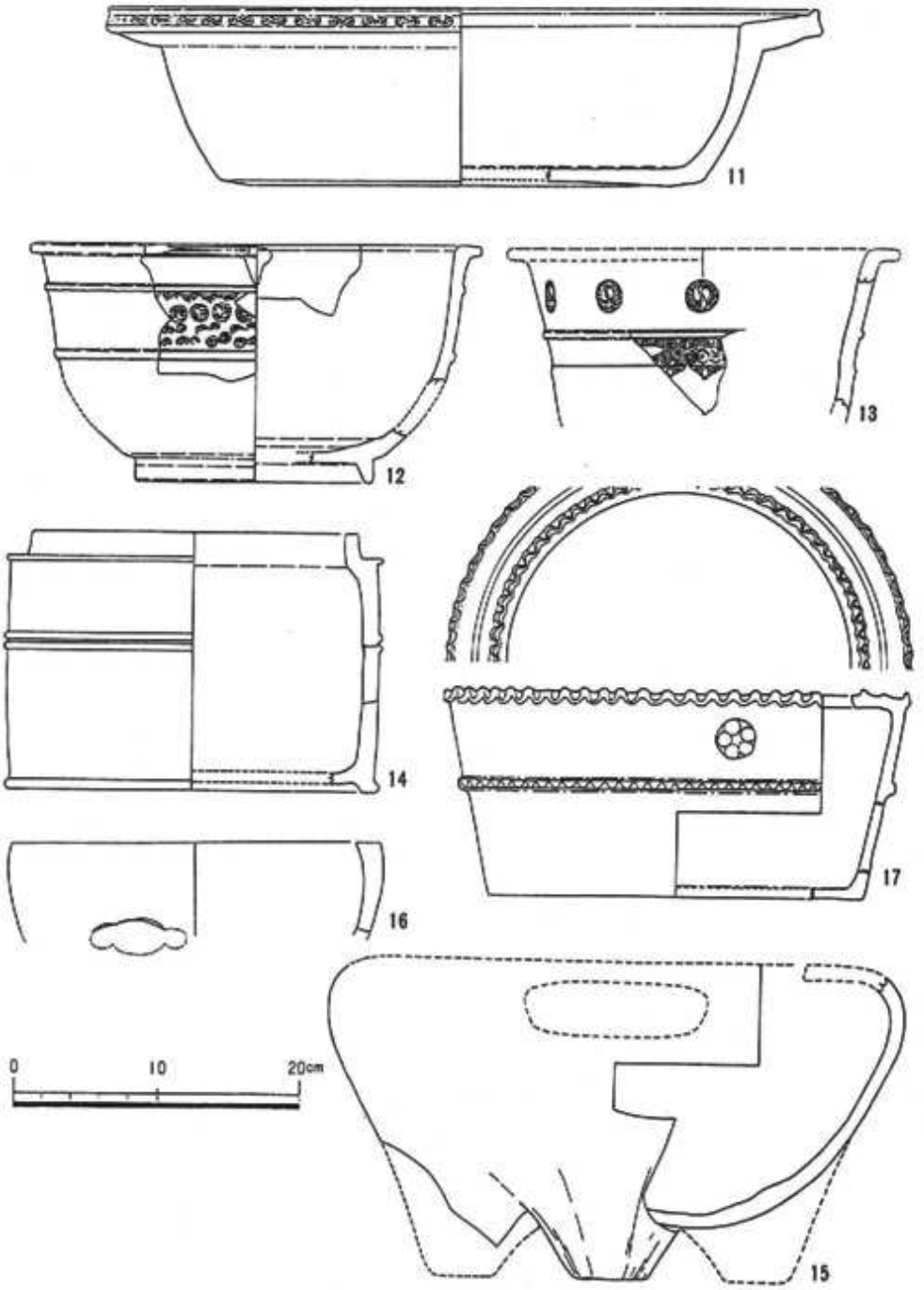
III類　口縁が高さ3cm以上直立し、胴部がその取り付け部から強く外側に張り出して下半は直線的な斜行で底部に至るもの。外面口唇部・頸部・底部上端に隆帯が巡り、口縁部帯に各種スタンプ文を押圧する。口縁部帯および胴部上半に窓を有し、底部には三脚が取り付けられると推定される。（Fig.25－4）は推定口径24cm、最大径37cm、器高（脚除）17.5cm、口縁に三重の菱形文（入子菱文）が連続して施されている。（Fig.25－5）は推定口径28cm、最大径42cm、器高（脚含）23cm、口縁帯に笹竜胆状のスタンプが連続して押圧されている。他の口縁帯文様をみると、唐菱（四弁）文（Fig.28—31）、唐菱（八弁）文（Fig.28—32）、四重入子菱文（Fig.28—33）、多重方形と×を組み合せた文様（Fig.28—34）、下に開いた花弁状文（Fig.28—35）、変形巴文（あるいは波濤文の変化か）（Fig.28—36）があり、胴部上半に沈線区画線を巡らし三巴文等を連続する破片（Fig.28—37）も存在するが詳細はわからない。本類は13個体以上の出土があると推定される。

IV類　浪岡城跡出土品からは全形を知り得る資料がなく、後述する尻八館出土品を標式とするもので、III類の底部下をさらに円筒形に接合し、三脚を有する形態である。この場合胴部下の円筒形底部外面には上端で寺社建築の連子窓から意象を取ったと思われる連子文がみられ、その下に隆帯等を伴って各種のスタンプ文が押圧されると推定できる。つまり、口縁が直立し（口縁帯にも連子文を施すのが一般的らしい）胴部は上半で強く張り出し、ほぼ口径と同じ程度の円筒形底部を胴部下に接合して三脚を付する。浪岡城跡出土品は、口縁部・胴部にあたる部分がみられず底部連子文下に唐花菱文（Fig.25－6）、八弁花文（Fig.28—38）、（Fig.28—39）、丸に十字の区画文（Fig.25—7）、指文形に近い蓮弁文状の文様（Fig.25—8）、半亀甲文と半菱形文を施した例（Fig.25—9）があり、III類と比較して小形のものが多いようで、6個体以上の出土がみられる。

V類　口縁が外側に強く張り出し、やや内湾気味の緩いカーブを有して底部に至り、底中央が若干上げ底の製品。口縁側面に鉤形文のスタンプ文を巡らしている。口径49cm、高さ12cm。（Fig.26—11）浪岡城跡では1点だけの出土である。

VI類　口縁が外側に若干張り出し、胴部は緩やかなカーブを示しながら丸味をもった底部に

Fig. 26　瓦質土器実測図(2)



至る。底部は接合はしないものの器面観察では高台を巡らす底になると推定される。(Fig .26—12) は胴部中央に二条の隆帯を巡らせその中に、上から半唐花菱文、丸に十字の区画文、逆S字 (両巴あるいは鉤形) 文が押圧されている。(Fig. 26—13) は隆帯を巡らす上半に鶴の丸文を一定間隔で、隆帯下に二列の亀甲文とすぐ下に沈線を巡

らせその下に半唐花菱文を押圧している。底部片の数から少なくとも4～5個体の出土が推定される。

VII類　口縁が内側に折れ曲った状態で直立し、胴部はほぼ直線的に落ち込み、底は外側で上げ底を呈する円筒形の器形。隆帯が頸部・胴部中央・底に巡る以外無文である。(Fig. 26—14) は推定最大径26cm、器高18cm、1個体だけの出土である。

VIII類　底部が中空になった三足となり、胴部張り出しから内側へ平坦に折れて口縁に至ると推定される、いわゆる風炉の製品。全体は無文と考えられ、胴部張り出し部に窓が付くと推定される。(Fig. 26—15)は、推定最大径40cm、器高22cm。本類は2～3個体の存在が確認できるが、中空足が強く外反した立ち上がりを呈すことなく、直線的な中空足の破片も出土しており（図示していない）別形態の三足火鉢も想像される。

IX類　口縁は内側に強く張り出し、胴部は斜行しながら平底の底部に至るもの。口縁部の上端および胴部中央に波状を呈する貼り付け隆帯を有し、胴部上半に輪花形の貼り付け文を数単位施こす。(Fig. 26—17) の素地・焼成は前述の火鉢類と違い、微砂・小石と多量の石英を含む精選されない素地であり色調も鈍い黒灰色で須恵器質の焼き上がりを呈している。2個体の出土である。

X類　円形火鉢類の中で、明確な形態を推定できないもの。(Fig. 26—16)はやや内厚な口縁を平坦に整形し、そのまま胴部に緩くカーブを描いていくもので、窓の存在が確認できる。また、外側に隆帯を有して円筒形を呈すると思われるものも存在するが図示はできなかった。

方形の形態は以下の通りである。

XI類　口縁が内側に強く張り出し、胴部は直線的に斜行しながら平底に至る。四隅に脚を取り付ける。胴部上半に二条の隆帯で区画された文様帯があり唐花菱文を連続して押圧し、底部上半に一条の隆帯を巡らす。(Fig. 27—18)は、推定幅40cm、器高(脚除)11.3cm。2～3個体の出土がある。

XII類　全形を知り得ないので詳細不明のもの。口縁がL字形に段状を呈するもの、胴部から口縁にかけて強く開いたものなどがある。(図示できなかった)

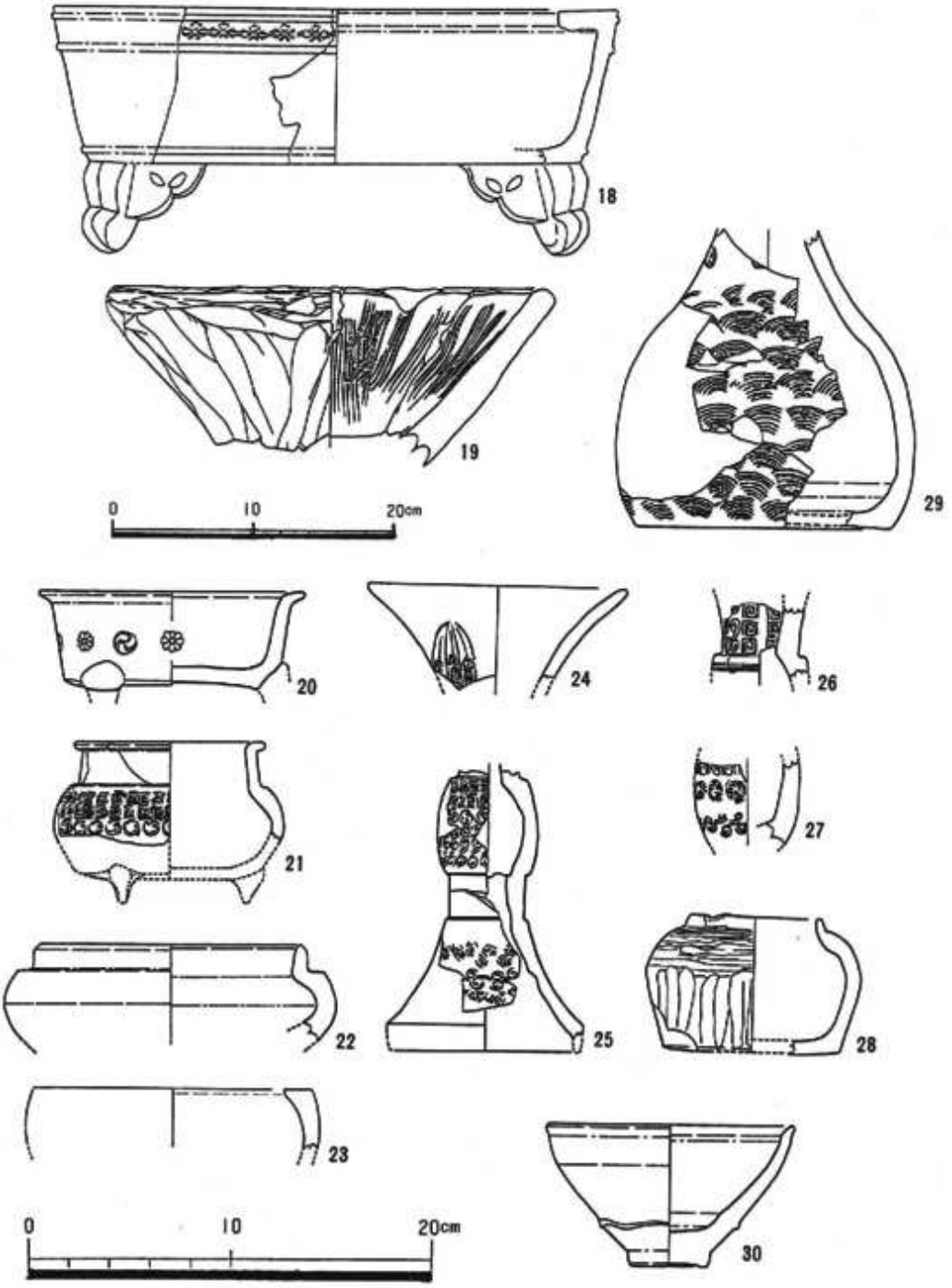
(b) 香　炉

香炉は現在まで上観円形の類のみ出土している。

I類　口縁が外側に張り出し、下方がやや小さくなる円筒形の胴部に平底が付き、底部立ち上がり部に三箇所脚を貼り付けている。胴部中央に八弁花と三ツ巴のスタンプを交互に押圧巡らしている。(Fig. 27—20) は、口径13cm、器高（脚除）4.8cm。3～4個体の出土があり、スタンプ文が三ツ巴文だけのものや鉤形文だけのものがある。

II類　口縁が外側に丸くつまみ出され、頸部は下方にやや開き気味に直行して胴部と接合、

Fig. 27　瓦質土器実測図(3)



胴部は丸みをもって外側に緩く張り出して底に至る。底の三箇所に脚を貼り付けている。胴部上半に、二列の雷文と一列の三ツ巴文が連続して押圧巡らしている。(Fig. 27—21) は口径9.5cm、最大幅11.5cm、器高7cm。本類は、同法量・同文様構成のもの

が2～3個体出土している。

III類　口縁が先細になりながら約1.5cmほど直立し、外側に強く張り出した胴部を接合している。底部は接合する破片がみあたらないため不明確であるが、やや高めの高台を巡らしていると推定される。(Fig. 27－22) は口径13cm、最大幅16cm、推定器高（高台除）5cm。本類は2～3個体の出土があり、口縁の立ち上がり部が3cm以上と高くなる同形態のものがありそうだ。

IV類　口縁を内湾気味に平坦に成形し、丸味のある胴部に至ると思われるが全形はわからない。(Fig. 27－23)

(c) 行　火（瓦燈）

器体を覆いかぶせるようなドーム形を呈して、下端に窓が存在することから行火あるいは瓦燈として使用したと考えられるもの。全体形を推定できるものは1点しかないため、I類として包括しておく。

I類　上方に孔を穿ち、釣鐘形に成形したもの。胴部中央に一条の隆帯を巡らし上半は無文、下半には雷文・三ツ巴文・雷文・三ツ巴文・半唐菱花文を交互に連続して巡らし、一箇所にドーム形の窓を開けている。(Fig. 25－10) は底径16cm、器高（現存）14.5cm。同様に行火状に使用したと考えられる破片は4～5個体の出土がある。

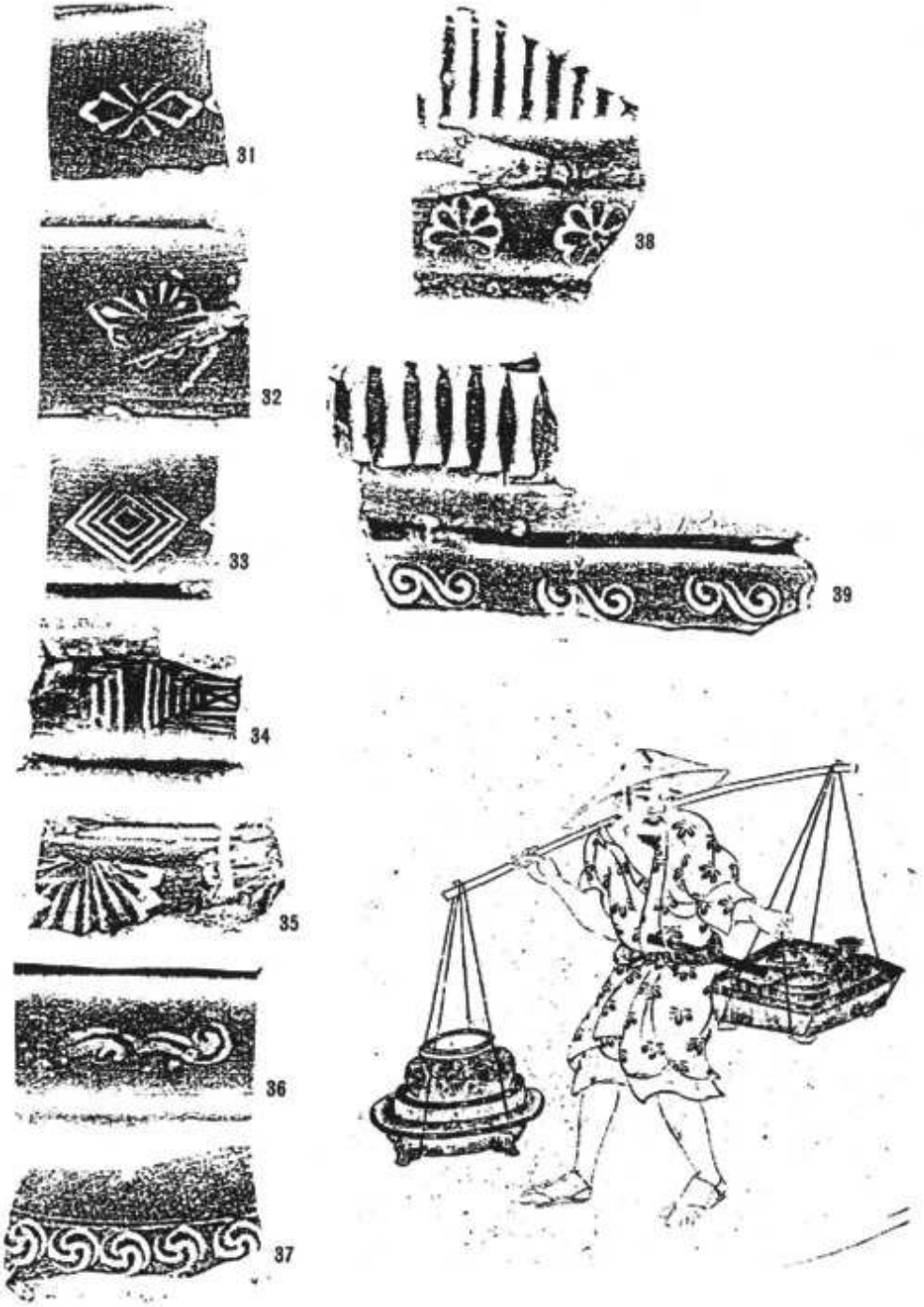
(d) その他の器種

その他の器種としては、花瓶、燭台？、片口小壺、碗等があり、それぞれの特徴を述べる。

I類　花瓶と想定されるものは、口縁が上方に向って広く開く、いわゆる尊式花瓶と言われる形状と考えられる。(Fig. 27－24) は口縁部だけの破片で明確ではないが、(Fig. 27－25) で示した燭台？の形状をイメージ的に有するのではないかと思われる。(Fig. 27－24) は推定口径13cmで、上方にのびる蓮弁を沈線で描き、その上に雷文スタンプを縦三列に施している。2個体の出土があると考えられる。全国的にも同形のものは少なく、朝倉氏遺跡で一例出土するが、滋賀県・聖衆来迎寺所蔵の銅製三具足の花瓶における文様意象と類似している。

II類　燭台と想定されるものは、蠟燭の取り付け部は不明で、大鼓状になった胴部から一段くびれて、下方に広がる底部が付属するものである。胴部には二列の雷文・二列の三ツ巴・鉤形文が、底部上半には丸に十字の区画文・変形鉤形文・半唐菱花文が連続押圧して巡っている。(Fig. 27－25) は現存器高19cm、底径10cmで、当初は花瓶とも考えたが、中央胴部と底部を区切る底がみられないことから上方まで中空状態であるため一応燭台としておく。本類に類似する破片として、縦位に雷文・鉤形文を配する例 (Fig. 27－26)、雷文・丸に十字の区画文・変形鉤形文を配する例 (Fig. 27－27) があり、破片観察では4～5個体の出土がある。

Fig. 28　瓦質土器文様拓影図・他



絵巻物に描かれた火鉢売り
（三十二番職人歌合絵巻より）

III類　片口の付いた小壺は（Fig. 27−28）の１点だけ出土している。口縁は小さく直立し、胴部上半が緩い張り出しをもって底部に至る。口縁に一箇所つまみ出すように片口が付き、胴部上半は横位のミガキ、下半は縦位のミガキが明瞭に認められる。器高6.8cm、最大幅10.8cmである。

IV類　壺形の器形としては、口縁部不明ながら胴部下半に強い張り出しを有して底部に至る一例（Fig. 27−29）がある。頸部付近には三ツ巴文が一定間隔をおいて巡ると考えられ、その下には櫛目によって引き掻いた青海波状の文様が施されている。

V類　碗形としては、天目茶碗を模倣した一例（Fig. 27−30）が存在する。口径12.3cm、器高７cm、底径3.6cm、口縁は外側にややくびれ、釉溜り部分は隆帯を貼り付け、底の削り出しは浅い。内外面ともに横方向にミガキを主体に器面調整している。

以上、浪岡城跡出土の瓦質土器をみてきたが、出土破片数は北館・内館を合計して約1,000点に及び、接合および器面観察による個体把握は細片が多いため困難を極めた。その事から出土品のすべてを網羅できなかったことは明らかであり、今後の調査によって新たな知見を得ることも充分にあり得ることである。

各分類ごとに把握できた個体数は以下の通りである。

火鉢Ⅰ類	3	火鉢Ⅳ類	6	火鉢Ⅶ類	1	火鉢Ⅹ類	2	香炉Ⅰ類	4	香炉Ⅳ類	1
火鉢Ⅱ類	4	火鉢Ⅴ類	1	火鉢Ⅷ類	3	火鉢Ⅺ類	3	香炉Ⅱ類	3	行火Ⅰ類	5
火鉢Ⅲ類	13	火鉢Ⅵ類	5	火鉢Ⅸ類	2	火鉢Ⅻ類	2	香炉Ⅲ類	3		

その他（花　瓶）Ⅰ類	2	その他（壺）Ⅳ類	1
その他（燭　台）Ⅱ類	5	その他（碗）Ⅴ類	1
その他（片口壺）Ⅲ類	1		

火鉢類	45個体
香炉類	10個体
行火類	5個体
その他	10個体

以上の事から、総個体数70個体（プラスアルファ）に対して約1,000点の破片ということは、単純に計算して１個体あたり14片以上の破片から構成されていることになり、破片数がそのまま使用器種の統計約数値とは成り得ない事を示している。特に、浪岡城跡のように100年以上も使用された城館にとって、火鉢等の存続期間がどれくらいあったかという問題から、仮に内館遺構変遷の四時期区分に照しあわせると、約20,000m²（北館と内館の調査区）の一時期の居住区に10個余りの火鉢しかなかったことになり、掘立柱建物跡におよそ１個ぐらいという計算が成り立つ。

3．瓦質土器の分類

浪岡城跡出土の瓦質土器をみる中で、これらの製品は基本型とでも言える形状が存在し順次時代とともに変化・変遷しているのではないかと考えられるようになった。浪岡城跡出土品に限って言えば、その使用年代は15～16世紀であり年代的制約があるため、他遺跡出土品も参考にしながら分類をおこなってみよう。

(a) 器形形態

器形の形態としては、上から見た時に円形を呈するものと方形を呈する二種類が存在する。

Ⅰ類……上観円形の類

Ⅱ類……上観方形の類

(b) 器種分類

各器種の法量・形状から主たる使用目的が決定され、以下の5種類に分類できる。

A類……器内に灰等を充塡し、火鉢（通称手焙り）として使用する類。

B類……器内に灰等を充塡するが、火鉢として使用するには小形すぎるため香炉として使用したと考えられる類。

C類……器形を覆いかぶせるようなドーム形にし、行火や瓦燈として使用したと考えられる類。

D類……主として仏具に使用されたと考えられる花瓶・燭台の類。

E類……その他の碗や壺および小形鉢等の類。[同じ窯で焼かれたと推定される擂鉢の類（Fig. 27—19）も出土しているが、今回の記述からは割愛する]

(c) 器種・形状分類

(1) 火 鉢 類

火鉢類の形状は相当数のバリエーションが認められ、細分すれば紙数も足りなくなるため、管見に触れた範囲の概略を述べる。

ＩＡ１類　口径35～50cm前後、高さ10～20cm前後の浅い鉢形を呈し、一般に装飾性の薄い三脚を有する。本類の中には、胴部が直線的に落ち込むタイプＩＡ１ａ（Fig. 29—40・41）と胴部上半で外側に張り出し口縁が内湾形を呈するＩＡ１ｂ（Fig. 29—42・43）に大別できる。なお、文様は外面胴部上半に１～３個１単位の印花文を施す例が多く、鎌倉では亀甲文を押圧する例（Fig. 29—41）もみられる。

ＩＡ２類　口縁の先がすぼまる状態で内湾し、上端が平坦に整形され、口縁下に二条の隆帯で区画された文様帯を有する。胴部上半で最大の張り出しとなり、窓等を開け器高20～30cm前後とやや深い形となり、装飾的三脚を有する。底部上端にも一条の隆帯を巡らす(Fig. 29—44)。本類と同形の口縁を有するが、文様帯等のみられない類が存在し、比較的小形の製品に多いようである。(文様帯を有するものをＩＡ

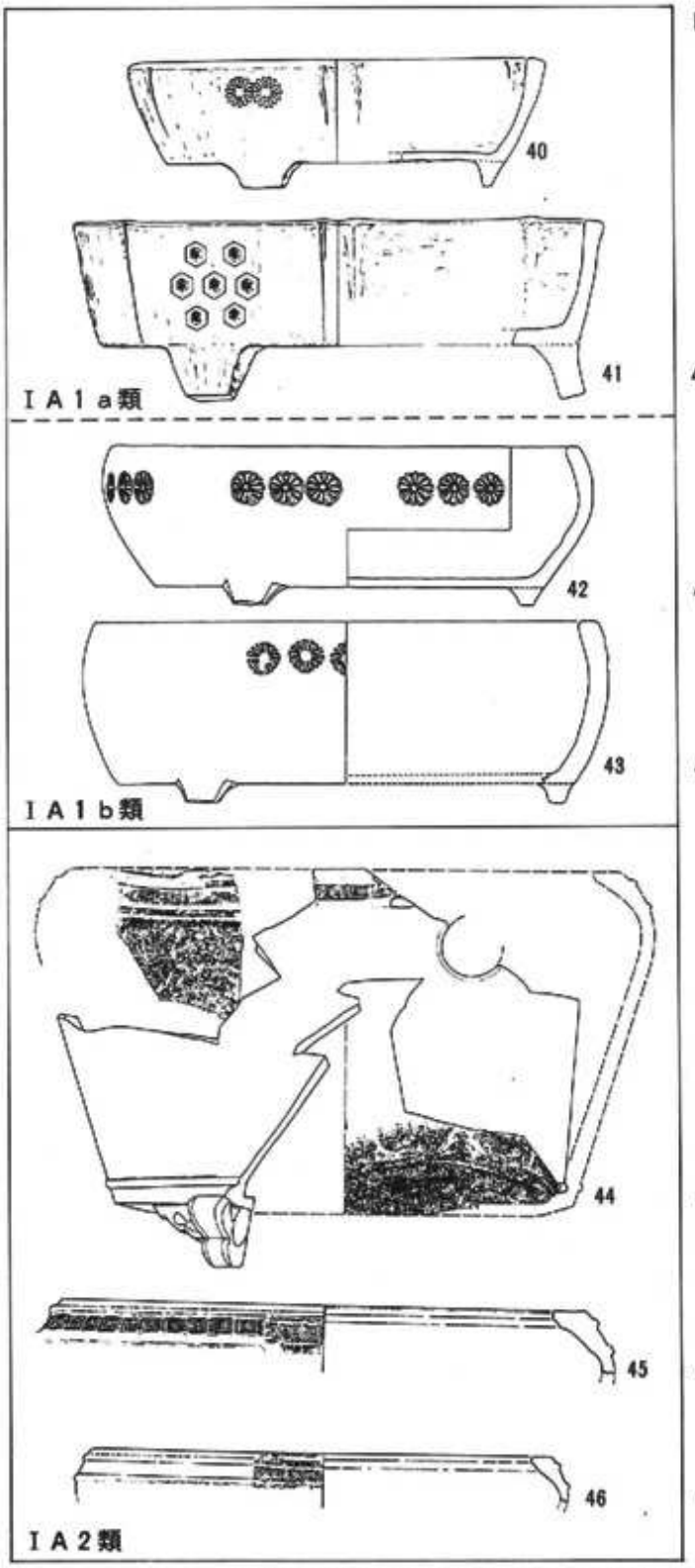


Fig. 29　瓦質土器分類図(1)

40･41　鎌倉：千葉地遺跡

42　京都：法住寺殿跡Ｇ３井戸跡

43　京都：法住寺殿跡Ｉ13井戸跡

44　北海道：志苔館跡

45　京都：三條西殿
三条大路側溝東Ｉ

46　京都：三條西殿跡井戸40

※それぞれの実測図は報告書から転載、縮尺不同

２ａ類、無いものをＩＡ２ｂ類としておく。)口縁下の文様帯としては、宝相唐花菱文・雷文・格子文・巴文等が連続して押圧されている。

ＩＡ３類　口縁が直立し、胴部がその取り付け部から外側に強く張り出して底部に至り、胴部上半に格狭間を意象したと思われる窓を有する。装飾的な三脚を有し、外面口縁帯に連続したスタンプ文を押圧する例が多いが、胴部張り出し部にも二条の隆帯に区画された文様を施す例もみられる(Fig. 30--47)。本類の外面口縁帯の文様としては、笹竜胆文、入子菱文、唐花菱文、方形多重文、雷文、花弁文、鉤形文、亀甲文等があり、連子文が本類に入る可能性も否定できないが、現在まで確実な出土例は管見にみえない。

ＩＡ４類　ＩＡ３類の底部下に、さらに円筒形の底部を付属したもので、尻八館出土例を標式（Fig. 30・49）とする。外面口縁帯は一般に連子文であり、胴部下半の取り付け部に再度連子文を巡らしてその下に１～２条の文様帯を構成し、装飾的三脚を有する。管見の中では、尻八館出土品が唯一の完形品であるため確実なことは言えないが、底部上半の文様帯として浪岡城跡Ⅳ類の他、Ｘ字状の格子文、三ツ巴文等がある。本類が、ＩＡ３類から変化したのではないかと推測できる資料が、京都法住寺殿Ｉ13井戸から出土している。(Fig. 30—48)がそれであり、胴部下半は付けられた連子文帯は、ＩＡ３類とＩＡ４類の移行期と考えることができる。

ＩＡ５類　全形を知り得る資料がなく、胴部下半から底部は不明であるが、口縁が内側に強く張り出し胴部に丸形の窓を有する以外無文の類（Fig. 30—50)。

ＩＡ６類　口縁が外側に若干鍔状に張り出し、胴部は直線的に落ち込み、高台？を有する底に至る類(Fig. 30--51)。胴部中央に文様帯を有する事が多いようで、浪岡城跡Ⅵ類も本類に入ると考えられる。

ＩＡ７類　浪岡城跡Ⅴ類（Fig. 26—11）を標式とする。

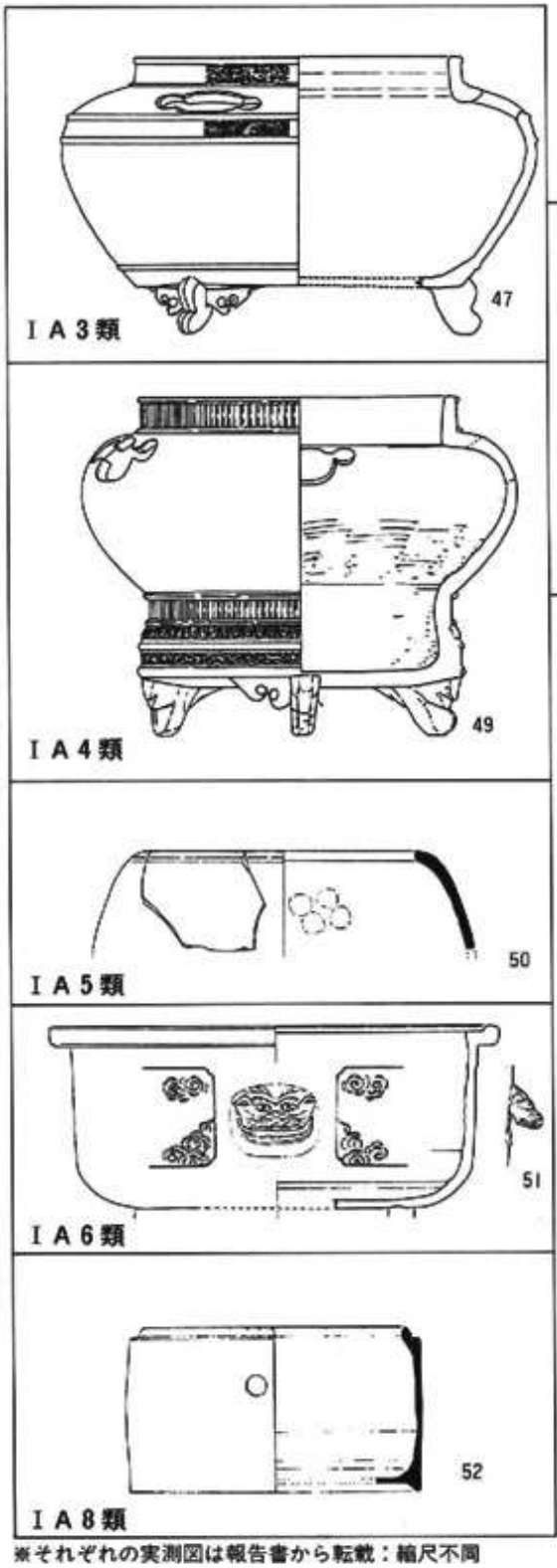
ＩＡ８類　口縁が内側に屈折して垂直に立ち上がり、胴部が直線的な円筒形を呈する。底は上げ底で平担である。浪岡城跡Ⅶ類も本類に入ると考えられ、胴部上半に円形窓を開けるようである（Fig. 30—52)。

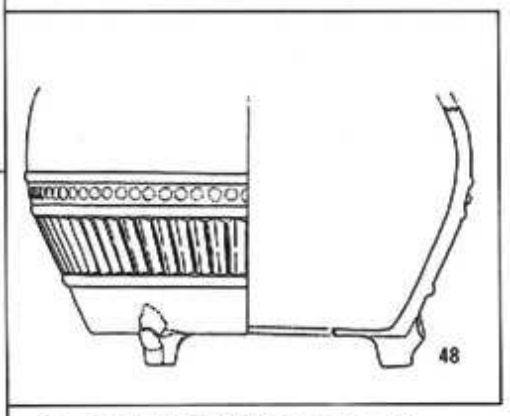
ＩＡ９類　口縁が内側に強く張り出した内湾形を呈し、胴部上端で最大径となり楕円状の窓を有した後斜行して中空三足底に至る(Fig. 31—53)。なお、本類と同様の中空三足を有するが足が円筒状を呈し、口縁は内側にややすぼまって小さく張り出すものもみられ（Fig. 31—54)、前者をＩＡ９ａ類、後者をＩＡ９ｂ類としておく。

ＩＡ10類　盃受けもった浅い盤形の本体に高台部を貼り付けた類(Fig. 31—55)。本類は瓦燈としての使用も考えられる。

ＩＡ11類　全形は知り得ないが、口縁は肉厚に直立し外面に二条の隆帯で区画された文様帯

Fig. 30　瓦質土器分類図(2)





47　京都：法住寺殿跡Ｇ３井戸跡

48　京都：法住寺殿跡Ｇ３井戸跡

49　青森：尻八館跡

50　京都：同志社キャンパス内女子大図書館建設地ＳＫ340

51　福井：一乗谷朝倉氏遺跡朝倉館跡

52　京都：同志社キャンパス内女子大図書館建設地ＳＫ329

※それぞれの実測図は報告書から転載：縮尺不同

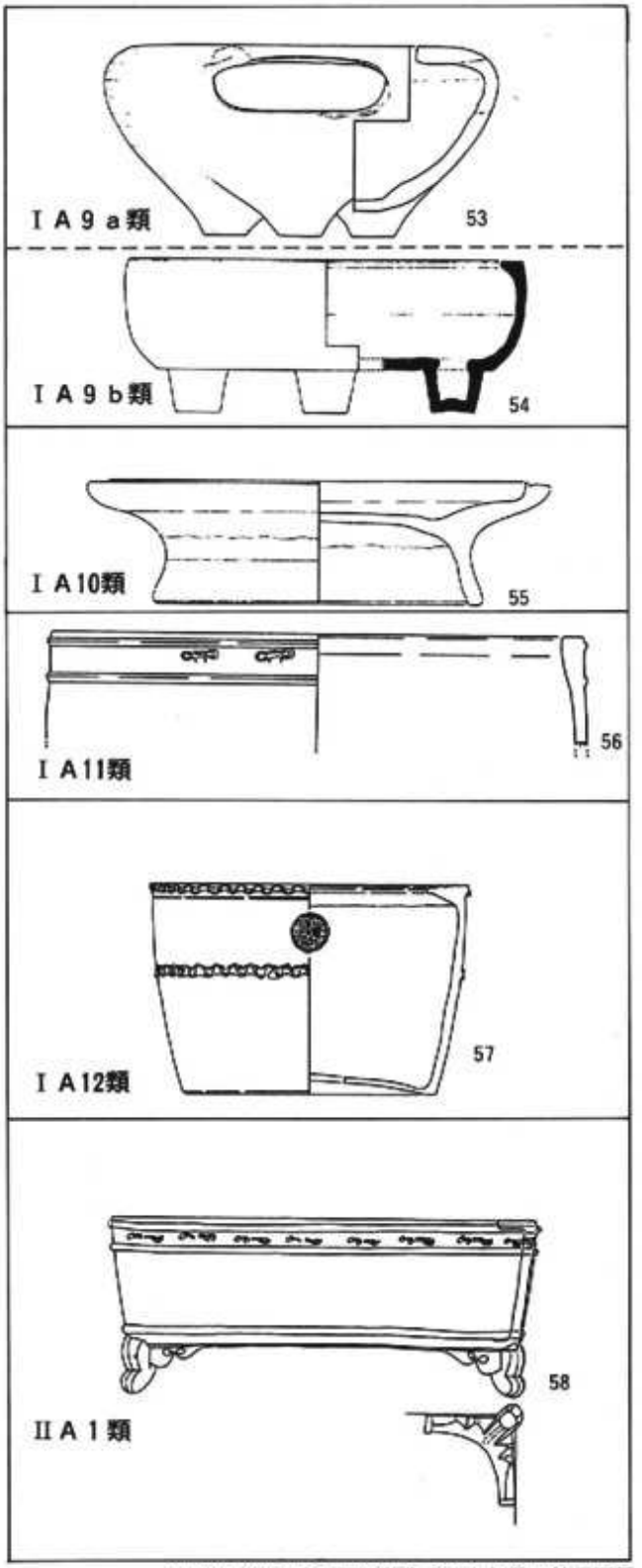


Fig. 31　瓦質土器分類図(3)

53　福井：一乗谷朝倉氏遺跡第46次

54　京都：同志社キャンパス内女子図書館建設地ＳＫ329

55　福井：一乗谷朝倉氏遺跡朝倉館跡

56　和歌山：根来寺跡

57　福井：一乗谷朝倉氏遺跡第54次

58　京都：法住寺殿Ⅰ13井戸跡

※それぞれの実測図は報告書から転載：縮尺不同

を有し、ほぼ円筒状の器形を呈すると考えられる類（Fig. 31—56）。

ＩＡ12類　瓦質土器の中で、焼成・胎土が上述の類と相違し、暗灰色の色調を呈し須恵器的特徴を有する類。口縁は内側に強く張り出し、円筒形の器形で薄手の成形がなされる。本類の装飾的特徴としての波状の隆帯を口縁部および胴部中央に施し、胴部上半に輪花形の貼り付け文を数単位巡らす。(Fig. 31—59)が典型的なもので浪岡城跡IX類も同類である。

ⅡＡ１類　上観方形の火鉢で、口縁が内側に張り出し、胴部は内側に斜行しながら平底に至る。四隅に装飾的脚が貼り付けられ、口縁外面に二条の隆帯に区画されたスタンプ文帯を有し、底部立ち上がり部にも一条の隆帯が巡る。(Fig. 31—58)と浪岡城跡XI類が典型である。

ⅡＡ２類　私市（きさい）城跡出土の火鉢を典型とする。直立する口縁下外側に突帯を貼り付け、胴部下半に三列になった雷文を巡らす。脚は簡略化された成形で底部四隅に貼り付けていると思われる。

ⅡＡ３類　上観方形の火鉢で、全形はわからないが「浪岡城跡Ⅲ」Ｐ102で報告したNo.128・129のように方形の面取りが成される可能性大の類。本類を上観方形の中で、不分明な一群としてとらえておく。

(2)香炉類

香炉と考えられる類は、火鉢類より小形であることからの機能判断であり口径20cm以下をめやすとしている。

ＩＢ１類　口縁が外側にやや張り出し、円筒形の底に三脚が取り付けられる類。(Fig. 32—59)は浪岡城跡Ｉ類と分類したものと同一器種である。

ＩＢ２類　口縁が直行して立ち上がる円筒形で、底に三脚が貼りつけられてる。胴部中央にスタンプ文（鉤形文・他）を一定間隔で押圧することが多い。(Fig. 32—60)

ＩＢ３類　口縁が外側に丸くつまみ出され、すぼまった頸部に丸く張り出す胴部が接合され底部立ち上がりに三脚を有すると考えられる壺形の類。胴部にスタンプ文を周回させるが、今のところ浪岡城跡II類で紹介した以外管見に触れていない。(Fig. 32—61)

ＩＢ４類　口縁が内側に屈曲して直立し、胴部上半が外に張り出して、おそらく高台付着の底と推定される類。一般的には無文様と考えられる。(Fig. 32—62)浪岡城跡III類も本類と同一である。

ＩＢ５類　その他の香炉類。火鉢の器形を小形化した製品が多いと思われるが、全形を知り得る資料がほとんどない。浪岡城跡IV類等。

(3)行火・瓦燈類

行火あるいは瓦燈として考えられる類は釣鐘形の形状で、上部に受皿があるか否かで行火か

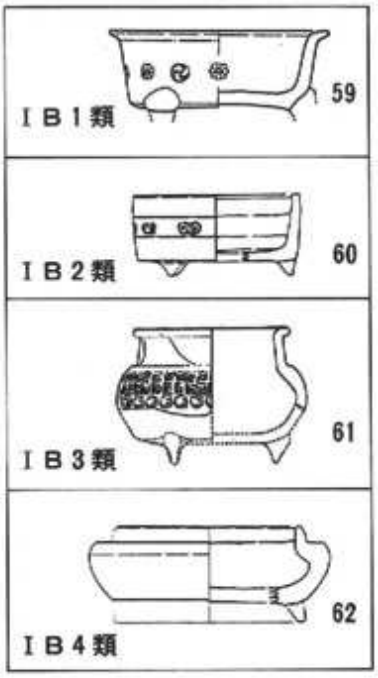


Fig. 32　瓦質土器分類図(4)

59　浪岡城跡

60　福井：一乗谷朝倉氏遺跡 第42次

61　浪岡城跡

62　福井：一乗谷朝倉氏遺跡 第42次

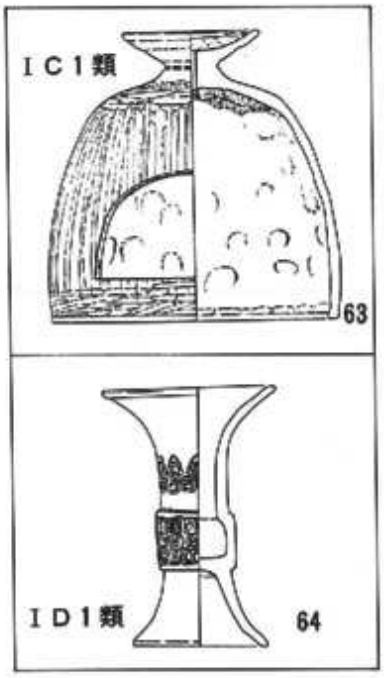


Fig. 33　瓦質土器分類図(5)

63　福井：一乗谷朝倉氏遺跡 第40次

64　福井：一乗谷朝倉氏遺跡 第43次

瓦燈に区分できると思われ包括した一群ととらえておく。

ＩＣ１類　一乗谷朝倉氏遺跡出土品を標式とする。上部に小さい受皿を有し中央に一孔を穿ってドーム形の本体と接合する。本体には半円形の窓が存在し、ミガキ調整痕が認められる以外無文の類(Fig. 33—63)。

ＩＣ２類　浪岡城出土品を標式とする。浪岡城跡の場合、上部の受皿等の存在は不明確であるが、胴部に雷文・巴文等のスタンプ文が施されている類(Fig. 25—10)。

ＩＣ３類　その他の瓦燈類。火鉢類のＩＡ10類に分類したもの等。

(4)花瓶・燭台類

花瓶・燭台の類については全形を知り得る資料が少なく、明確な分類は困難な状況にある。一応、一乗谷朝倉氏遺跡・浪岡城跡出土の資料から考えてみる。

ＩＤ１類　いわゆる尊式瓶といわれる花瓶の形状を呈する類。口縁が朝顔状に広く外反し、円

筒形の短い胴部下に末広がりの高台が付着する器形。頸部に雷文と蓮弁文、胴部に雷文と三ツ巴文が押圧されている（Fig. 33－64）。浪岡城跡出土品（Fig. 27—24）も同類と思われる。

ＩＤ２類　上端に一孔（おそらく灯芯孔に付着する突起を装着すると思われる）を有する受皿があり、以下短い大鼓状の胴部に末広がりの高台を有する燭台と考えられる類(Fig. 27—25)。燭台は基本的に中空状態を呈すると考えられ、文様は雷文・三ツ巴文・鉤形文・丸に十字の区画文・唐花菱文等が押圧される。

(5)その他の器種

ＩＥ１類　碗として、天目茶碗の器形がある（Fig. 27－30)。

ＩＥ２類　壺として、胴部下半が強く張り出す鶴文・青海波文を施す例がある(Fig. 27—29)。

ＩＥ３類　片口碗として、浪岡城出土例がみられる（Fig. 27—28)。

4．瓦質土器の年代観

瓦質土器の形態分類を中心に作業する中で、その分布が予想以上に汎日本列島的であり、なおかつ流通年代が13世紀から17世紀初めとある程度限定される事に気が付いた。管見にみえた出土遺跡の一覧表を以下に示しておくが、筆者の居住する北日本を中心として北陸・畿内・関東等のほんの少例しか把握できなかった事は、情報辺境地における悲哀とでも言うできであろうか。

最初にＩＡ１類をみるといずれも13～14世紀を主体とする遺跡から多く出土し、ＩＡ１ｂ類に関しては京都を中心とする畿内に多く、ＩＡ１ａ類は鎌倉に多い印象を受ける。鎌倉出土の瓦質火鉢類についてはＩＡ１ａ類と分類した中でもさらに細分がおこなわれ(文献㉔)、畿内地方とは別の生産集団による製品化と考えられる面もある。13世紀以後の瓦質火鉢類が鎌倉を中心とした関東地域とそれ以外の地域で、その流通(関東の場合は地元生産という考え方があり、地域性を有する瓦質土器が存在しているらしい）経路が異なっていたための現象であろうか。(遺跡№14・20・21・22・24・25)

ＩＡ２類では14世紀～15世紀を主体年代とする遺跡からの出土が顕著であり、ＩＡ１類からＩＡ２類への変遷を考えることができる。しかし13世紀代後半に成立しているのかあるいは14世紀になって成立するのかは明確でないが、ＩＡ２類の分布がＩＡ１類より広範囲に出土することは表１より明らかであり、舶載・国産を含めた日常使用の陶磁器等の分布状況と同路線上にあると思われる。(遺跡№１・２・３・７・13・14・15・16・17・18・20・21・22)

ＩＡ３類は14～16世紀を主体とする遺跡から出土することが多く、ＩＡ２類と共伴する遺跡、ＩＡ４類と共伴する遺跡の相方がみられる。前述のようにＩＡ４類は破片で出土した場合、ＩＡ３類に包括される可能性を有しているため、ＩＡ３類とＩＡ４類を区別する事は容易でない

表1　参考とした瓦質土器出土遺跡一覧表

	遺跡名	遺構名	出土類形	共伴する遺物	主体年代	文献No.
1	赤井館跡		ⅠA2 ⅠA4	青・白・越・瀬	14～15C	①
2	足利館跡		ⅠA2 ⅠA4 ⅡA1	青・白・染・中縄・朝・瀬・越・美	14～15C	②
3	城間館跡		ⅠA2 ⅡA2 他	青・白・染・朝・瀬・珠・越	13～15C	③
4	根城跡		ⅠA3 ⅠA4 ⅡA1 ⅠB1	青・白・染・中縄・朝・瀬・美・志・器・越・備・常	13～17C	④
5	切田前谷地		ⅠA6 ⅠD2	青・瀬・美・越・珠	15～16C	⑤
6	山王坊跡		ⅠA4	青・瀬	14～15C	⑥
7	後城遺跡		ⅠA2 ⅠA4	青・白・染・瀬・珠・越	13～16C	⑦
8	一戸城跡		ⅠA6？ ⅠD2？	青・白・染・瀬・美・越・伊	15～17C	⑧
9	大瀬川館跡		ⅠB4	青・白・染・赤・美	15～16C	⑨
10	御所館跡		ⅠA4	青	14～15C	⑩
11	鳥海館山館跡		ⅠB2	青・白・染・常・美	15～16C	⑪
12	龍門寺遺跡		ⅡA1 ⅠB？	青・白・染・美・志・常	16～17C	⑫
13	砂崎戸尼川館		ⅠA2 ⅠA3	青・白・瀬・常	14～15C	⑬
14	浪川城跡		ⅠA1b ⅠA2 ⅠA3 ⅠA4？ ⅠA9a ⅡA1 ⅠE4	青・白・染・瀬・美・志・織・備・常	14～17C	⑭
15	弓庄城跡	SD1002	ⅠA2 ⅠA3 ⅠA4？	青・白・染・瀬・美・珠・越・能	12～16C 主として16C	⑮
16	江馬氏城館跡		ⅠA2 ⅠA3 ⅠA5 ⅠA12？	青・白・染・瀬・珠・常・信	13～16C	⑯
17	門前町遺跡下元町遺跡		ⅠA2 ⅠA3 ⅠA4 ⅠA5	青・白・染・武・瀬・美・珠・越	14～16C	⑰
18	青正寺遺跡		ⅠA2 ⅠA4	青・白・瀬・珠	14C後～15C中	⑱
19	一乗谷朝倉氏遺跡		ⅠA6 ⅠA9	青・白・染・中縄・赤・朝・瀬・美	15～16C	⑲
19	一乗谷朝倉氏遺跡		ⅠA10 ⅠA12 ⅠB1 ⅠB2 ⅠB4 ⅠC1 ⅠD1 ⅠD2 ⅠE ⅡA1 他	越・能		⑲
20	法住寺殿跡	G3井戸	ⅠA1 ⅠA2 ⅠA3 ⅡA1	青・瀬・雲・備・他	13～14C	⑳
		I13井戸	ⅠA1 ⅠA4 ⅡA1	瀬・雲・他	14C	
21	三條西殿跡	溝IIB	ⅠA4 ⅠB2 ⅠE ？	青・美・備	15～16C	㉑
		溝IIA	ⅠB1 ⅠB2	青・常・常	15～16C	
		烏丸小路遺溝	ⅠA1	青・白・瀬	13C	
		井戸740	ⅠA2	青・白	15C後	
		A6土坑2	ⅠA7	青	15C	
22	同志社キャンパス内	SK329	ⅠA8 ⅠA9b	染・瀬・美・常・備	16C後	㉒
		SK2334	ⅠA2	備	15C	
		SK2119	ⅠA5		15C	
		SF001	ⅠA2	青	15C末～16C初	
23	大阪城三の丸跡	SH01	ⅠA8	瀬・志・志・越	16～17C	㉓
24	下鴨泉遺跡		ⅠA1b 他	青・白・瀬・常・他	13～14C	㉔
25	高辻東遺跡		ⅠA1b 他	青・白・瀬・常・他	13～14C	㉕
26	恒泉寺跡		ⅠA3 ⅠA11 ⅠB1	青・白・染・瀬・美	15～16C	㉖
27	私市城跡		ⅡA3	青・白・染・瀬・美・伊	16～17C	㉗

共伴する遺物凡例

青→青磁	志→志野
白→白磁	織→織部
染→染付	常→常滑
赤→赤絵	唐→唐津
中縄→中国縄釉	珠→珠洲
朝→朝鮮	越→越前
瀬→瀬戸	信→信楽
美→美濃	備→備前
	伊→伊万里

が、少なくともＩＡ３類については14世紀以降15世紀を中心とする時期が想定できる。ただし、Fig. 30—48で示した例もあるように、ＩＡ３類が先に成立し、ＩＡ４類が後出である可能性は否定できない。(遺跡№４・13・14・15・16・17・20・26)

ＩＡ４類は14世紀～15世紀を主体年代とする遺跡からの出土が多く、前述の前後関係および伴出遺物の面から15世紀代に主体がありそうである。(遺跡№１・２・４・６・７・10・14・15・17・18・20・21)

ＩＡ５類は、現在まで京都・北陸を中心に14～15世紀を主体とする時期が想定される。(遺跡№16・17・22)

ＩＡ６類は、15～16世紀を主体とする遺跡に多く、北日本・北陸・京都が中心である。(遺跡№５・８・19)

ＩＡ７類は、浪岡城跡・京都で出土しており15～16世紀の年代を推定できる。(遺跡№21)

ＩＡ８類は、浪岡城跡と京都・大阪で出土し16～17世紀の年代を推定できる。(遺跡№14・19・22)

ＩＡ10類は、16世紀代を中心とする一乗谷朝倉氏遺跡から出土している。(遺跡№19)

ＩＡ11類は、16世紀代を中心とする根来寺跡から出土している。(遺跡№26)

ＩＡ12類は、浪岡城跡・一乗谷朝倉氏遺跡・江馬氏城館跡で出土し、16世紀代が主体と考えられる。(遺跡№16・19)

ⅡＡ類を出土している遺跡は、北日本・関東周辺・畿内・北陸と広域でありいずれも15世紀から16世紀・17世紀前半までの年代幅で考えることができる。(遺跡№２・３・４・12・14・19・20・27)

ＩＢ類については現在のところ15～16世紀代の遺跡から多く出土しており、一部17世紀前半ぐらいまでの幅を想定でき、広域に分布している。

ＩＣ類は、浪岡城跡と、一乗谷朝倉氏遺跡の例だけである。

ＩＤ類は文様等が確認しやすいため、北日本から畿内地方まで分布し15～16世紀代に多い。

ＩＥ類は、浪岡城跡・一乗谷朝倉氏遺跡・京都等で出土し、その実体はまだ不分明である。

以上のことから、瓦質土器の中で火鉢類については13世紀頃から生産が始まり17世紀前半まで継続使用されていた事がわかり、その分布も汎日本的であったと考えることができる（西日本・南日本については資料不足のため不分明であることをお断りする)。特に火鉢の変遷についてはＩＡ１類・ＩＡ２類・ＩＡ３類→ＩＡ４類というような変化があったとみられ、15世紀後半から16世紀に代に入るとＩＡ５類～ＩＡ12類まで器形変化が多様化する傾向を感知することができ、ＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ類・ＩＥ類等も多様化の中で従来銅器・陶器として生産されていたものを模倣して生産体制の中に取り入れていったものと考えられる。

現在、これらの瓦質土器を生産した場所として、奈良火鉢座を考えることが一般的であるが

広域な分布圏を有していたかどうか、今後の大きな課題となるであろう。

5．おわりに

浪岡城跡から出土する各種陶磁器とともに瓦質土器が搬入品であることは、出土状況や他遺跡との比較からはほぼ確実と考えられる。特に瓦質火鉢類とともに瓦質擂鉢（Fig. 27—19）も存在することに注目され、北日本の中世遺跡が陶磁器類を商品交易の一製品として搬入している事は、陶磁器のような日常の器物を地元で生産する以上に安価に入手できたと考えることもでき、13世紀後半以降に土師質土器を生産しなくなる（と思われる）北日本地域の特殊性からも理解できる。

火鉢が居住空間の変化から発生発展したことは確実であるが、生産や流通については不明な点が多く、今後は近世から現代までも含めて長期にわたる変遷も考えてゆく必要があろう。

参考文献

①鈴木正語他　史跡志苔館跡—昭和53～60年度環境整備事業に伴う発掘調査報告書　1986・3　函館市教育委員会

②大橋康二他　尻八館調査報告書　1981・3　青森県立郷土館

③赤平智尚他　境関館遺跡　1986・3　青森県教育委員会

④八戸市教育委員会　史跡根城発掘調査報告書Ⅳ～Ⅸ　1983～1987　八戸市教育委員会

⑤誉田実　切田前谷地遺跡発掘調査報告書　1985・3　十和田市教育委員会

⑥加藤孝・佐藤智雄　『山王坊跡』発掘調査情報　郷土誌北奥文化第8号　1987・10　北奥文化研究所

⑦日野久他　後城遺跡発掘調査報告書　1984・3　秋田市教育委員会

⑧昆野靖他　一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅱ　1982・3　一戸町教育委員会

⑨昆野靖　大瀬川C遺跡（大瀬川館）　1981・3　岩手県教育委員会

⑩斎藤吉弘　御所館　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ　1983・3　宮城県教育委員会

⑪阿部恵　柳津館山館跡　東北地建バイパス関係遺跡調査報告書—　1984・3　宮城県文化財保護協会

⑫猪狩忠雄他　龍門寺遺跡　1985・3 (財)いわき市教育文化事業団

⑬中山雅弘他　砂屋戸川館調査概要　1985・10　(財)いわき市教育文化事業団

⑭野崎準他　梁川城本丸・庭園発掘調査・復元整備報告書　1986・3　梁川町教育委員会

⑮宮田進一他　富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要　1985・3　上市町教育委員会

⑯小野正敏他　江馬氏城館跡発掘調査概報　1979・3　神岡町教育委員会

⑰平田天秋　門前町道下元町遺跡　1985・3　石川県埋蔵文化財センター

⑱垣内光次郎　普正寺遺跡　1984・3　石川県埋蔵文化財センター

⑲(a)特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅰ～XⅧ

(b)朝倉氏遺跡調査研究所　特別史跡朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ朝倉館跡の調査　1976・3

(c)福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館　特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書　1983・3

⑳寺島孝一・飯島武次　法住寺殿跡　1984・3　㈶古代学協会

㉑下條信行他　三條西殿跡　1983・7　㈶古代学協会

㉒鈴木重治他　同志社キャンパス内出土の遺構と遺物・資料編Ⅱ　1978・5　同志社大学校地学術調査委員会

㉓藤井直正他　大坂城三の丸跡　1982・3　追手門学院校地学調査委員会

㉔斉木秀雄他　千葉地遺跡　1982・3　千葉地遺跡発掘調査団

㉕宗基秀明他　鎌倉市諏訪東遺跡　1985・3　諏訪東遺跡調査委員会

㉖(a)上田秀夫　根来寺坊院跡（昭和56年度）　1982・3　和歌山県教育委員会

(b)辻林浩・村田弘　根来寺坊院跡（昭和59年度）　1985・3　和歌山県教育委員会

㉗島村範久　私市城跡二の郭発掘調査と外堀の試掘　1981・12　騎西町教育委員会

Ⅷ　内館出土の石製品

内館から出土した石製品を概観すると、硯・石臼（粉挽き臼・茶臼）・砥石・石鉢・火打石・人形（ひとがた）石製品・用途不明石製品等の他、縄文時代の石器が出土している。今回、内館出土の石製品について、北館出土品との比較と民俗学的視点から考察を加えてみる。

1．石　　硯

内館と北館の出土数を比べてみると、内館約28点、北館約66点である。平場面積が内館7,890㎡、北館15,450㎡の相違にもよるが、完形に近いものを数えても北館の出土数が多い。

(1)　出土品の形態

内館から出土した石硯は、概して小型に属するものが多い。完形品の中でPL. 34—12は長さが11.06cm、幅3.64cm、厚さ1.06cmであり、PL. 34—13は長さ8.36cm、幅3.93cm、厚さ1.49cmでいずれも小さいものである。今日、市販されている学校用硯（長さ13.5cm、幅7.5cm、厚さ2.0cm）を普通と考えるならば、計測値（推定も含む）から判断すると殆んどが小型のものである。ただ、PL. 34—17は長さ（7.08）cm、幅8.60cm、厚さ1.75cmと幅が広いので普通の大きさのものと思われる。小型の石硯が多く出土するのは、当時、日常的な書類（文書）への書付がこの程度の硯で十分に対応できたためと考えられる。

(2)　形式分類

形式分類にあたっては、水野和雄氏の「日本石硯考」[注1]を参考にし、現在までの浪岡城出土資料を一覧表にまとめておいた。

形　　式	特　　徴	図 版 番 号
長方硯ⅠＡｃ	平面が長方形で、側面が上方に向って広がり裏面が平坦なもの。	PL.34－12
長方硯ⅠＢａ	平面が長方形、側面は垂直に立ち上り、裏面両側に幅１cm程度の脚を削り出したもの。	PL.34－８・15
長方硯ⅠＢｃ	平面が長方形で、側面は垂直に立ち上り、裏面が平坦なもの。	PL.34－６・18
	①縁帯上端から海部に向って鈍角に削られているもの。	PL.34－９・10・13
	②縁帯上端から海部に向って垂直に削られているもの。	PL.34－４？
長方硯ⅢＡｃ	硯面が円形、楕円形を呈するもので、装飾されたものが多い。	PL.34－１・２・３・16・17
その他の硯	③２面硯と称されるもの。	PL.34－７
	⑥自然石に硯面だけを掘り込んだいわゆる天然（行石）硯	PL.34－11
風字硯ⅠＢｂ	硯頭は丸く、側面は垂直で平行している。	PL.34－５

内館出土の例では長方硯ＩＡｃ型（PL. 34—12)、長方硯ＩＢａ型（PL. 34—15)、長方硯ＩＢｃ型（PL. 34—13・18)、長方硯ⅢＡｃ型（PL. 34—16・17）があり、北館では前記以外に風字硯ＩＢｂ型（PL. 34—5）や２面硯（PL. 34—7)、天然硯（PL. 34—11）などが出土している。

(3) 石硯の年代観

長方硯ＩＡｃ型は15世紀頃、長方硯ＩＢａ型・長方硯ＩＢｃ型は16世紀の主流とする考え方があり、浪岡城跡から出土する石硯は上記の類が多いことから遺跡の形成年代（文献・出土陶磁器の年代）と符合している。なお、長方硯ⅢＡｃ型の中でPL. 34—１は波濤文の線刻、二枚貝・巻貝・三日月のレリーフがあり15世紀頃の中国製品の可能性が高く、全国的にも貴重な資料となっている。

(4) 石　質

内館出土の石硯は粘板岩・砂岩が殆どであるが、北館は粘板岩の他に砂岩・頁岩・変成岩などもある。

2．石　臼

(1) はじめに

出土数は北館約80点、内館約39点である。いずれも完形品のものがなくすべて破損品である。石臼はその用途から粉挽き臼と茶臼とに区別されるが、北館は粉挽き臼約36点、茶臼約44点、内館は粉挽き臼約15点、茶臼24点を数えることができる。茶臼の出土数が比較的多いのは、城館内の生活が農村地帯の津軽地方と異なる面があることを裏づけるものと思われる。また、茶臼の下臼受皿の部分に漆が塗られているものがあり、精巧なでき上がりで農家の使用臼とはとても考えられないものがある。反面、当時の生活全般に使われたと思われる粉挽き臼は、米、ソバ、小麦の粉挽きの外に豆腐の豆すりに使用したとも考えられる。

出土遺物はすべて破損して使用に堪えられない状態のものばかりである。石製の臼は簡単に壊れるものでないから、完形品は生活の移動とともに持ち去られ、破損品は柱の根石等に転用されたと考えられる。相当の重量のあるものばかりであるが、必要性が高かったことや容易に入手できないことから、石の産地や製作地の同定は今後の問題点となろう。

(2) 石臼のしくみ

出土した石臼は完形品のものはないが、主溝・副溝から推定して八分画の臼が殆どと思われる。ただし、１点だけ六分画の茶臼があるようである。副溝の並びは不規則的なものが多い。また、こぼれ目の副溝が「浪岡城跡Ⅷ」P119Fig. 52—340や「浪岡城跡Ⅸ」P137Fig. 58—357の粉挽き臼に見られる。主溝と副溝の区別なく、供給口から放射線状に主溝だけが刻まれている木摺の目のようなものがある（「浪岡城跡Ⅸ」P137Fig. 58—327)。副溝の刻みは時計方向に

長いものから短かいものへと並んでいるが、把手の回転は反時計方向にまわすことになる。ところが、「浪岡城跡IX」P136Fig. 58　326などは副溝の刻み方が反対であり、逆目にできている。逆目の臼がどのような意図にもとづいて製作されたのかは今後の課題である。

(3) 刻 み 目

穀物挽き臼と茶臼では刻みの溝の深さ、間隔に違いがみられる。米・ソバ挽き臼の例は刻み目が深く、副溝間隔が1.5～1.8cmあって粗製のものである。「浪岡城跡IX」P136Fig. 58—357もその一つであるが刻み目が深く、副溝線数が不揃いである。茶臼は溝が浅く、溝と溝の間が平坦で、溝の数が粉挽き臼よりも多い。すり減って溝が浅くなって平坦になっているものがある（「浪岡城跡VIII」P119Fig. 52　335など）。また62年度出土品（遺物No.S 12）には溝浅く、副溝が不揃いで、副溝間が0.7～1.5cmと比較的幅広い刻みのものがある。溝の刻みが深く、山が右側に高く左側に傾斜して鋸目のようなものが1点みられる(61年度出土品)。これは粉挽き臼と思われるが、『石臼のすすめ』（みわしげお著）の分類によると小麦用臼の形に似ている。山の形に注目したい例である。

(4) 石　　質

内館の茶臼は安山岩、粉挽き臼は溶結凝灰岩のものが多く、茶臼にも凝灰岩製の例がある。北館では、花崗岩、砂岩製の臼も出土している。この石材と粉挽き臼の粗製な作り方から、津軽地方近辺の石工による製作も考えられるが、その解明は今後の問題だと思う。

3．砥　　石

(1) はじめに

砥石の出土数は北館約95点、内館約108点で、相当使用されていたと思われ、大小様々の形状の砥石が出土している。破損品を含んだ出土数ではあるが、表面がすり減って凹状になるまで使っているものをみると、砥石を必要とする生活を営んでいたことがよくわかる。砥石の出土数の多い遺跡としては弘前市境関館遺跡の74点がある。

(2) 分　　類

出土した砥石の分類は、荒砥・中砥・仕上砥の分類、Ⅰ直方体・Ⅱ扁平・Ⅲ多面体・Ⅳ不定形の分類（境関館遺跡）などが考えられるが、今回はⅠ類（砥面幅2cm未満）・Ⅱ類（幅2～5cm未満）・Ⅲ類（幅5cm以上）〔「浪岡城跡IX」工藤清泰氏報告〕の分類に従って分けてみることにする。それは浪岡城跡の遺物に荒砥らしいものの出土がなく、中砥、仕上砥のようなものばかりで一般的な分類が不適当と思われたことや研磨した利器のようなものが一緒に出土していないことから用途別の細分が不可能だと考えたからである。小型の砥石は武具の研磨に使用したものと思われ、その利器の大小に最も関係深い砥石の幅を中心に分類してみることにした。

(3) 分類別出土数（内館108点）

分類	砥面幅	出土数
I類	2cm未満	8
II類	2cm～5cm未満	76
III類	5cm以上	24
計		108

形状は方柱状で断面が直方形のものが多い。そして各面を使用しているのが殆どである。5面使用のものはPL. 34—20や小型品に多く、4面使用のものはPL. 34—21～27・29～31である。また3面使用のものが多く、表面に刻線があって刃物の跡と思われるものもみられる（PL. 34—19・28）。2面だけ使用のものや1面だけのものも少例存在する。

(4) 石　質

内館は薄茶色の頁岩製砥石が多く、仕上用に使われたものらしく砥面が滑らかで、すり減って凹面になっている。次に多いのは凝灰岩のものである。中砥のように思われるやや大型のものが2点あるが、いずれも流紋岩である（PL. 34—19など）。北館出土の砥石には粗い砂岩、暗青灰色の粘板岩のものがある。

4．ひとがた（人形）

(1) 合掌ひとがた

高さ16.6cmのコケシのような形で胴体から上部の「ひとがた」であり、胸のところで両手を合掌している。細身の腕、手が浮き彫りになっていて、全体的に素朴な感じの作りであるが、ひたむきな願いがこめられているような「ひとがた」である。頭部はまゆげ、眼、口が線や穴によって表わされていて、鼻は隆起した形で彫られてある。胴体の下部中央に縦に2本の刻線があって、その間に上下2つの穴がある。上部の穴が臍のようで、下側の穴は陰部のように思われる。また頭頂部から髪のような刻線が後頭部に流れているので、この「ひとがた」は女性をかたどったものと思われる。お産とか女性の病気治癒祈願をねらったものではないだろうか。浪岡城館期を15世紀以降と考えると、新仏教の波及もあり得るので、合掌による祈願形態の「ひとがた」が出土するのも頷ける。石質は凝灰岩である。

(2) 人　頭

縦5.48cm、横3.79cmの小さいものであるが、まゆげ、鼻、口が刻線で、眼は穴をあけて表わしている。頭部は中央が少しくびれて前後に分かれている。前部が顔面で後頭部はマゲの頭髪のようである。頭髪を表わすような刻線が8本ほど後頭部の中央に向かって刻みこまれている。女性の人頭かと考えられる。石質は凝灰岩である。「ひとがた」はN46区ピット内覆土から出土し人頭はQ45区SX226覆土から出土し、30m位離れた場所である。両出土物のつながりについては不明である。

5．石　鉢

石製の鉢は手水鉢やシデ鉢として用いられたと思われる。北館出土数約12点、内館約８点であるが内館のものは推定口径39cmから、約32.0cm（PL. 34—32・33）、約20cm（PL. 34—35）および中央を径15cm深さ５cmだけへこませたもの（PL. 34—34）が出土している。シデ鉢と思われるものは焼けコゲ痕が残っており、PL. 34—33は上縁にPL. 34—35は内側と外側底部に焼けコゲ痕がある。北館には片口のついた石鉢も出土しているが、水の流出口があるのは珍らしい。

6．火 打 石

北館８点、内館８点出土している。火打金も出土していて、打撃痕の見られる火打石もある石質は北館のものが石英・水晶で、内館のものは石英１点の外は玉髄が７点である。

7．そ の 他

その他の石製品として、用途不明ドーナツ型石製品があり、細粒凝灰岩製のものが多い。外径4.6cm～11.2cmまで大小が存在するものと紐による擦痕らしい条痕らしい条痕が認められるものもあるが機能は不明である。

（注１）水野和雄　1985　「日本石硯考ー出土品を中心として」『考古学雑誌第70巻４号』

IX まとめ

浪岡城跡の発掘調査が始まった昭和52年当時と比較すると、中世考古学の盛行には目をみはるものがあり、浪岡城跡の発掘調査がその一翼を担ってきた事には調査団のメンバーも秘かに自負する点を有している。しかしながら、浪岡城跡の調査自体東館・北館・内館・堀跡等の一定箇所しか調査しておらず、全容の解明にはまだまだ時間を要するであろう。

今回、内館平場の調査箇所を中心に報告書を構成したが、遺構・遺物共に不充分な状況で刊行しなければならぬ状況となったため、内館総集編第1分冊として御理解いただきたい。内館から検出された遺構数は373基以上にのぼり、そのすべてが確定している訳でなく調査区部分も含めてさらに増大するであろう。第V章においてはそれらの遺構を陶磁器という素材によって時期別に分解してみたが、まだ試行作業の段階であり充分に意を尽した説明に至っていない状況にある。特に、掘立柱建物跡と竪穴建物跡の個別分析を提示するまでに至らなかった事、内館に北館で考察できたような屋敷割が存在したのかどうかという問題、政庁的という言葉の解釈等、遺構に関する問題はまだまだ残っているのである。遺構と遺物の関係にしても、地区別・遺構別に出土遺物の構成に相違がみられるのか、あるいは出土数との関係はどうなのかと言った諸問題について、時間的制約のため割愛せざるをえない状況であった。

VI章で指摘したように、内館の出土陶磁器をみると12世紀後半から17世紀前半まで連綿とした年代観を与えることができる。従来、伝世品として扱ってきた陶磁器の中にも、直接的に遺跡の形成年代と考えた方がよいと思われる事例も理解され、戦国城館浪岡城のイメージと、それ以前の中世遺跡のイメージを重複させることによって、より発展的な浪岡城の姿を写すことができるのではないだろうか。12～13世紀の遺物群が「平泉文化」と深く係わっていること、14世紀～15世紀前半の遺物群が浪岡北畠氏以前の居館存在と係わる事など、戦国期のみに目を奪われていた調査に反省をうながす契機にもなっている。さらに、内館と北館の陶磁器を比較することによって、浪岡城が最初から現状の縄張りで構築されたものでないことは自明の事と理解されるようになった。我々が現状で把握できる浪岡城の姿は廃城（落城）時の最終の姿であり、「築城に際しては……」などと単純に城館構造を語れなくなってきている。少なくとも内館の方が15世紀後半代には主体的生活空間を有し、16世紀に入って内館・北館が並存する生活空間（城館的意味で）を構成するようになったと考えることができ、東館・新館や検校館等は城館の拡張に伴う構築遺構と思われるのである。

VII章では浪岡城跡出土の瓦質土器に焦点をあて、京都から北の遺跡を比較する事によって年代観や器種構成を考察したものである。とかく陶磁器だけに目を向けがちな中世遺跡の報告書の中で、瓦質土器を陶磁器と同じ搬入品であるとする考えのもとに報告した事の是非は今後に問題点を残したままの提起であるが、北日本地域における交易のあり方を考える上で重要な視

点と考えている。

出土遺物のまとめについては、Ⅷ章の石製品以外に金属製品・木製品・自然遺物も考慮して報告書作製に努力したが、時間的・予算的制約のため、次回の報告に繰り越したいと考えており、御寛容いただきたい。

浪岡城跡の発掘調査は、昭和62年度をもって約11年に亘る事業に一区切を設け、発掘調査終了箇所から順次環境整備事業に着手する予定となっている。ここ11年間の調査で検出された遺構群、出土した遺物群の整理は年々増大することはあっても減ることはなく、現状のままで発掘調査を進めることは調査者自身が「遺跡の破壊」を行なっているのではないかという不安を内在しながらの調査となるのであって、今後は整理・分析作業に傾注したいという意向を強く有している。くしくも、浪岡町では平成元年4月1日をもって「浪岡町歴史資料館」の開館にこぎつけ、浪岡城跡研究の施設を保有することとなっている。我々調査顧問・調査員・担当者が、浪岡城跡発掘調査を通じて発見した新知見や中世史の再構成を一般の住民に投げ返えす時期にさしかかっており、郷土学習の一環として「資料館」がその役割をはたされることを期待し、まとめにかえたい。

最後に、本書まで浪岡城発掘調査報告書は10冊を刊行してきた訳であるが、それぞれ作製にあたって御指導・御助言をいただいた各位には衷心より感謝し、今後とも御協力をお願い申し上げる次第です。

写真図版

PL. 1

(1)S・T38・39区発掘状況

(2)長寿大学体験発掘

(3)T41～43区完掘状況

PL. 2

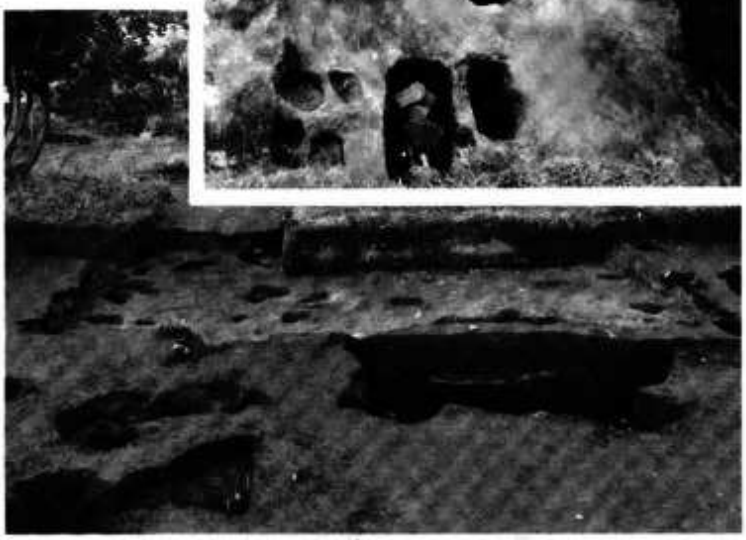
(1)S・T38・39区完掘状況
SB90全景(北東から)

(2)SB93南辺の柱穴配置

(3)ST291全景

PL. 3

(1)ST292全景



(2)ST293全景

(3)ST294全景

PL. 4

(1)ST300・SX400全景

(2)ST302全景

(3)ST304全景

PL. 5

(1)SX360全景

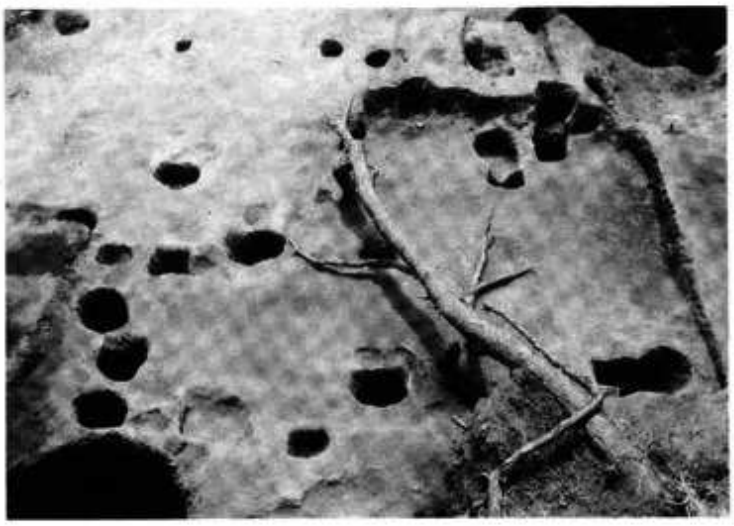
(2)SX362全景

(3)SX366全景

PL. 6

(1)SX368全景

(2)SX377全景



(3)SX398全景

PL. 7

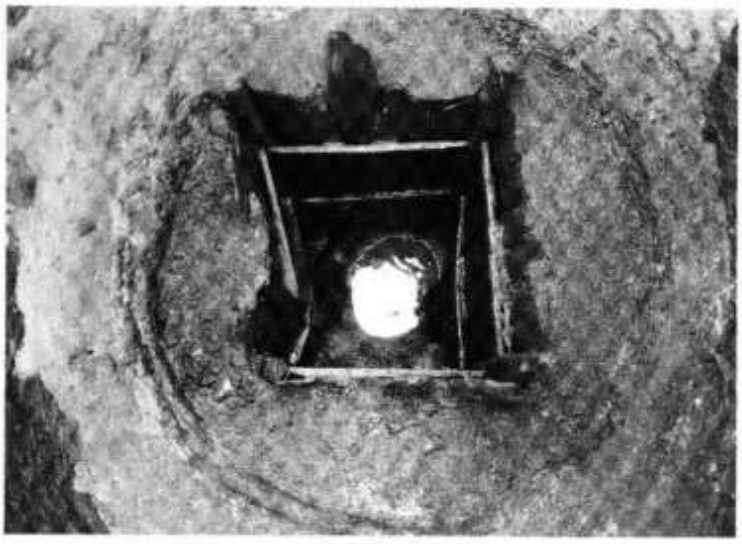
(1)SX402全景

(2)SX402覆土出土鉦

(3)SX402床面直上
出土鋤先と斧

(4)SF100全景

PL. 8

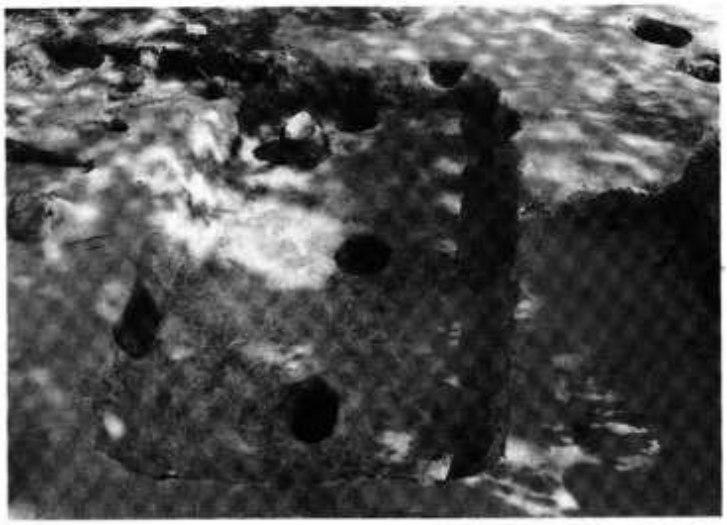


(1)SE137完掘状況

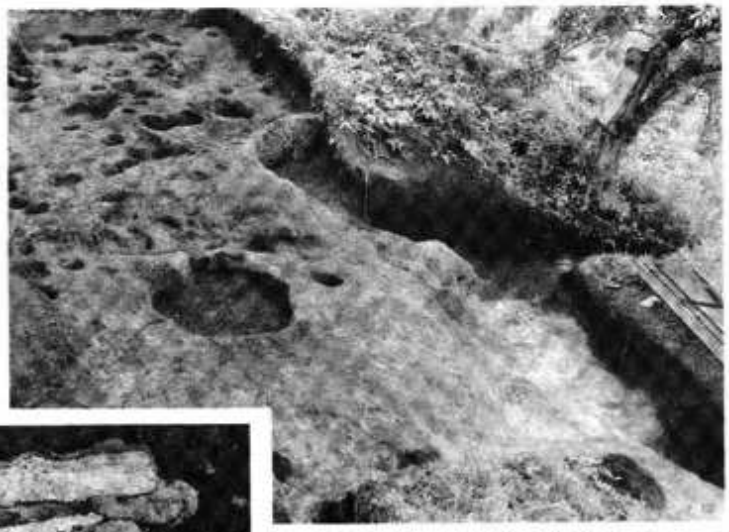
(2)SE179全景

(3)SE154床面出土
鉄製品

PL. 9



(1)SX346全景



(2)R・S38区調査状況

(3)T42区Ⅱ層の土師質土器出土状況

(4)R44区Ⅲ層出土鉄製品(36本)

(5)同上、取り上げ途中の配置状況

PL. 10

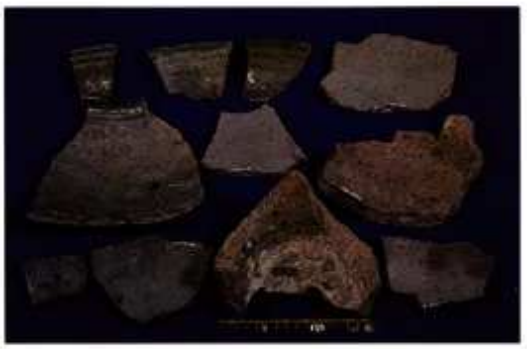
① 白磁四耳壺

② 青磁・白磁

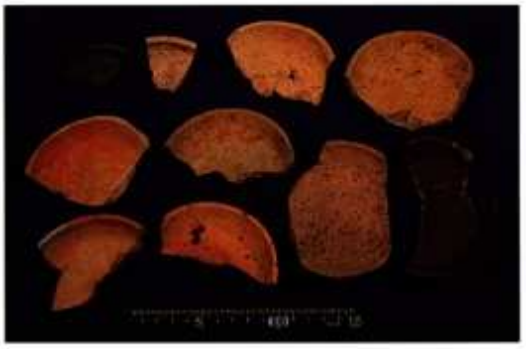
③ 白磁・他

④ 瀬　戸

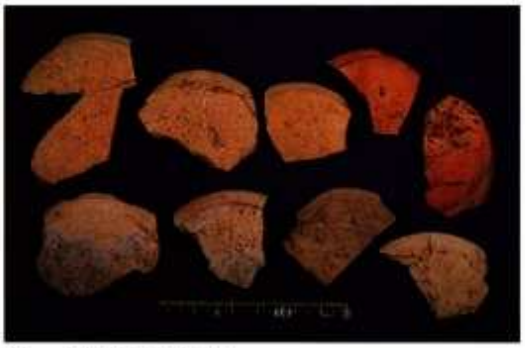
PL. 11



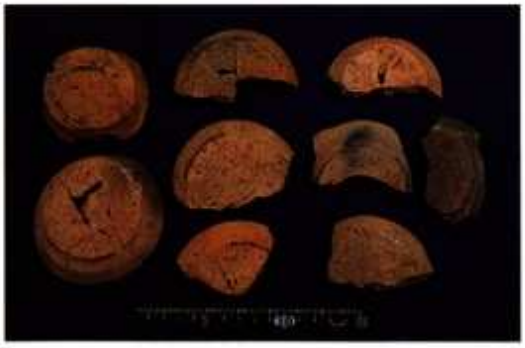
⑤ 須恵器系甕



⑥ 土師質土器Ⅰ類

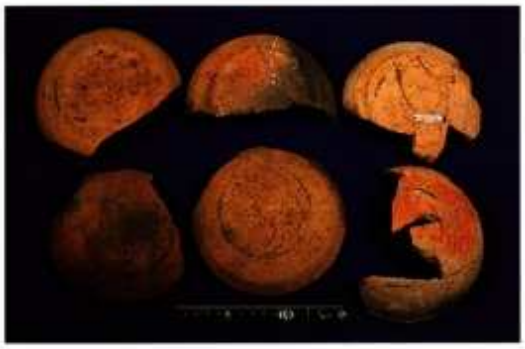


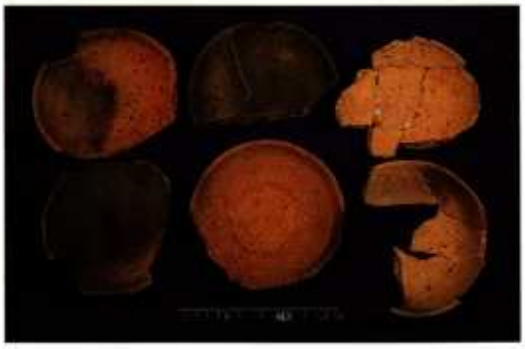
⑦ 土師質土器Ⅱ類



⑧ 土師質土器Ⅲ類

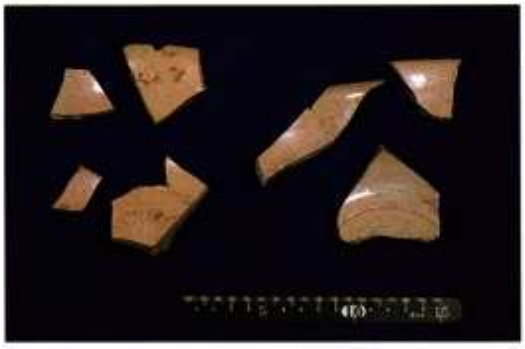
PL. 12





⑨ 土師質土器Ⅳ類

⑩ 青　磁



⑪ 白　磁

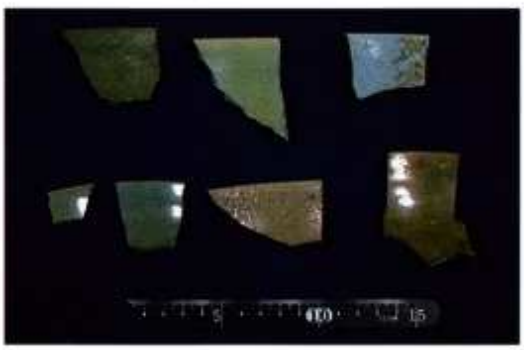
⑫ 白　磁

PL. 13

⑬ 瀬戸灰釉（14世紀）

⑭ 瀬戸鉄釉（14世紀）

⑮ 瀬　　戸（15世紀前半）



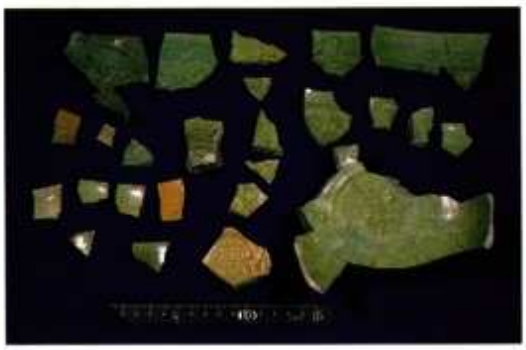
⑯ 青磁碗

PL. 14

⑰ 青磁碗

⑱ 青磁碗

⑲ 青磁碗



⑳ 青磁碗

PL. 15

㉑ 青磁碗

㉒ 青磁碗

㉓ 青磁碗

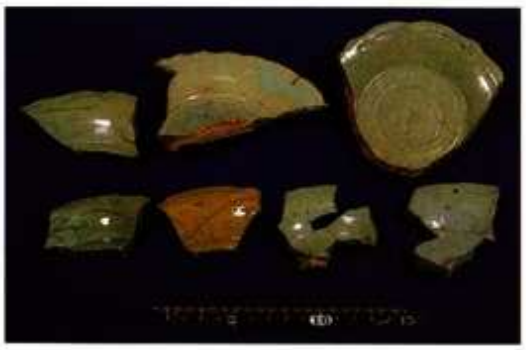
㉔ 青磁碗

PL. 16

㉕ 青磁碗

㉖ 青磁碗

㉗ 青磁皿



㉘ 青磁皿

PL. 17

㉙ 青磁皿

㉚ 青磁皿

㉛ 青磁盤

㉜ 青磁香炉・小鉢

PL. 18

㉝ 青磁承台・壺

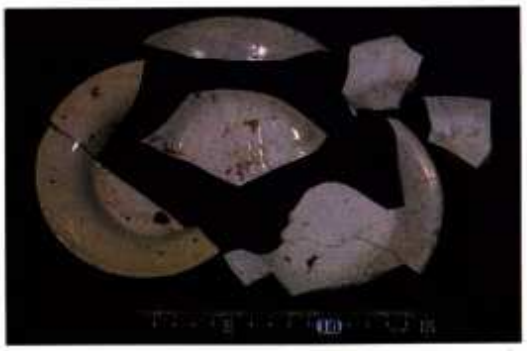
㉞ 白磁小杯

㉟ 白 磁 皿

㊱ 白 磁 皿

PL. 19

㊲ 白磁皿



㊳ 白磁皿

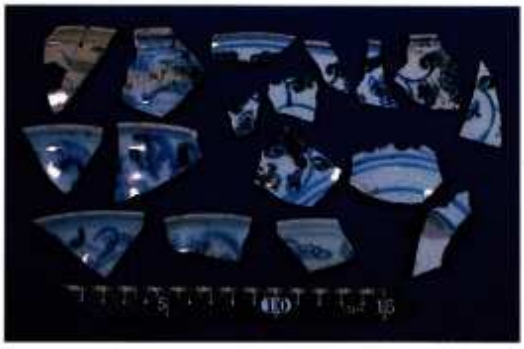
㊴ 白磁皿

㊵ 白磁小杯・他

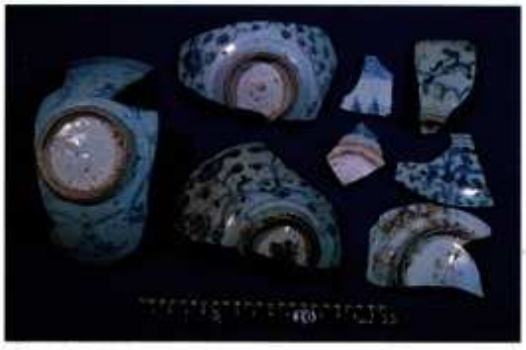
PL. 20

㊶ 白　磁

㊷ 染付小杯・壺

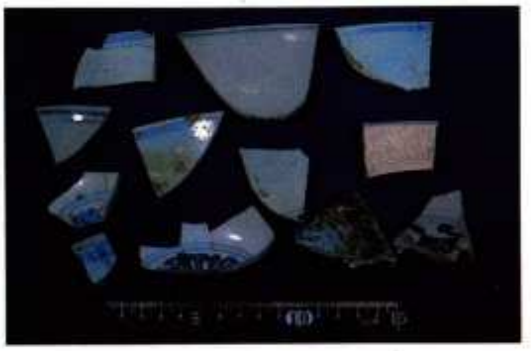


㊸ 染付碗



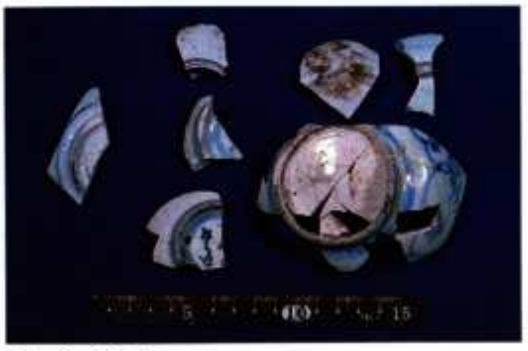
㊹ 染付碗

PL. 21



㊺ 染付碗

㊻ 染付碗



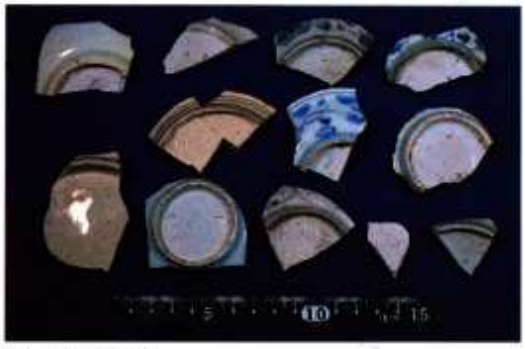
㊼ 染付碗

㊽ 染付碗

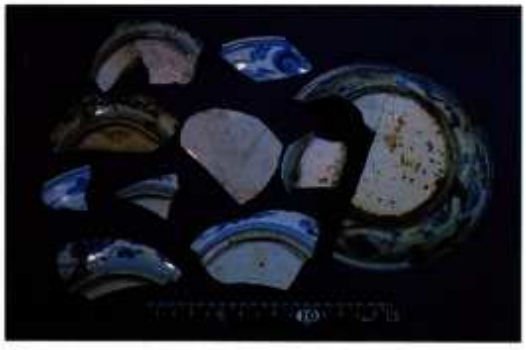
PL. 22

㊾ 染付皿

㊿ 染付皿



51 染付皿



52 染付皿

PL. 23

㊸ 染付皿

㊹ 染付皿

㊺ 染付皿

㊻ 染付皿

PL. 24

㊼ 染付皿

㊽ 染付皿

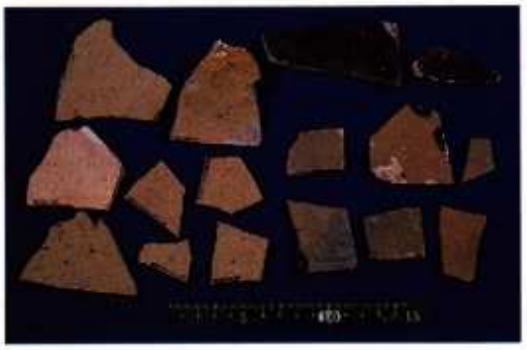
㊾ 染付皿

㊿ 染付皿・盤

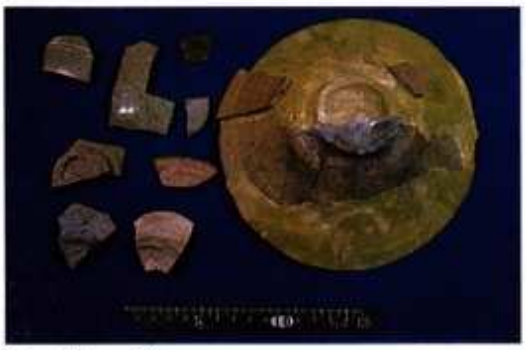
PL. 25

㊶ 赤　絵

㊷ 中国天目茶碗



㊸ 中国鉄釉壺



㊹ 朝　鮮

PL. 26

⑥⑤ 美濃瀬戸（15世紀後半）

⑥⑥ 美濃瀬戸（15世紀後半）

⑥⑦ 美濃瀬戸（15世紀後半）

⑥⑧ 美濃瀬戸（15世紀後半）

PL. 27

㊾ 美濃瀬戸（15世紀後半）

㊿ 美濃瀬戸（大窯Ⅰａ期）

(71) 美濃瀬戸（大窯Ⅰｂ期）

(72) 美濃瀬戸（大窯Ⅱａ期）

PL. 28

⑬ 美濃瀬戸（大窯Ⅱｂ期）

⑭ 美濃瀬戸（大窯Ⅱｂ期）

⑮ 美濃瀬戸（大窯Ⅱｂ期）

⑯ 美濃瀬戸（大窯Ⅲ期）

PL. 29

㊼ 美濃瀬戸（大窯Ⅴ期）

㊽ 美濃瀬戸（登窯Ⅰ期）

㊾ 唐　津

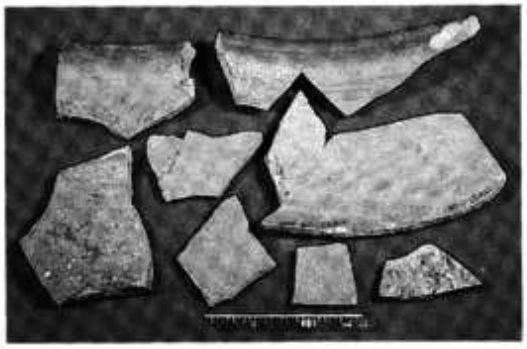
㊿ 瓦質土器

PL. 30

㊶ 珠洲甕

㊷ 珠洲壺

㊸ 珠洲擂鉢



㊹ 越前甕

PL. 31

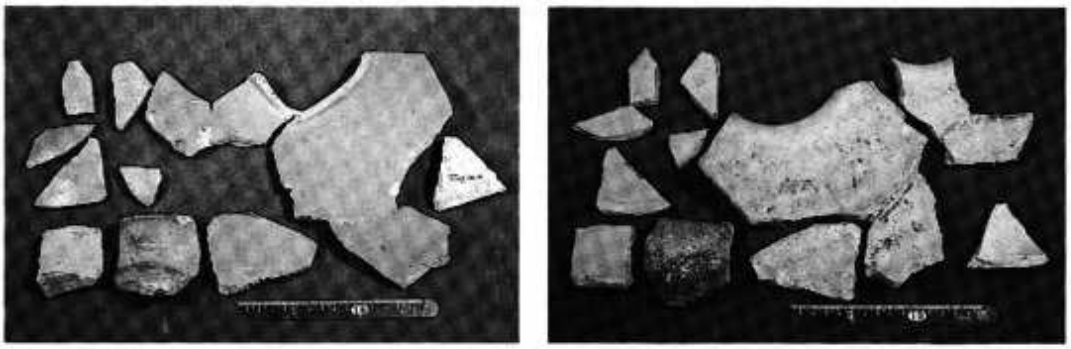
㊺ 越前甕

㊻ 越前壺？

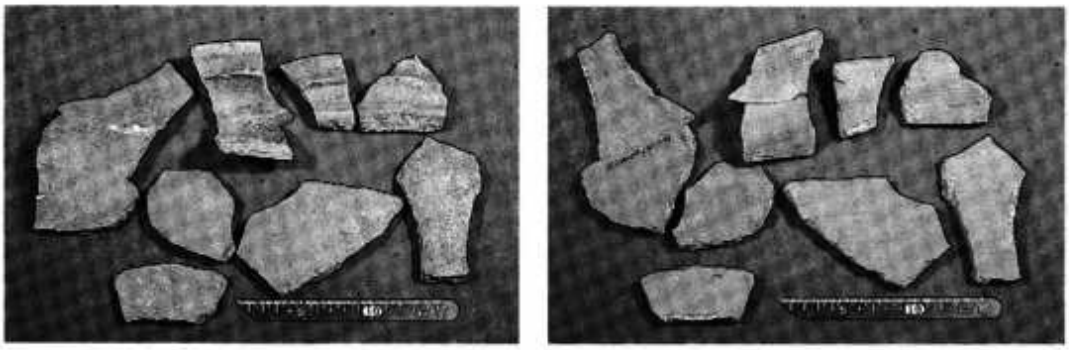
㊼ 越前壺

㊽ 越前壺

PL. 32

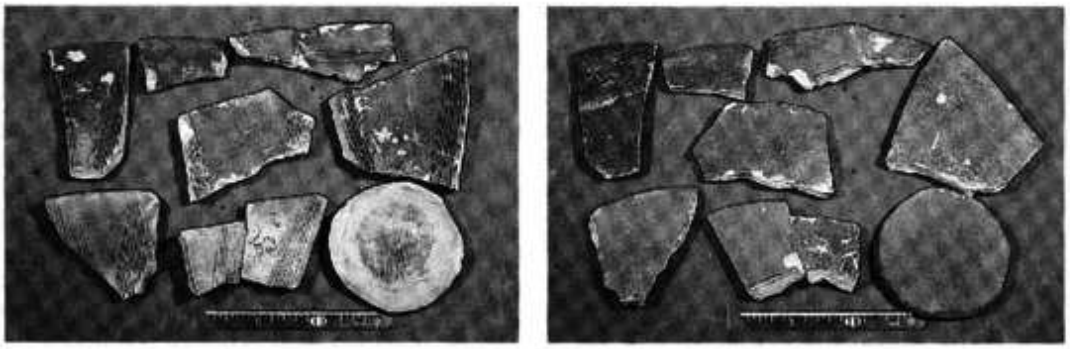


㊾ 越前壺？



㊿ 産地不詳壺

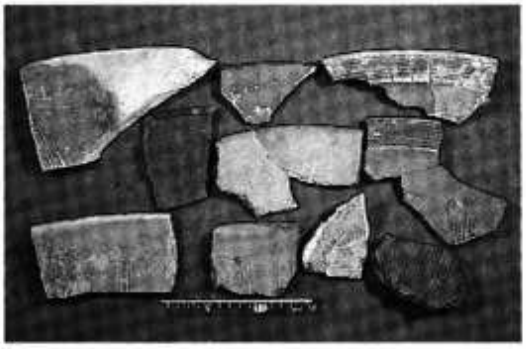
(91) 越前擂鉢



(92) 産地不詳擂鉢

PL. 33

㊸ 産地不詳擂鉢



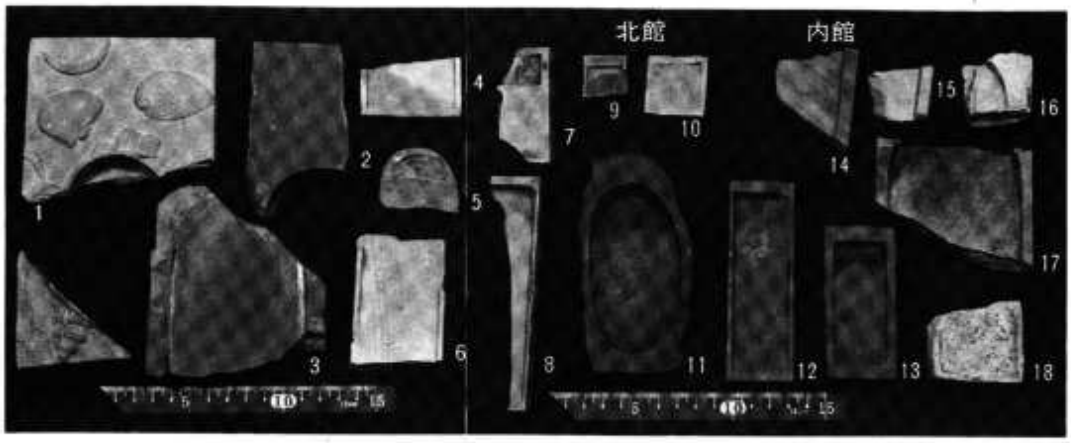
㊹ 産地不詳擂鉢

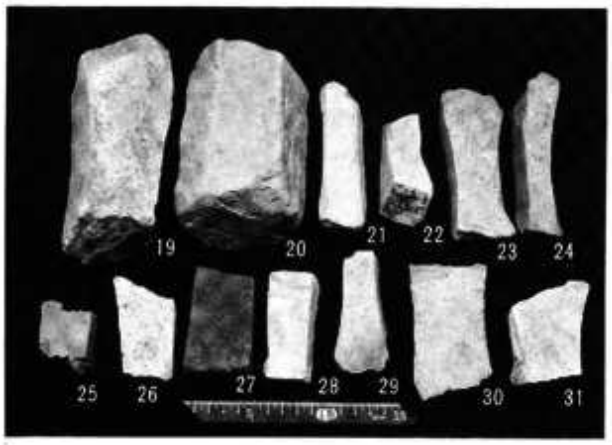
㊺ 産地不詳擂鉢・他

㊻ 底に墨書のある陶磁器

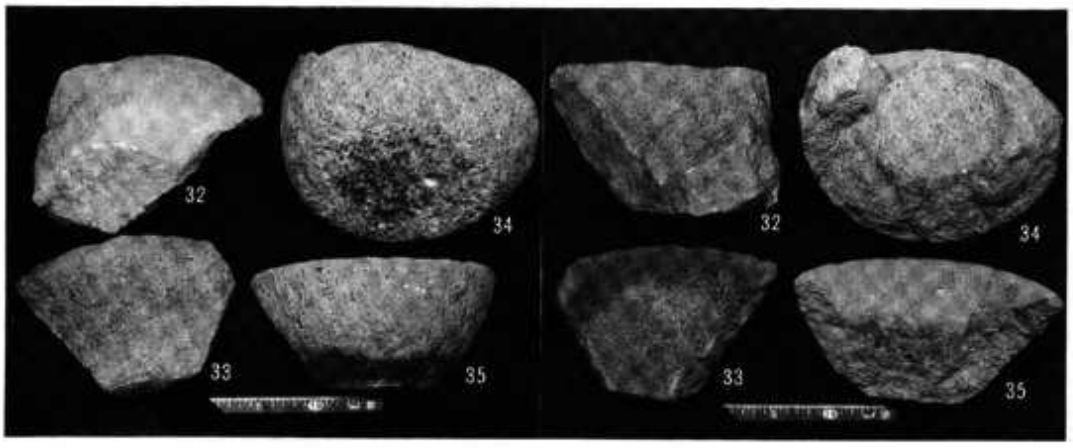
㊼ 浪岡城跡北館復元図

PL. 34





上段　浪岡城出土石硯
中段　内館出土砥石
下段　内館出土石鉢



昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 X

平 成 元 年 3 月 31 日 発 行
発行　浪 岡 町 教 育 委 員 会
印刷　青森オフセット印刷株式会社

「浪岡城跡Ⅹ」付図

内館発掘区実測図

46
47
48
49
50
51
44
45
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
SP12
SB46
SE86
SE105
SE91
SB39
SB37
SE93
ST248
SE84
SE89
SE98
SX200
SE99
SX222
SB42
SE87
SX213
SB41
SE85
SX208
SX202
ST249
SE82
SX205
SX206
SX212
SX211
SE90
SX216
SX225
SX283
SX282
SF72
SE123
SE125
SE122
SX306
SB66
SD95
SB63
SE73
SE121
SX302
SX303
SB73
SX295
SX275
SE102
SB67
SX301
SX278
SX279
SE120
SE118
SE117
ST270
ST271
SE134
SX277
ST274
SX298
SX209
SX220
SE94
SE96
SX221
SX287
SE136
SX288
SX290
SX309
SX312
SX289
SE128
SX311
SD96
SD98
SX291
SB68
SX310
SX292
SX314
SX313
SD90
SB65
SE124
ST250
SX20
SX227
SF55
SE108
SF95
SF51
SX236
SX219
SE81
SE80A
SF50
SX315
SX316
SB101
SE95
SB38
SX330
SX331
SE130
SE133
SX210
SX233
ST251
SX301
SX230
SF65
SB100
SE126
SE129
ST272
ST273
SE143
SX238
SD81
ST256
SF59
SD80
ST257
SX239
SB44
SD82
ST258
SD92
SE107
SE111
SX273
SE112
ST275
SX270
SB103
SB60
SE100
SE113
SE116
SE114
SE115
SE110
ST259
SX276
SX274
SX271
SE131
SX241
SX252
SF57
SX253
SX249
SF61
SX255
SX256
SX229
ST252
SX317
ST255
SX237
SX245
SF58
SX244
SX257
SD84
ST262
ST254
SX246
SX260
SX247
SX235
SF62
SX250
SF56
ST261
SX240
SX248
SE103
SE104
SD83
SX251
SX250
ST263
SX312
SX309
SX314
SX313